

# 日本への回帰

第一集



大学教官有志協議会  
国民文化研究会 編



大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会  
編

日本への回帰（第一集）

—青年・学生運動の新しい展開—



## はしがき

「戦後に賭ける」というヒステリックな叫びと、「戦後は虚妄だ」という否定的断定が、ひところの論壇を鋭く二分した。しかし、そのいずれの声も、掛け替えのない日々を、いのちをこめて生きて来た庶民からは遠いところにあった。この二十年という歳月は、そういう観念的な論断では到底割り切れぬ民族的体験の、苦渋に満ちた軌跡を示しているではないか。オリンピックと高度成長によって象徴される一つの時代は終わった。それは日本人の潜在的エネルギーを世界に誇示したものであったが、同時に経済第一主義の国是と個人至上の原理の限界を示したものであった。不況は深刻化し、戦後の日本人の精神全般の姿勢がきびしく問い直されている。

ベトナム戦争は膠着し、アメリカ帝国主義と北爆反対の感情的なキャンペーンが執拗にくりかえされている。しかし、北爆の非人道性が一方的に強調されながら、「北」のゲリラの残忍性が不問に付されるのは奇怪である。相手側の理性的抑制を逆用し、非戦闘員を容赦なく殺戮に捲きこむことを自明の前提とするゲリラは、極めて残酷な「政治的軍隊」である。「北」は中共の良である。戦火が国境を越えぬ限り、ベトナムの消耗戦は中共の思う壺であ

る。日本の知識人の感傷的觀念論とは全く逆の非情冷酷な打算が働いている。「ベトナムに平和を」と叫んでさえおれば、如何なる悪もカバーされるといふムードは、左翼政治原理と道徳のすりかえであり、道徳そのものの衰弱現象を示している。

中共の核開発は進んでいる。ミサイルの開発が成功すれば、日本列島は容易にその射程の中に入るであろう。三億の民兵を擁するこの巨大な軍事国家は、「政権は銃身から生れる」と呼号する指導者に率いられている。「戦争は血を流す政治であり、政治は血を流さぬ戦争である」という彼らは、流血の中で鍛え抜かれた力の信奉者である。パキスタン、インドネシア、キューバと政治的敗退を重ねた中共の膨脹力が、核の圧力を背景として日本に及んで来るのは力学的必然である。この簡明な事実が、煩瑣なイデオロギーの網の目の中で見失われているところに、中国問題の歯切れの悪さのポイントがある。

ともあれ、思想の混乱というよりもっと根深い、精神そのものの退廃現象が拡がりつつある。民族的エネルギーの涸渇をうながす根源を追求して行く時、われわれは「日本国憲法」につきあたる。この憲法の根底にあるものは、人権宣言、独立宣言の系譜につながる思想であって、個人という完結した単位が至上であり、国家はそれを保障する手段にすぎないとする。しかし、国家は個に先んじて存在し、個に優先する生きた全体である。この事実は制度

上の「全体主義」と混同されてはならない。国家を支配階級の道具とし、その消滅を目的とする共産主義国家が、例外なく強烈な国家意識を強調せざるを得ないという逆説は、構成的な国家観の限界を示しているではないか。事実、体制の如何を問わず、かかる国家観は生活経験によって修正され、克服されつつある。個人至上の憲法を強いたアメリカは、既に個人至上の国ではなかったし、「自我の解放」を外部からアジテートしている中共やソ連もまた決して個人至上の国ではない。この簡明単純な事実が見ぬけぬ程日本人の目は盲いてしまったのであろうか。

スターリン批判に始まり中ソ分裂に至る一連の事実は、マルキシズムの神話を崩壊せしめた。現実に存在するものは「社会主義」ではなく「社会主義国家」であった。近親憎悪の心理からいえば、中ソ戦争の可能性さえ皆無ではない。まさに歴史は不可測に進展する。思想界もようやく進歩主義の呪縛を脱却して、自己回復への平衡運動を始めた。ナシヨナリズム論争も、歴史の再評価も、国民不在の思想への鋭い挑戦であった。しかし、マルキシズムの理論的破綻と、それが日本の社会で現実に機能していることとは別物である。今やマルキシズムは小市民的なエゴイズムと結んで、アナキーな自己主張の根拠となり、秩序破壊の暗い衝動となって青年層の心に浸透しつつある。「原潜反対」も「日韓阻止」も「血を流さぬ

戦争」の一環である。われわれをとりまく現実の様相は、まさに「分裂国家」のそれである。非情な政治主義の風潮の中で青年の心は荒廃の度をましてゆく。

しかし、破壊のよろこびや欲望の充足の中にしか生を実感できぬようないびつな空気は、何としても正されなければならぬ。克己や犠牲や全体への献身もまた人間性のやみがたい要求である。いまだに自国の文化や伝統が、憎悪と自嘲の対象としてしか教えられない大学の学風から、豊饒な思想が生れ出るはずがない。人間をイデオロギーによって分類し、政治の系列に組織してゆく「学生運動」が残したものは、人間不信と絶望的な挫折感だけではない。今こそ、一人一人の学生の胸に、日本の青年本来の純粹な意志が奪回されねばならない。日本の青年の心に、魂と魂が響き合うよろこびが実感された時、思想の停迷は必ず打ち破られるであろう。意志は指標を見出し、視野は世界へ開かれるであろう。人の心が正確に働かねば一切の組織や制度は空しい。雄々しい意志と、みずみずしい情感をもって、果敢に現実に向かえる青年、そういう一人の「人物」の養成にわれわれの希いはかけられている。このメカニカルな時代に、野暮とも愚直ともいわれながら、一人から一人への「志」の伝達に心血をそそいで来た。この冊子は、そういうわれわれの苦闘のささやかな記録である。行間にこもるわれわれの思いをくみとっていただければ幸いである。

終りに講義要旨の掲載を許して下さった諸講師に深い感謝の意を表するものである。

昭和四十一年四月二十九日

大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会

目次

はしがき……………1

一、学問・人生・祖国

私達の学生運動……………九州大学法学部 四年 西元寺 紘 毅…5

——この一年の精神生活の記録

第十回「合宿教室」のあらまし……………35

二、合宿教室における講義

私の構想する世界の新秩序……………世界経済調査会理事 木内 信 胤…65  
日本の情緒について……………奈良女子大学名誉教授 岡 潔…99

日本政治の憂うべき動向 . . . . . 政治評論家 花見達二 . . . . . 129  
 パネル・ディスカッション——木内・岡・花見三先生を囲んで—— . . . . . 159

三、古典入門

吉田松陰「土規七則」 . . . . . 福岡学芸大学学長 玖村敏雄 . . . . . 181

山鹿素行について . . . . . 大分大学教授 筒井清彦 . . . . . 201

聖徳太子「勝鬘経義疏」 . . . . . 亜細亜大学教授 夜久正雄 . . . . . 211

天皇と天皇のみ歌 . . . . . 若松高等学校教諭 山田輝彦 . . . . . 229

吉田松陰「講孟餘話」 . . . . . 修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎 . . . . . 251

合宿歌集 . . . . . 273

あとがき . . . . . 294



■ 学問・人生・祖国

九州の南、霧島の山裾において私たちが第一回の合宿教室を開いてからすでに十年の月日が流れた。それは昭和三十一年の八月だったが、その春にはソヴェエトでは第二十回の党大会においてスターリンが批判され、その秋にはハンガリーに動乱が勃発するという画期的な年だった。それは第二次大戦終結後十年間、世界をゆさぶってきた共産主義の神話が終った年だった。

私たちはその合宿教室の報告書に「混迷の時代に指標を求めて」という表題をつけたが、今にしておもえばすでに戦後の混迷の時代は終り、新しい秩序への胎動が世界的な規模において動きつつあったのである。

だがそれから十年、私たちの祖国日本は、かかる世界史の開展の中に、自らの進路を力強く切りひらいて、この十年を、充実した、稔り多き十年たらしめ得ただろうか。たしかに日本においてもソヴェエトの神話は終りを告げたようである。だがすぐさま中共の神話がそれにとって代った。昭和三十五年の安保闘争もかかる神話が

生んだ悲劇にはかならなかった。

×

×

×

思えば戦後の混迷はあまりにも深かった。国民生活に統一を与えようとするすべての動きは、反動の一語に葬られ、祖先の業績を心をこめて偲ぶ道も断ちきられたままに、私たちは「日本」という祖国の名前すら、すなおに呼ぶことが出来ない重苦しい空気の中に生きることを強いられてきた。その間、アメリカ——ソ連——中共と、日本人の心を呪縛する強国のかげは、めまぐるしく変転していったけれども、私たちはその呪縛を断ち切る勇気の根源——祖国への愛情——を見失ってしまった。すでに久しい。すみきった秋空をのぞむようなおもいで、「日本」という言葉を高らかに呼ぶというさわやかさは、日本人にとってすでに遠い感覚となってしまう。た感がある。

×

×

×

昭和三十一年から今日まで霧島——福岡——佐賀——阿蘇——雲仙——桜島——城島と、九州

の各地で、全国の二百名前後の青年学生を集めて行ってきた私たちの合宿教室は、かかる呪縛の結び目を一つ一つときほぐしながら、日本人として生きてゆくさわやかなおもいを、青年の胸に回復する運動だった。

こうして十年の月日は流れた。

十年前、木の下がぐれに流れていた隠り水も、今はささやかながらせらぎの音を心ある人の胸にひびかしめつつある。混迷の闇は深いが、ここに集う青年、学生の目の輝きの中には疑いもなく未来への曙光がある。いつの日か青年、学生のすべの心に、日本の青年として生きるよろこびをたしかめあう日を念じながら、私達  
のいとなみは、これからさきもたゆむことなく続けられてゆくであらう。

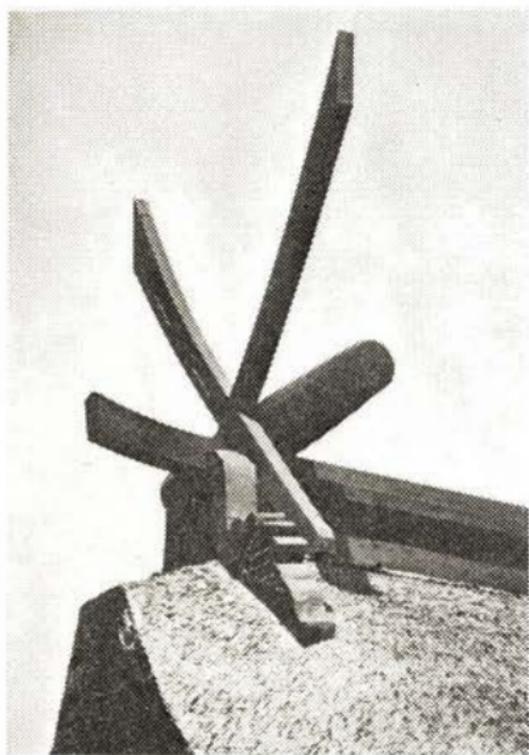
---

# 私達の学生運動

——この一年の精神生活の記録——

九州大学法学部 四年

西元 寺 紘 毅



思想生活の目覚め

読書会―新たなる出発

地区別合宿―大合宿への前進

福岡合宿（第一次前進の集い）

八木山合宿（第二次前進の集い）

学内活動から城島合宿へ

この一文は昭和三十九年八月桜島で行われた合宿より、いくつかの小合宿を経て四十年八月別府郊外の城島（きじま）高原において行われた合宿に至る、一年間の歩みを記録した学生の手記である。

## 思想生活の目覚め

——昭和三十九年八月 桜島合宿——

私達は大学に入学して以来、学問とはこんなものだろうかと常に思い悩んできた。確かに大学では多くのことを学ぶ。しかしそこで学んだものは、ただ知識として理解すればそれで事足りるとされ、私達を豊かにしてくれるものとはどうしても思えない。私達の頭の中では理論体系が綿密に組み立てられていくが、その透間から吹いてくる寒々とした風を実感しないではおられないのだ。何かが間違っている。そういう思いをどうしても打消すことができなかつた。その間にあってある者は政治運動に走るけれども、その猛々しい叫び声も、私達の寒々とした、むなししい思いをいやしてはくれない。それどころか、そういう人の口をついて出る闘争的なスローガンが、ほかならぬそのむなしさの裏返しにしかすぎないことは、一寸でも真面目にものごとを考えようとすればすぐわかることなのだ。一体これでいいのだろうか。大学生活というこのかけがえのない私達の時代は、学問をすることによって、もっと厳しく、激しく、私達の生命が燃焼する時代ではないのか。これは大学生活を真剣に生きようとすれば、誰しもがいただく共通の感慨なのだ。

そんな時、私達はある機縁から、国民文化研究会主催の学生青年合宿教室に参加した。そ

これはこの城島での合宿より一年前の昭和三十九年八月、桜島において全国から集まった大学生を中心に行われた合宿であった。そこで触れた言葉は学園内で接する言葉とはどこか違っていた。過激なイデオロギー闘争や、やり場の無いニヒリズムの中で、一人一人に分断され荒廃してしまった学園に生きている私達は、はじめはその言葉に対して恐いような、反発したいような気持ちが出るのを否定できなかった。しかしいつかその言葉は、私達のそういう逡巡を打ち破って、いびつに閉ざされた私達の生命をよび覚すように生き生きと心に迫ってきた。その実感を、玉川大学の原君は、合宿が終わった後、次のような言葉でしたためている。

「何だかむやみにうれしい。はっきりした一つのイデオロギーを発見したようこびだらうか。否そうではない。今まで持っていた知識や確信が、皆あやしげなものになってしまった。それでもうれしい。そんな知識などに勝るようこびを体験した、と信ずることができるからだ」

合宿教室において私達は「人の心」に正面から取り組むことを要求された。「先人の言葉にその心を偲ぼう」「心を開いて友と語り合おう」「自分の心をうちつけに表現するように努力しよう」そういうことを実践していく場が合宿教室であった。私達は心を一つにあつめて古典を輪読するという体験をもった。それを通して私達は、先人に学ぶには心から先人を敬う念をもって、その思いを受け継ごうとする虚心な姿勢が必要だと知った。古人がみずか

らの一生を託して残していった言葉には、私達は全心を傾けて、命がけで取り組まなければならぬのだ。古人の肉声を紙背に聞こうとする姿勢がなければ、学問は意味をなさないのだと心を整えた時、古人はもう私達の目前にいた。

友との話し合いの場で、私達はこれまで、自分に何一つ責任の帰ってこない、他人の言葉で物事を論じてきた。だがその安易な姿勢を、私達は鋭く指摘された。私達は自分の言葉がこわくなった。喋れなくなった。今まで隠し通してきた自己の学問方法の誤りが、表面に引き出された思いがした。今までの自分がめっちゃくちゃになっていくような気がした。しかしこの苦しい気持を、なんとかして友に伝えたかった。言葉を捜した。ときれときれに自分の苦しみを述べていった。友はその拙い言葉の一つ一つを、かみしめるように聞いてくれた。この苦しい体験の中から、私達は自分の思いをひたむきに、うちつけに述べた言葉は、どんなに拙くても人の心を打つものだと知った。わずか五日間ではあったが、こういう触れ合いの中で、私達は生涯の友を見出し得たのだ。明治学院大学の井上君は「当初かたくなな心を持っていったが、日が経つにつれて、その気持がだんだんほぐれていくような暖い気持になっていった。このまま皆と別れていくのが本当につらい気持だ。もっとももっとこうしていたい」と合宿感想文で述べている。自分はここにこうして友と共に生きているのだという実感は、何物にもかえがたいよろこびであった。

私達は合宿教室において和歌を作った。自分の心の動きをそのまま表現せよと教えられた。なかなかできない。自分の思いを直截に言葉に表わすということが、こんなに難しいことなのか。私達は愕然とした思いだった。先人の歌をよめば、心と言葉が一つになっていく。こんな歌ができないものだろうか。私達は苦しみながらも作った。それでもどうにか自分の思いを三十一文字に託し得たと思えた時はうれしかった。友も「いい歌だ」と言ってくれた。歌を作るといふことがこんなに厳しく、又うれしいことなのかと私達は思った。そういう体験をつみ重ねているうちに、自分は日本人だということが、しみじみ実感できるようになった。古人の言葉に触れ、和歌を作ることによって、自分が日本人だと思えるようになるとは、これまでの私達には思いもよらぬことであった。日本語には日本の生命が込められている。その実感は、私達の小さな生命が、ひろやかな日本の生命につながっていくといふよろこびとなって私達の心に拡がっていった。そのような実感に支えられた時、先生方の言葉も、友らの言葉も、私達の心を揺り動かしてくるかけがえのないものとなっていった。私達はそこに人の言葉を素直に信じ、感動できる自分を見出し得たことが、何よりもうれしかった。私達は先人の思いを受け継いでいかねばならないと、深く心に決意した。偉大な人格に触れ、私達もそこにつながっていかうと意志した時、私達の思想生活は始まったのだ。感動から決意へ、これこそ真の学問の出発ではないだろうか。私達はこれまでの学問から、

人の心に触れようとする姿勢が欠けていたことを知った。合宿教室で体験した、自分は過去の日本人と共に、又これらの師友と共に生きているのだという実感を、いかに今後の学問の上に客観化していくか、これが私達に与えられた根本の課題なのだ。私達一人一人はそのような痛感を胸に秘めつつ、桜島の地をあとにして、学園生活へともどっていった。（桜島合宿についての詳細な記録は、「新しい学風を興すために」——第三集——をご参照いただきたい）

### 読書会——新たなる出発

九月に入り、大学の授業が始まると同時に、合宿に参加した友は大学別に、あるいは各地区別に集まり、読書会がもたれるようになった。まず私達は合宿で教えられた書物を、心を一つにして読み合おうではないか。この勉強会に、一人でも多くの新しい友を誘ってこよう。——地味ではあるが堅実な努力は、このようにして開始された。

福岡地区においては、九州大学の学生を中心に、合宿教室で共に読み合った、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読会が、毎週一回続けられていた。（この本については、昭和三十八年雲仙合宿記録「新しい学風を興すために」——第二集——を是非お読みいただきたいと思う）

合宿で指導していただいた諸先輩が、片時も忘れることなく心の支えとして読んでこられたこの本を、私達なりにせい一ぱい読み合つていくということは、現在の私達にとって、何よりもまずやらねばならぬことであつた。内には氏族の専横を中心とする国政の混乱、外からは我国未曾有の外來文明の流入という時代であつて、「共にこれ凡夫のみ」という人間性の眞實を直視された聖徳太子、その太子の生涯に深く心を動かされた黒上先生、これら先人の残された一つ一つの言葉に、心を込めて接するということは、概念の操作が学問であるという考えに慣れてきた私達にとっては、文字通り苦痛であつた。三、四時間かかつて、二、三ページしか進まぬことも稀ではなかつた。しかしそこで発見し得た一つの言葉を暖めていくうちに、それが私達の心の支えとして刻みこまれていくよろこびは、何にもかえがたいものがあつた。その貴重な体験を、九州大学の古川君は、国民文化研究会の機関紙「国民同胞」に、次のように書いている。

「友と話をする場合、どうしても相手を理解し得ず、所詮理解し合うなんて無駄なことだと考えてしまいがちになる時、『我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ』と何度もつぶやいてみる。僕はなぜあんなに、どちらが正しいかということばかりに、とらわれていたのであろうか。彼の言うことを、じっくり聞いてやるだけの心のゆとりが、なぜ持てなかつたのだらうか。その人自身の深い悩みがあり、心がある。それをなぜ

理解してやることができなかつたのであろうかと、深く反省させられるのだ」

東京地区の学生は、「古事記」の輪読を続けていた。早稲田大学の今林君は、輪読の感想を「古事記の中にあらわれる無数の神々や英雄は、実によく笑い、泣き悲しみ、そして烈火の如く怒る。それは人間本来のありのままの姿であり、湧き出づる強烈な感情の表現なのであろう。とにかく瞬間瞬間をうずめつくす全てが、精一杯生きていくように思える。」と述べている。このように一冊の書物に、先人の心を偲ぼうとする努力は、京都でも、岡山でも、長崎、鹿児島でも、全国の各地区、各大学において、続けられていったのである。

#### 地区別合宿——大合宿への前進

昭和三十九年十月十九日に、今林賢郁（早稲田大学）、寺川真知夫（神戸大学）、西元寺紘毅（九州大学）の三名が、それぞれ関東、関西、九州を代表して東京に参集した。四十年夏の夏季大合宿までの活動を、具体的に立案するためである。その結果、まず十一月下旬から十二月上旬にかけて、関東、関西、九州において、それぞれの地区の学生を集めて、地区別合宿をもつことに決定し、さらに各地区の実情に基づいて、来年の夏季大合宿の幹部学生として、地区別に五十名を選出して、一月に全国の二十余名が福岡に集まり、「夏季大合宿を目指して——四十年第一次前進の集い」として、二泊三日の合宿教室をもつことを決定し

た。

三地区では前記三名を中心にして、地区別合宿の計画が練られた。この合宿には、桜島合宿経験者のみならず、新しい友にも参加をよびかけた。

「関西地区合宿」は、十一月二十一日から二十三日まで、京大、神戸大、岡山大、滋賀大の十三名の学友が集い、鮮やかな紅葉に色どられた京都日向大神宮においておこなわれた。日程は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」に触れた体験の発表や輪読、和歌の創作や相互批評がそのほとんどであった。京都大学の井上君は、自然の美しさをそのまま歌に詠もうとすることの難しさを、自分の作歌体験から述べながら、さらに明治天皇の御製に触れた時の実感を、次のように記している。

「うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな

この天皇の御歌には、凝った表現や、難解な言葉は全然ない。しかも私が歌いたいと思っていた情景がすべて歌い込んでいる。この歌は自分の思ったことを、そのまま三十一文字にすれば歌ができるのだと、私自身に語りかけているような気がする」

対象の美しさに敏感に反応し、そこから生まれた感動を正確に表現することは難しい。なぜなら自己の感情の動きを直視して、それを言葉に統一し、客観化しなければならぬからだ。言葉に統一するという修練が、私達の思想を鍛えていく方法なのである。私達は和歌を

作ることによって、自己の思想を鍛えるとはどういうことなのかを、体験的に知ることができるのだ。

同じ日、九州の太宰府天満宮内においては、鹿児島大、鹿児島経済大、熊本大、長崎大、福岡大、九州大の二十一名による「九州地区合宿」がおこなわれていた。そこでは古典の輪読、和歌創作などと共に、現代の国際政治の動きを、総合的に把握する勉強が続けられた。九大の西元寺は、自分が受けてきた戦後教育の体験をふまえて、私達は戦後最高のものとして教えられてきた「平和と民主主義」という理念に、あらためて正面から取り組み、その真の姿を見極めてゆかなければ、揺れ動く国際社会に、敏感に反応することができないのだと訴えた。「私は君の発表に夢中で聞き入った。聴き入るといよりも、君と一緒に分が話しているようであった。身震いするようなられしさを感じたのは、これが初めてであった。心が通じるというのは、このことではないのか。若人の力、意気、情熱を一気に私の胸に叩きつけてくれたのだ。本当にありがとう」と鹿児島大学の藤崎君は、友の発表に触れた時の心の躍動を、このように感想文に綴っている。

又熊本大学の平君は、次のようにその決意を述べている。「私達はこの同信の友と共に学べる喜びを、自分達だけのものとせず、未だこの機縁に触れないでいる数多くの学友に働きかけながら、共に学んでゆかねばならないのだ。」

「関東地区合宿」は、早大、中央大、東大、亜細亜大、神奈川大、国学院大、東京理大、日本大の二十名の学友が、東京都下八王子の青年の家に集い、十二月三日から二泊三日の日程でおこなわれた。「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読の中で、亜細亜大学の岩越君は、聖徳太子の「悪を遣り善を取るは、必ず己に始まりてまさに能く人を勧む」というお言葉について、「人は様々な煩惱執着にとらわれた不完全な人間である。しかし全体のことを心から念ずるが故に、凡夫の身でありながらも、自ら正しくしていこうとする姿勢が大切である。必ず己に始まるとは、志を立てるといふ意があると思う。太子のお言葉はどれをとってみても、その奥に共にこれ凡夫のみという痛切の体験が、秘められているように思えてならない」と太子の心に我が心をはせている。

言葉の意味を、表面的に受け取るのではなく、その底に流れている先人のところを、私達の体験に即して静かにくみ取るところから、私達の学問は出発する。岩越君の言葉は、その研究方法に立った真摯な発言であった。

このように各地区の男子学生の間で、来年の夏季大合宿を目指しての前進の歩みが始まっていた時、桜島合宿に参加した女子学生の間では「和歌通信」という形で、お互いの友情が深められていた。これは十三名の合宿参加の女子学生が、その時々を思いを文章と和歌に託

して、東京の田川さん（武蔵野女短大）、本城さん（日本体育大）のもとに送り、二人が美しいガリ刷の小冊子とし、合宿参加者に転送したものである。そこには日常の怠惰な生活の中で、合宿での感激を思い出としか感じられなくなっていく自己を厳しく見つめる文章や、合宿での尊い機縁が、文集という形でつながっていくよろこび、又女性として生きてゆく上での、真実の道を求める姿勢が、謙虚に綴られている。

こぞの夏共に学びし友どちらのたよりよみつつおもはしのびぬ

おのおのにくらしたがへどなつかしき友らのみ文ここにつどへり

武蔵野女子短大 田川 美代子

各大学の学内活動も、しだいに活発となつていった。京都大学においては、井上君の下宿に友等が集まり、読書会が夜遅くまで続けられ、九州大学では古川君、稲津君を中心に、大信和会の例会が毎週土曜日にもたれ、又夜を徹して友と語り合う場も、何度かもたれた。鹿児島大学においては、社会科学研究会の例会が毎週定期的に行われ、さらに、鹿経大、宮崎大、熊本大、九大の学友を迎えて、九州最南端の坊ノ津で、二泊三日の小合宿が十月下旬に行われた。熊本大でも九大の友を迎え、十二月十九日から二泊三日間、阿蘇青年の家で合宿をもった。このような各地区の学友の動向は、手紙や印刷物の交換によって、他の大学の友らへの、かけがえのない励ましとなつていったのである。

## 福岡合宿（第一次前進の集い）

昭和四十年夏季大合宿は、別府城島高原に決定した。大合宿を目指しての「第一次前進の集い」は、一月八日から十日まで、福岡市の百道海岸に臨む水光苑で挙行された。窓の外は玄海灘の寒風が吹きすさぶ中で、熱気のこもった話し合いが続いた。参加学生は、城島合宿の幹部学生候補と目される二十五名の友であった。参加者の所属学校名は、次の通りである。

東大、早大、中央大、亜細亜大、東京理大、京大、神戸大、岡山大、九大、長崎大、熊本大、宮崎大、鹿児島大、鹿児島経済大

最初に、参加者がどのような心構えでこの合宿に臨んだかを、吐露し合う時間をもった。自己の思いを、そのまま真率に語りゆく友の言葉は、参加者全員の心をさらに引き締めていった。亜細亜大学の永島君は「激しい気迫と若さに満ちた、強い自分を確立したい」と決意を述べ、東京理科大学の高野君は「僕は友等がほしい。一人でいるのが耐えられない毎日を送っている」と友の一人一人に訴えかけた。

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読の時間は、ともすれば古典を材料にして、自己の平常の感想を述べるといふ態度に陥りがちな空気を、国民文化研究会理事長の小田村



（福岡・水光苑）

先生によって厳しく指摘され、会場には異常な緊張が満ちあふれた。

われ知らず息づまるごとく輪読を終へて静かに波の音を聞く

この稲津君（九大）の歌は、その時の全員の気持を代表している。先人の痛切の思いから発せられたかけがえのない言葉は、ただならぬ精神の緊張をもって、読みとらねばならない。これが私達が古典に触れる時に要請される絶対の方法なのである。

輪読の後、今林君（早大）、岩越君（亜大）が、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」が、これまでの自己の精神生活において、どんなに大きな支えとなってきたかを、学園での体験を通して発表した。両君とも「まごころをつくす」ことの重要さをこの本から教えられ、それをたびたび口にしてきたが、本当に自分はそれを実践してきただろうか、厳しく自己に問いか

けながら決意を述べた。両兄の体験発表を聞いて、鹿児島大学の徳田君と宮崎大学の行武君は、こもごもその思いを次のように歌い上げている。

言ひはなつ真心こそが全てなりといふ言葉迫りく訴ふるごと

徳田 浩士

語りゆく友の言葉に現はるる誠の道を歩む心は

行武 潔

一日目の夜は、井上君（京大）が親鸞の言葉を引きながら、その偉大さに触れた感銘を述べ、寺川君（神戸大）は吉田松陰の「学を云ふは志を主とす。その曲と正とに至りては第二義に落つるなり」という言葉について、「学問はそれに向う姿勢が重要なのだ。松陰にとって、人を益し己を益すとは、人に勧めて、共々に人の道を学習することだ。これが学問の根本であると思う」と語った。

二日目の朝は、福岡県立修猷館高校の小柳先生が、「文武論」と題して講義された。先生は山鹿素行の「謫居童問」の中の言葉を引きながら、「常態の中においてことを行う原理を『文』とすれば、『武』は非常に對する原理である。両者は互に補足し合つて一つの全体をなし、統一した人生を完成する。それは善悪の問題ではない。人生のありのままの姿に名付けられた名称にすぎない」と「武」の本質を鋭く解き明かされ、人間は『非常』に對処するために常に精神を鍛え、心を整えねばならない。しかし現代人は精神を甘やかし『武』のみを糾弾する。私達は人間の精神を鍛えるということを完全に無視した、『軍備をもてば戦争

をやりたくなる』という思考に訣別しない限り、永久に『武』の問題を考えることはできない』と力説された。私達は眼から鱗が落ちるといふ思いで、先生の言葉を息をのんで聞き入った。私達が常に考えねばならぬ再軍備の問題の本質を、初めて指摘されたような衝撃を味わったのである。

午後は西元寺（九大）が、九州地区合宿での研究発表をさらに追求して、国際政治に取り組む姿勢について発表した後、鹿児島大学の川井先生がそれを受けて、固定概念として物を見る誤りを論述され、さらに国民の素直な真情の吐露を封じて、概念を固定化していく共産主義の誤りを、生々しい実例を引きながら鋭く指摘された。私達は先生のお話を聞きながら、共産主義の脅威を身近に感じると共に、強い緊張感をよびさまされる思いであった。

福岡県立若松高校の山田先生の和歌についてのお話は、短い時間ではあったが、「歌とは、人の生命が一つの形として統一表現さるべきものであり、共にこうして歌をよんでいくと、たくさん人の生命が集まって、そこに響き合う生命の祈りが、聞こえてくるような気がする」という言葉が深く胸に残った。

最終日の小田村先生の御講義は「おおらかさへの帰向」と題するものであった。「学問とは、人間が心に思索したことを、客観化すべく努力することだ。私達は知識を日常生活の中で実践していかねばならない。精神科学の分野から、自然科学の実験に類するものが欠落し

ているところに、現代の学問方法の根本的な誤りがある。古来から日本民族は、外からあらゆるものを受け入れ、それを豊かに実生活に結びつける、おおらかな心を有してきた。現代はそのおおらかさが失われ、主義に局分され、主張に縛られる、みみっちい心になってしまった。そのみみっちい心から脱出し、おおらかな心に帰らぬ限り、現代日本の混迷を打開する道はない。それを今の時点でいえば、合宿で得た体験を、率直に、誰はばかることなく、堂々と実修していくということなのだ」

私達は合宿で学んだことを、学校の講義の時、隣りに座った友に、自分の言葉で伝えなければならぬ、というよりそうしないではおられないはずだ。それを躊躇し、自分の心の中に閉じこもってしまった時、みみっちい心情が頭をもたげてくる。もっと大らかに、もつとのびのびと、お互に日本人として生きるよろこびを語るのに、何のはばかりがあるだろう。ともすればちこちこまろうとする私達の心は小田村先生の言葉によって嵐のようにゆさぶられるおもいだった。

二日目の夜から三日目にかけて、今後、城島合宿までのスケジュールを検討し、次回の小合宿はこの福岡合宿で学んだことを学友に伝える体験の中で、自分一人ではどうにもならなくなつた切実な問題を一人一人が心に刻みつけて集まってくることを確認し、参加人数は、福岡合宿を約二倍に拡大して、四十名とすることに決定した。

「ごくわずかの日数が一週間ぐらいに感じられた。何だか二十余名の友は、皆自分の兄のような気がして、みんなのひざもとにすがりつきたいような衝動を覚える。この合宿で知ったことは、人間とは実に大きな存在であって、膚でじかに感じることでできる、偉大な一大生命体であるということである。みな的心と自分の心は決して別物ではあり得ない」という岡山大学伊藤君の感想は、けっして彼一人のものではなかった。

### 八木山合宿（第二次前進の集い）

三月二十八日、私達は再び全国から集まった。場所は福岡市郊外の飯塚市八木山の青年の家である。福岡からバスで約一時間、美しい緑の山なみに囲まれた、静かな景勝地であった。時は春まだ浅く、吹く風は冷たかったが、緊張した私達の頬にはそれも心地良かった。日程は三泊四日、参加学生は四十名、参加校は福岡合宿の十四校に、新たに鹿児島経済大、日本大、玉川大の三校が加わった。ここに集まった四十名は、城島合宿を目指して研修を重ね、四十の心の一つにして前進の姿勢を確認し合い、さらに城島合宿を中心になって運営していかねばならぬ使命をおびた友らなのであった。

合宿第一日目の夜から二日目の朝にかけて、昭和三十九年十月に東京に参集した、今林（早大）、寺川（神戸大）、西元寺（九大）の三名が、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

についての研究発表をおこなった。西元寺は、肉身間の恩愛の情を、国民として生きゆくべき道に拡げていかれた聖徳太子の御精神に触れたことにより、これまで親の恩を感じるのみに止まって、ともすれば国を想うという心にまで自己の精神生活を揚げ得なかつたところが、はたして許されるであろうかと、痛切な思いを述べつつ、「私達の先人は、肉親を思うという自然な心情を、そのまま国を想うまことの道にまで高められたのであった。かかる先人の厳しい一生によって、日本という国は、相続されてきたのだということ、私達は片時も忘れてはならないと思う」と結んだ。

二日目の午後は、稲津君（九大）が、明治天皇の御製を紹介した。ささやかながらも、これまで自分達で和歌を作ってきた私達は、天皇の民を思われる心がどんなに深いものであるかを、天皇の御歌を通じて直接感じることができた。和歌の表現を通して天皇のお心



（八木山・青年の家）

につながるということは、私達にとってかけがえのない経験であった。

さらに中央大学の磯貝君が、正岡子規の「歌よみに与ふる書」と、子規の歌に触れながら、次のように語った。「子規は純粋な感情の世界に、歌を甦らせようとする。理屈は理屈にすぎないが、感情は深くなればそれだけ人を感動させる。なぜなら感情は人間その人から発せられるものだからだ」

理屈は生命を分断する。その理屈から感情をときはなつて、深い感情生活の中に人間の生きるべき道を求める姿勢こそ、私達が和歌を詠むことによって体得しようとしているものである。平君（熊本大）も、和歌を詠むことが、怠惰に流れがちな自己の日常生活の救いであった、と体験を述べた。

夜は古川君（九大）が「西郷南州遺訓」を読みながら、溢れるばかりの憂国の至誠に生きた西郷隆盛を讃仰し、その一生を力強く訴えた。京都大学の溝江君は、「学園内の怠惰な風潮にのみ込まれそうになりがちな自分が、なんとつまらぬものであるか。しかしそうであるからこそ、私は皆と手を取り合つて、進んでいきたいのだ」と伏目がちに、自己の苦しみと決意をつぶやくように語った。自己の苦しみを友にさらけ出そうと懸命に努める溝江君の姿に、友らは次のような歌で応えた。

もろもろの生命かたむけ語らひてひとつ心に生きむとぞ思ふ

うちつけに声ふるはして思ひのぶる言の葉ますぐに我が胸をつく

ひとところを見つめしまなざしかの友の直き心を信ぜざらめや

私達の発表と共に、先生方の御講義も、私達にとって忘れがたいものであった。山田先生は、佐久間艇長の最後や乃木大将の殉死にみられる「人間の高貴」に深く心を動かされた夏目漱石の文章を引きながら、「こういう生命の維持という強烈なものを克服する義務への献身が、圧倒的な西洋文明流入の時代に日本を支えてきたのだが、現代の私達はそういうものに無縁なものとなってしまった。私達にとって明治の精神を偲ぶということは、生きた、統一した人間の精神を偲ぶことだと言えよう」と説かれた。

小柳先生は、「論語」の言葉をたどりながら、孔子がよく使った「敏」という言葉について、「価値判断と行為とが、間髪を入れずに直結するその美しい、生き生きした世界―そのすがすがしさを、孔子は『敏』という言葉で表現した。だがその敏感な生命は、それにふさわしい的確な言葉を生む努力によって、支えられていなければならぬ」と述べられた。周囲の現象に敏感に反応するみずみずしい生命力こそ、私達の思想生活の根源でなければならぬのである。

川井先生は、「今や天皇統治の問題を、真正面から取り上げねばならない時だ」と、国民として第一に考えねばならない天皇の問題について、現代人の歴史観に触れながら、古来日本民族が心のよりどころとして守り育ててきた天皇統治の本質について講義された。天皇のお心を偲ぶという姿勢の欠けた現代の天皇論議に慣れて来た私達にとって、この合宿で御製に触れ、川井先生の学問の力を秘めた力強いお言葉を聞いたことは、何よりも大きな力を恵まれた思いであった。

この八木山合宿には、韓国のソウルの日本文化研究所、朴鉄柱先生が参加された。先生は二十年ぶりに訪れた日本が、その精神においてあまりに荒廃しているのを見て強く失望されていた時、東京で偶然の機会に小田村先生と会われて、わざわざ九州の地まで来られたのである。

「日本人はあまりに楽天的すぎる。暗い韓国からは、明るい日本がよく見える。日本人は泰平の空気の中で、自国の文化を省みることもなく、防衛の意志すらもたない。それは自らに対する怠慢であり、誇りの放棄なのだ」と力説され、さらに先生ご自身の体験から、「共産主義の美辞麗句と共産党の苛酷な現実とは全く別なのだ。なぜ現在韓国国民は、国の許容力をはるかに越えた六〇万の軍隊をかかえてまで、じっと貧に耐えているか。それは朝鮮事変のさいの共産主義の恐怖を、国民が体をもって痛感しているからなのだ。韓国が共産圏に

併合されれば、日本はわずか対馬海峡をはさんで、共産圏と対峙せねばならなくなる。日本人は一体そのことを知っているのか」と切々と訴えられた。先生の日常の緊張した精神生活からにじみ出る生々とした言葉が、私達の胸を強く揺り動かしていった。私達のその思いは、せきを切ったように、歌となってほとばしり出ていったのである。

神戸 大 寺 川 真知夫

日本を訪ねし喜び二日にて消ゆとふ言葉に心すくみぬ

命かけ体をはりて過されしくらしのにじむ御言葉は厳し

鹿児島大 徳 田 浩 士

外国の師の君さへも憂ふかなわが日の本の乱れし今を

いざ立たんふるひたためや友達よわが日の本の明日築くべく

宮 崎 大 行 武 潔

己が国の危機救はんとて命かけ我らに訴へらるる言葉すさまじ

鹿児島大 田 淵 勝 次

苦しみをたえて生きぬく隣国のその苦しみを共に分かたな

昨年の桜島合宿の報告レポート「新しい学風を興すために」第三集も完成したし、今年の城島合宿の案内文もでき上がった。この八木山でその二つを手にした私達の胸内には、さら

に力強く前進しなければならぬという使命感がわき上った。私達がこの合宿で得た絆をより強固なものにし、心を一つにして城島合宿に向うために、全員の通信文集を福岡で発行することになった。城島合宿を目指す私達の前進の姿勢は、この合宿でさらに力強いものとなったのである。

最後に小田村先生が「私達は人の心に真向うことにより、過去から未来へ、個から全へと縦横に貫ぬいている生命の尊さを、統一把握しなければならぬ」と述べられ、聖徳太子の「勝鬘経義疏」の中の「神情開朗ニシテ小乗ノ疑滞ナキナリ」という言葉によせた次のような格調高い歌を、別れゆく私達に贈って下さった。

神ながら心の直き人々をみおやと仰ぐわれらくにたみ

いにしへゆ雄々しさたへおほらかなる思ひに生きしぞわれらがみおやは  
うつし世をくだちゆく世と人は言へ今ぞ友らはふるひ立たむを

くぐもれる心うちひらき人といふ人の心にま向ひてゆけ

人もまたおのがくぐもるその思ひをうちひらかする友待つらむに

生くる身も尽す心もすめぐにのちのちにとともに捧げむ

## 学内活動から城島合宿へ

新学期をむかえた私達は、学園内で合宿で学んだ思いを、一人一人の友に伝えていくという努力が続けられていた。私達の運動は、スローガンをかかげて学友を扇動するという事ではない。学園内の尖鋭化したイデオロギー闘争の中で、荒廃してしまっている学友の心に、人を信じる素直な心情の大切さを知ってもらおうとする地道な努力の連続なのである。誤まった思想に対処するには、時に果敢な行動を必要とする。しかしその行動の支えとして人間は信じ合えるのだという確信を、新しい友との間に常に拡げていくことが要求されるのである。このような姿勢で未知の友を求めていく私達の運動は、私達の所属する学園のみに止まらず、近隣の大学への活潑な巡訪活動となって拡がっていった。東京地区の学生は、北陸、名古屋、静岡、群馬と、これまで縁のなかつた大学を訪ね、直接学友に話しかけながら、私達の思いを拡げていった。授業のあい間をみてのあわただしい巡訪ではあつたが、訪れた学友自身にとつても、それは自己の考えを實踐していくという貴重な体験の場であつた。東京の友と呼応して、関西では京大、神戸大から大阪の大学へ、又九州では九大、長崎大から佐賀大、大分大へと、私達の心の絆は拡がっていき、岡山大学では、孝忠君を中心

に、合宿がもたれていた。

このように、学園生活の中で実践していくことによって深められていった私達の思いは、「前進への絆」と名付けられたガリ刷りの小冊子に結集されていった。私達は身をもって交わるという切実の体験の中で、初めて自己の無知、無力を痛感する。しかし同じ時、かの友も同じ苦しみの中で、合宿での体験を心の支えとして進んでいるのだという憶念が、私達に新しい前進の力を与えてくれるのであった。「近頃ようやく、私達の進むべき道の困難さを、身にしみて感じるようになった。私達が前進するというのは、自分自身の生きている姿勢を掘り下げながら、一步一步、歩いていくようなものだとしみじみ思う」という井上君（京大）の述懐は、身をもって学問をするという体験を通して、初めて実感できる言葉だった。

日本大学の山口君は、一つのこと熱中できる自分になり得たよろこびを述べ、さらに「大切なことは、信じ得る心を持つことではないか。一事に熱中するのは危険だと考え傍観視しても、何も実り得ないとわかった。自己の身を挺して、私達は初めて正しい学問のあり方を知ることができのだ」と書いている。その文章は「客観的にも物を見る」ということの盲信からくる現代人特有の思考方法を、自力で打ち破った力強さに溢れていた。

このような私達の思想活動のただ中で、長崎大学において、学生会館の管理問題をめぐっ

て、授業ボイコットという問題が発生した。学館規約の問題が「学園の自治を守る」というスローガンに吸収され、さらにそれが「反動、国家権力と闘う」という政治闘争に発展していった。このような学生自治会の戦術、闘争に対して、内田君、森重君らは立ち上った。六月一日に「授業ボイコットは是非か」というパンフレットを配布。学生の分裂を策すものとの激しい攻撃の中で、授業ボイコットを解くのが紛争解決の第一歩だと訴えた。その後連日のピラの配布、自治会執行部との会見の中で、正しい学問のあり方を一言一言に込めて、誤った思想に真向っていった。内田君はこの活動で学んだ貴重な体験を、次のように記している。

「あいまいな概念におどらされるということは、言葉を正確にとらえていないということだ。又力対力の論理に支えられて、外的体制を変えれば、新しい幸福が訪れるという観念的な思考方法では、人間の内面とか、対象の中に入って虚心にものを考え、把握するという学問姿勢は、顧みられないのだ」

長崎大学の諸兄の力強い行動は、私達の一年間の歩みの中で特筆すべきものであり、他の大学の友にとって、これに勝る励ましはなかったのである。

「前進への絆」第二集も発行され、いよいよ城島合宿も真近に迫ってきた。私達は一年

の間、合宿で相互に研鑽し合い、又その思いを学内に拡げていく過程で、一人の未知の友と心を交わせようと努力する、その苦しみとよろこびを、限りなく味わうことができた。その時々、思いを友に訴えた時、友はそれを自己のものとして受け止めてくれた。個人個人に分断され、相互の心の触れ合いの場を見出すことができなくなってきている現在の学園にあって、私達がこの一年、共に努め合ってきた体験は、あまりに貴重であった。

全国の友が、新しい未知の友と共に、城島高原に集う日も、もうすぐだ。通信文に自己の苦しみをとつとつと訴えていた友は、又あの力強い決意を語ってくれた友は、どういふ思いをそのおもてにみなぎらせて、集まって来るであろうか。私達はこれまで育ててきた友との絆を、城島合宿での新しい友との触れ合いによって、さらに太く、力強いものにしていかねばならない。このようにして無限に拡がっていく私達の心の絆こそ、日本の尊い生命を、過去から未来へとつなぐ根源の力となっていくのだと確信しつつ、私達は合宿地へ向ったのである。



第十回

「合宿教室」のあらまし



講義及び講話

パネル・ディスカッション

読書指導・輪読・短歌創作

カット  
合宿地より望む由布岳

第九回桜島合宿終了後、九州地区では十一月下旬太宰府で、関西地区でも同じく十一月下旬京都で、東京地区では十二月初旬八王子で、それぞれ二十名程度の地方合宿が行われた。続いて翌四十年一月、班長要員二十五名による福岡合宿、続いて三月の福岡県飯塚市外八木山合宿には班長要員四十名が集って、徹底的な研鑽と修練がくりかえされた。九州大学西元寺紘毅君らが中心となって、がり版ずりの『前進への絆』が数回発行されて、幹部学生の意志の結集がはかられた。こういう小合宿の積み重ねの上にわれわれは第十回の合宿教室を迎えたのである。今回は昨年の研修テーマを踏襲して次の二つの柱が立てられた。

A、世界の動向と日本の進路（総合的な現状把握、日本人としての自覚、青年学徒の課題）  
B、基本的な人生観の探求（学問と読書の仕方、人生の表現としての和歌創作および相互

批評、国民同胞感の体験的把握）

会場は、別府城島高原、標高七五〇米、サイロと放牧の牛が見える「ホテル・きじま」である。集い来る者二百余名。八月二十日から二十四日まで、精魂を傾けて実現された四泊五日の大合宿のあとをふりかえって見よう。

八月二十日、鶴見岳と由布岳が紺碧の空にくっきりと浮かび、山肌の緑が目にしみるようだ。幹部学生は十八日からとまりこんで準備作業を完了して待ちうける。正午から続々日焼



けた学生達が集って来る。旧知の者達はお互いに再会をよろこび、初めての参加者はちょっと不安げな面もちだ。班長諸君がきびきびと受付事務を処理してゆく。高原の風はさすがに涼しい。参加者も年々多彩となって行くようだ。その内容は次の如くである。

◇参加学生学校名(男子) 〓 東京大学、高崎経済大学、富山大学、日本大学、早稲田大学、法政大学、中央大学、駒沢大学、亜細亜大学、玉川大学、東京経済大学、東京理科大学、東京学芸大学、東京工業大学、神奈川大学、横浜国立大学、防衛大学、岐阜大学、滋賀大学、京都大学、大阪経済大学、神戸大学、岡山大学、下関市立大学、九州大学、福岡大学、福岡学芸大学、西南大学、電子工業大学、佐賀大学、長崎大学、熊本大学、熊本商科大学、宮崎大学、鹿児島大学、鹿児島経済大学、その他高校生数名、

(女子) 〓 東京大学、東京女子大学、武蔵野女子短大、学習院大学、津田塾大学、玉川大学、新潟大学、岡山大学、福岡女子大学、九州大学、西南大学、鹿児島大学 計一三七名

◇ 社会人参加者 〓 熊本市教育委員会、熊本市小中学校教諭、神奈川県高校教諭、福岡県中学校教諭、日高株式会社 宮崎交通、福岡岩田屋、鹿児島興業信用組合 計二〇名(他、地元大分からの参観傍聴者多数)

◇ 招聘講師 四名 来賓 一名  
主催者側

◇ 大学教官有志協議会 四名 国民文化研究会々員 三一名 会友 一名  
事務局 五名 総計二〇三名

参加学生は八名から十四名をグループとして、十四班に編成した。小合宿や幹部合宿の経験者は班長または副班長として一班に二名または三名が所属することになった。社会人班を独立させたのは昨年度の踏襲であり、オプザーバー参加の女子班を一つ作ったのも昨年と同様の方針による。こうして十六班の編成が完了した。

定刻二時三十分より開会式。開会宣言、国歌斉唱に続いて「われらの祖国を守るためにいのちを捧げられたすべての祖先のみたまに対して、一分間の黙禱を捧げます」という言葉で黙禱。大学教官有志協議会の亜細亜大学教授夜久正雄氏、国民文化研究会理事長小田村寅二

第十回「合宿教室」日程表

8月21日(土) (第2日)	8月20日(金) (第1日)	
起床・洗面・体操 国旗掲揚		6.00
朝食・休憩		7.00
講義 「現代日本の課題」 (川井)		8.00
班別輪読 「新しい学風を興すために」 I・II・III		9.00
昼食・休憩		10.00
班別輪読 「新しい学風を興すために」 I・II・III		11.00
○読書指導「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」 ○短歌創作の手びき (夜久)		12.00
第一回短歌創作	開会式 ・オリエンテーション	1.00
同 右	講義 「われ自由を翹望し、 平和を渴仰す」 (小田村)	2.00
来賓挨拶	班長所懐表明	3.00
輪 読 班 別 討 論	夕食・入浴・散歩	4.00
同 右	講義 「講孟餘話について」 (小柳)	5.00
	班 別 懇 談	6.00
	就 寝	7.00
		8.00
		9.00
		10.00

第十回「合宿教室」のあらまし

8月24日(火) (第5日)	8月23日(月) (第4日)	8月22日(日) (第3日)
同 右	同 右	同 右
同 右	同 右	同 右
講義 「天皇と天皇のみ歌」 (山田)	講義 「日本政治の憂うべき動向」 (花見達二講師)	講義 「私の構想する世界の 新秩序」 (木内信胤講師)
全体意見発表	質疑応答	質問書提出
第二回短歌批評 感想文執筆	班別討論	質疑応答
同 右	同 右	同 右
閉会式	地区別学校別懇談	第一回短歌批評 (夜久)
	鶴見岳登山	休 憩
	同 右	講話 「日本の情緒について」(岡 潔講師) 写 真 撮 影
	第二回短歌提出	同 右
	講義 「山鹿素行について」 (筒井清彦講師)	パネル・ディスカッション (木内・岡・花見)
	講義 「土規七則について」 (玖村敏雄講師)	
	全体交歓	班別 短歌相互批評
	同 右	同 右

郎氏、参加学生平休憲君（熊本大学学生）がそれぞれ代表挨拶を行った。

夜久教授は次のような挨拶を述べた。

△近代国家に於て、それを指導するものは大学卒業生であり、知識階級である。それ故各国とも、その運命は大学卒業生の思想的傾向にかかっている。日本の現状は政治的に暗い。共産主義革命を志す意志が、知識階級の中に存在し、ベトナム、日韓問題等を一貫する革命への動きは憂慮に耐えない。日本に革命がおこれば共産主義諸国に見られるように、政党政治の交替はなく、永久独裁政権となり、歴史は断絶する。この合宿を契機として今日の大学生活をどう生きるか、どうしてこのような現状に対処するか、その方法と根本的態度について、心をこめて語り合い、実行して行かねばならない。われわれはお互いに今日の日本の運命を背負っているものとしてこの五日間心を開いて語り合いたい▽

続いて小田村理事長が挨拶した。

△日程がつまって、全く無慈悲のように見えるが、来講の講師も当代一流の方々であり、真剣な五日間を送ってほしい。一般の学園生活とはセンスも違うので、抵抗、反撥もあるはずだが、それはそれとして結構だと思う。ただ問題に目を伏せて、不満を心に残すのはまずい。心の底からの反発として表明してほしい。ここは教える場ではなく、共に学ぶ場である。四泊五日の勉強は、年令、男女、学校差、地域の差等をのりこえ、一人の人間として感

ずることを吐露し、それを受け入れる心の広さを用意して行われるべきだ。》

学生代表平君は、何か人が与えてくれるのを待っているのではない。傍観的な立場にいて何かを得ようとする態度ではなく、一生の思い出になるような厳しい精神生活によって、自己をみつめ、国家社会の問題を考えて行こうと強く訴えた。

オリエンテーションの時間には、九州大学の西元寺紘毅君が次のような所懐の表明を行った。

△私が今日の日まで合宿で経験した思いは無量のものがある。この会が私の生活に占める重みを今更のように感じる。今年もまたあの人に会えるというよろこびは、現代の学園生活の雰囲気の中には甚しく稀薄である。今の学園には人を信じ得る喜びがない。親鸞の「たとひ法然上人にすかされまらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という言葉そのままに、私は生涯の師、一生の友をみなこの合宿で得ることができた。先生の話も、友達の話も目を見つめて聞き、そして語り合おう。一人の人間の全力をつくすきびしさを体験しよう。考えてみると、一回目の参加の時は私は何もしやべれなかった。つらかった。だが、そのなかで訥々とはあるが、自分なりの思いを述べたことが大きな転機となった。その時のすがすがしき、心の開かれた喜びは口に尽しがたい。受け身ではいけない。他人に自分の気持を伝える積極的な姿勢が大切だ。又人の苦しみを自分の苦しみとし

て感ずるのはむずかしい。思想生活に於て、責任が自分に帰つて来ないような、自分が少しも傷つかぬような発言は駄目だ。何が正しいかよりも、何が生きてゐるかを感ずることが必要だ。時には、自分自身が見失われるような苦しみを經なければ本当の学問はあり得ない。我々は皆、何かを求めてここに來ている。その求めて來た切実なおもいを合宿を通じて持続していきたい。〽

西元寺君の体験の吐露は明快で力に満ち、惻々と心に迫るものがあつた。続いて班長の紹介、大学教官有志協議会、国民文化研究会々員の紹介が行われた。中央大学磯貝保博君によつて生活規律についての注意が行われ、開会式は合宿のすべり出しにふさわしい厳肅な雰囲気の中で終つた。はりつめたような緊張の中でいよいよ合宿のスタートである。

### 講義及び講話

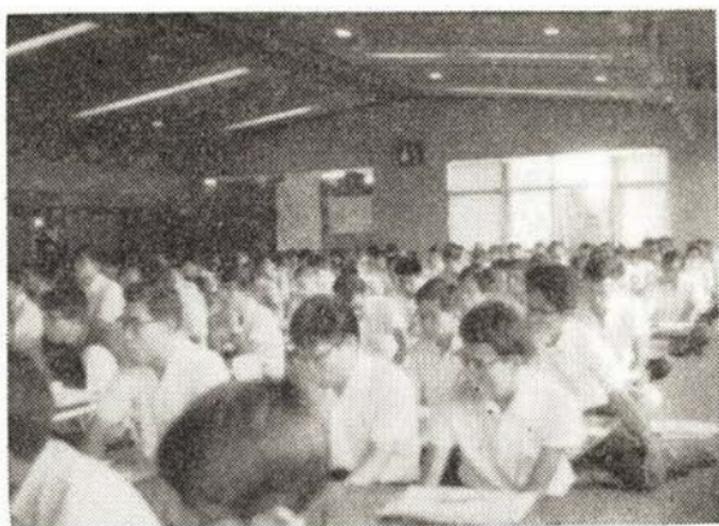
冒頭の導入講義は国民文化研究会理事長小田村寅二郎氏の「われ『自由』を翹望し、『平和』を渴仰す―自己と祖国と人類に普遍する道を求めて―」であつた。この講義には資料として、マルクスの『共産党宣言』、『リンカーン演説集』、『日本人の心』(『万葉集』)、『金槐集』三条実美の「梨のかた枝」(『明治天皇御集』)からそれぞれ数首の歌を選んだもの)の三つが使われた。その要旨は次の如くであつた。

人々を軽々しく何々主義者として分類するのは危険である。心に直接ふれること、「直接」から「直接」へということが大切だ。人の心を概括して戸棚の陳列品と同様に考えてはいけない。政治的にある種のイデオロギーがあることは否定できないが、ある人間が「何々主義者」である以外には何もないということはあり得ない。心はそのように固定することなく絶えず流動している。流動しているものはイズムではない。歴史思想、社会思想等の理論的分類も必要だが、それが人間そのものを把えるには限界がある。流動する心をイズムで固定してしまうと、どこかにこぼれができる。例えば「自由」という言葉にしぼって考えてみると次のようなことが言える。「自由」を考える時最も注意すべきは、自由を駆使する心の働きそのものである。この働きの欠けた心は、固定して、理論的分類という段階でストップしてしまう。形の上で自由が証明されなければ納得できないと考える人がある。そのように固定した理論は往々にして逆に心の自由を束縛するものだ。こうして心はいよいよ動きがとれなくなり、逆に屈折したすべてのエネルギーが行動の上に展開されることになる。心を碎く訓練が欠けたまま、人々は「行動の自由」へつっぱしる。思想も同様である。何故か、何故かという追求がなされず、「思想の自由」の名の下に、ある一つの思考でストップし、そのまま「行動の自由」に入る。現在の社会を規定する法を無視し、無視する方が新しい社会の法に忠実であると勝手にきめる。こういう屁理屈が、学問の名を僭して「行動の自由」を正当づけている。

どこか間違っていないか。

「自由」とは本来、潤達で大らかで、豊かな人間心情と表裏をなすものではないか。「心の自由」をチエックするもの、おびやかすもので最も大きなものは、心の働きを停止することである。そこで、マルクスの考え方との対決が必要になる。社会機構を直せばよいというマルクスの考え方は、外的行動に無制限の自由をみとめ、一挙に「絶対的」自由へ到達し得るとする。しかし、社会機構の改変の効果には、功罪の二つがある。自由は人類永遠の課題である。人間の心が弱いものであることは、我々自身の確認するところである。よく知っているその自分を伏せて、何で世の中の社会機構の改革のみを問題とするのか。世の中をひっくりかえす根拠の正しさ、その証明は一体どこから来るのか。「心の自由」が制約されるような社会体制が現に社会主義国に見られるではないか。心を勞し、心を訓練するところからすべてが始められなければならない。◇

こうして「共産党宣言」(資料一)に「行動の自由」「外的自由」を「自由」と考える典型を指摘し、「リンカーン演説集」(資料二)に、国家の「分離」を防ぐため死を以て尽した人の心を指摘し、リンカーンにとって「人民」とは、歴史上の祖先、戦死者、現在の国民をふくむものであることを強調した。更に「日本人の心」(資料三)の中に、和歌の伝統にひそむ、生きとし生けるものの思いをつつむ心の広やかさを指摘し、この合宿に臨む一つの姿勢



をきびしく明示したのである。

二日目朝、鹿児島大学助教授川井修治氏（本会副理事長）の「現代日本の課題―革命史の実相にかんがみて―」という講義が行われた。専門の革命史の事実を踏まえた説得力のある講義であった。内容のポイントは次の如きものである。

△革命を誘発する最も危険な要因は国民思想の分裂である。共通の目標を求める対立ならよいが、目標そのものの分裂と混迷が存在することは重大である。日本の革命は人民戦線方式を取るだろう。この方式は、革命の主体である共産党が微弱である場合、広般な人民大衆を結びつけてゆく。彼らは真意を明らかにせず、独立、民主、平和という如き、ゆるやかなスローガンで、反ファシズム闘争を組んでゆく。又、一挙革命によらず、段階革命の過程を踏みながら連立政権の警察、軍隊、司法、宣伝等の主要ポストを掌握して、

共産革命に進む。こういう見透しのもとに、彼らは現在のベトナム戦争を最大限に利用している。人道的な反対を利用しつつ、米帝、日本独占への闘争という形をとりつつある。

革命史の教えるところによると、革命とは改革と全く別の次元のものである。後者は基本原理は継続するが、前者では基本原理そのものが根本的にかわる。マルクス主義革命理論の政治思想上の誤謬は、フランス革命を改革の唯一の型としたことである。イギリスのような漸進的な近代化の型もあり、ドイツのような国家権力を使つての近代化もある。ロシア革命はマルクスの必然論では説明できない。むしろスラブの革命思想であるアナキズム、ニヒリズム、ナロードニキ等の傾向が強い。革命史の「事実」を知らずして、革命を論じてはいけない。革命家の特異な性格、狂信、マキャベリズム、現存社会への徹底的反逆等を知ることが必要である。革命の成否は実力（武力）にかかっている。そこには階級絶滅のために予想を絶した犠牲が払われるという事実を知らねばならぬ。現代革命の型には中共型、東欧型（赤軍の軍事力によるもの）キューバ型（民族独立運動が共産主義に転化したもの）人民戦線型、チェコ型（東欧型と人民戦線方式の結合）等が考えられる。この中、人民戦線方式のみによる成功の例はまたない。日本にはこの型が最も可能性が強い。最後に、一挙革命か不断改革かを考えたい。一挙革命は軽信と傲慢の産物である。われわれは人間性の真実に目ざめた不断改革の道を進むべきである。▽

招聘三講師のご講義の要旨は別に収録したので、くわしくはそれをお読みいただきたい。

木内信胤講師は昭和三十五年夏、安保闘争直後の第六回雲仙合宿以来連続六回目のご講義で、先生の予言のいくつかは、まぎれもない現実の事実となった。今回は「私の構想する世界の新秩序」である。列強の力の支配の時代は終わったが、「もの事」をきめる原理がまだ確立されていないこと。漸次世界国家への理想へ向って行くであろうが、それは国家の解消ではなく、各国家の自己責任制の上に実現されるべきものであること。従って新秩序の基本は「国の個性尊重」であること。しかし先進国にこういう思想が現われないのは、征服的、分析的、平面的な西欧思想の弱点によること、などが明快に歯ざれよく論断され、われわれ日本人の歴史的な責務の重大さを指摘されたのであった。質疑応答の時間には三十余りの質疑を縦横に論じ去り、参加者に強い感銘を与えたのであった。

三日目午後、岡潔先生が来講された。文化勲章を受賞された世界的数学者というので、参加者一同固唾を吞んで待つうちに、先生が登壇された。天衣無縫のお話ぶりの中に、無限の叡知がきらめくご講話であった。題して「日本の情緒について」というお話であったが、  
 △日本の情緒とは、日本人という魚がそこに住んでいる水のようなものだ△というお言葉が心に残った。

△日本人という魚の住む水は清らかである。自分中心のセンスが濁りである。「日本国憲

法」では、個人の尊厳が至上のものだとされるが、これは自己中心の「小我」であって、昔からの日本の情緒とは正反対である。日本人の本来の心は清らかでやさしい。「死を見ること帰するがごとし」というように、なつかしいところに帰るような死に方ができる。日本人にはそんなにも強い心がある。現代文明の世界は生存競争であり、我欲の火がもえさかっている。このままでは人類は滅亡する。これを救うのは日本の情緒以外にはない◇

先生は淡々として、非行少年の問題や漢字制限や、北条時宗、明智左馬介等の歴史上の人物の逸話を語られたが、それらは砂にしみこむ水のように、われわれの心にしみこんで来た。すぐれた人格の気韻を肌感じさせるようなお話で、参加者一同、消えざるすがしい印象を受けた。

四日目には、政治評論家として独自の活躍を続けて居られる花見達二講師の「日本政治の憂うべき動向」という講義が行われた。この講義は、副題に「大正デモクラシーの回顧からケレンスキー内閣出現の危機まで」とあるように、現在の政治危機を、歴史的展望と緻密な現状分析によつて的確にとらえられた堂々たる立論であった。講師はまず、第二次大戦はまだ完全に終わっていないこと、ベトナムの実情はそのまま日本の実情であることを強調され、日本は「敗戦デモクラシー」と「革命風潮」という二つの潮流に洗われていることを指摘された。そして、革命計画の具体的な進行状況を、現実政治の豊富な知識を援用しつつ縦横に論じ

られた。参加者一同、政治的危機の深さに緊張を強くうながされるようなご講義であった。四日目の夜は地元大分大学の学芸学部長筒井清彦先生と福岡学芸大学長玖村敏雄先生をお迎えした。

筒井先生は山鹿素行研究の権威者であり、素行の学統についてのお話には、今更のように正しい学問の系譜の偉大さを教えられた。時間の制約が惜しいご講義であった。

玖村先生は松陰研究の第一人者である。松陰の叔父玉木文之進の長男彦介が十五才で元服した時、武士の心得をさとした「士規七則」について話された。朗々と気魄をこめて松陰の文をよまれる先生の声は叱咤激励するように参加者の胸にひびいて来た。人間としての自覚、日本人としての自覚、侍としての自覚を説く松陰の言葉には、いつの世にも新しい学問への真剣な姿勢がとかれていて、深く心を打った。特に結論の、青年期には立志、擇交、讀書の三端を身につけるべしというお言葉は忘れられない。

われわれは、これら五人の先生方のお話の中に一貫した高い志を感じ、よき師との邂逅をよろこび合ったのである。

#### パネル・ディスカッション

昭和三十八年雲仙合宿に於て、木内講師によってパネル・ディスカッションが試みられて

から、今年は三回目である。木内、岡、花見三講師を中心に、大教協、国文研の会員数名が意見や質疑を出し、その討論の過程を参加者が周囲で傍聴するという方法である。テーマとして「日本の国語・国字問題」と「日本の教育はどうすればよくなるか」の二つがえらばれた。

まず司会の小田村理事長が、昔から存在していたローマ字論者、表音主義者の主張が、アメリカ教育使節団の勧告をきっかけとして具体化されたのが漢字制限と仮名づかいの改変であつたと述べ、特にことばについて便宜主義、能率主義がリードし、ことばの生命が軽視されることの重大さを指摘した。木内講師は福田恆存氏らと共に、「国語問題協議会」の一員として、この問題に直接タッチして居られる関係上、討議のきっかけとなるいくつかの問題を提出された。吉田富三氏の「『漢字仮名まじり文』が正文である」との提案が「国語審議会」で未だに棚上げになつてゐることは、将来仮名書きになるのか、ローマ字書きにするのか、その基本的方向さえ公の場で決定されてゐないことになる。国語・国字問題についての政府の無定見を示す例であるとの発言は注目を引いた。教育漢字八八一字、当用漢字一八五〇字という制限の不合理や、東京都の石井教諭の漢字教育の実践方法なども話題に上つた。この問題について、岡講師は、「即時もとに戻すべきである」と繰り返かえし、強く発言された。この問題の重大性に比すると、もとにもどすことは教育面に於ける多少の犠牲はあつ

でも、断乎として実施すべきだというご意見であった。大学で「国語表現法」の講座を持っている夜久教授は、国語・国字問題に関連して、親と子の断絶の問題について触れた。特に古典がよめないことによって、伝統の切断という事態が起りつつある事実にふれて、問題の重要さを再認識させた。傍聴者からも発言が求められたが、古典の読解に苦しんでいる学生諸君の中から、真剣な意見が出された。最後に木内講師から「国語審議会」を表音主義者に委せないための現実的方策が必要だという発言があり、小柳会員から抵抗を排除して古典に直接する努力こそ大切であるとの発言があつて、稔りの多い討議を終つた。

第二の問題「日本の教育はどうすればよくなるか」は短時間であつたため充分深めることができなかったが、三講師はポイントをついた発言をされた。まず木内講師は、東洋思想の復元と、総合的直観力を養うための「哲学」と「歴史」の適正な教え方を強調された。岡講師は特に現代教育に於ける人間の動物性の解放の風潮に対して「人の心、人の悲しみが分るような人間」の養成を説かれ、花見講師は現代教育に具体的な目標がないことに触れ、現憲法の根本的な再考をうながされた。いずれもこれからの勉強への貴重な示唆を与えられたものと思われる。当代一流の講師の生きたことばのやりとりに、時には爆笑もわき、和やかな一ときであつた。

古人を論ずる場合、抽象化された理論のくみ上げを以て学問とする風潮に対し、古人の言葉に直接ふれる体験を第一とすべしというのが、われわれ同人の立場であり、それを「文献文化史的研究」と呼んで来た。国民文化研究会会員の小柳、夜久、山田三氏による講義は、この方法の具体的実践であった。

初日の夜、小柳陽太郎会員は、吉田松陰の「講孟餘話」の講義をした。これは安政二年（一八五五）松陰二十五才の時、萩の野山獄で囚人を相手に「孟子」を講じたものである。梁惠王上首章「王何必曰利。亦有仁義而已矣。」の箇所の註釈である。ここで松陰は「仁義」（道理）と「利」（功効）を対比しつつ、「間に合わせ」ではない「永久の見通し」の必要をのべ、道学の根元としての「志」の確立を述べている。松陰には革命児や尖鋭な国粹主義者という如き評価がなされているが、何よりもその人の言葉が現に生きているという点で捉えられねばならぬことがよく納得できたと思われる。

第二日の午後、夜久正雄会員によって、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の読み方の指導が行わた。この場合も、聖徳太子の「維摩経義疏」の一語一語に正確にふれた厳密な読書方法が実践された。特にプリント刷りの「勝鬘経義疏」の註釈は、学問的

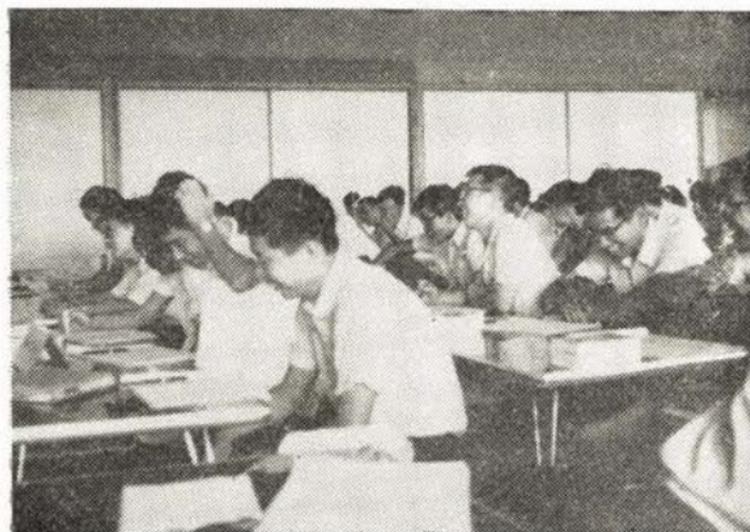
正確さと切実な体験告白が表裏一体となった見事な講義であった。

最終日の山田輝彦会員の「天皇と天皇のみ歌について」も同様の方法で行われた。先ず『天皇と天皇制についての基本的思考』（小田村寅二郎・夜久正雄共著）の要点をかいつまって説明し、特に天皇を制度、機構の上からのみ考える思考法に対し、「御製」という芸術的表現を通じて、天皇のお心にふれる体験の必要が説かれた。続いて「明治天皇御集」中の数首のみ歌、今上天皇のみ歌を読んで、文献にふれて正確に思考する方法がくりかえし強調されたのである。

「輪読」もまた、お互いに心を通わし合いながら一つのことばに心を傾ける修練をつむ上で大きな効果を發揮する。今回は特に昨年度の合宿記録「新しい学風を興すために」第三集中の「思想の形成」がえらばれた。昨年の導入講義であったこの論文は、合宿の意義を説いて余すところのない講義であったが、班別に分れた徹底的な輪読によって、班員相互の交流も深まり、合宿にのぞむ姿勢も整えられた。合宿後、各サークルでの読書会のやり方は、これらの読書指導と輪読によって、明確に方向づけられたことと思われる。

短歌創作を合宿にとり入れてから、今年は四年目である。その間の成果は「短歌の哲学と技術」（「新しい学風を興すために」第一集）「短歌創作について」（「新しい学風を興すために」第二集）及び第一集より第三集までのそれぞれの巻末の短歌作品等の記録となった。今

年も二日目の読書指導の後、夜久正雄会員が簡単な手びきをした。〈人生で直接経験した感動をよむこと。ことばに留めたことは、本当の意味で経験したことになる〉と述べて第二日目の夕食前の一時間が創作にあてられた。最初の創作という人もあって、稚拙な表現も多かったが、ともかく全員が提出。六七六首という膨大な歌が集った。一人平均三首ということになる。これを国文研会員が手分けをしてプリントに切り、翌日午後の短歌批評の時間に合わせるのだから、例年のこととはいえ、事務局は戦場のような忙しさである。三日目の二十二日の午後第一回創作短歌の批評が夜久正雄会員によって行われた。〈歌心は人生観の基礎である。相手の心になることが必要だ。その人の選んだ言葉を読んで味わうことが心の交流となる〉というのが批評の姿勢である。こういう態度でその夜班別の短歌相互批評の



時間が持たれた。歌には心の姿が鏡のように映されるといふ実感ですべての者が味わい、正確な思想表現が如何にむずかしいかを身にしみて感じる事ができた。言葉に対するいいかげんな態度が反省させられると共に、表現のよろこびも味わえた一ときであったと思う。

第二回目の短歌創作は四日目の鶴見岳登山の後で行われた。五六九首の歌が提出された。一回目よりも進歩していることは歴然としている。このプリントが終り、印刷が完了したのは最終日の早朝であった。合宿教室の卒業生ともいうべき、若い国文研のO・B諸氏の活動がなければ、到底できぬ困難な徹夜の仕事であった。これらの作品の中ですぐれたものは、最終日の全体意見発表の後、長内俊平会員によって朗々と読み上げられた。短歌創作が合宿生活に於て果す役割について自信をもてる状態に到達したのはうれしい。

×

×

第二日目の夜、高木尚一氏（労働科学研究所）岡田武彦氏（九大教授）上田通夫氏（鹿児島大学教授）の三氏の短い挨拶の言葉は印象的であった。高木氏は国文研の最も古い先輩であるが、文献文化史的研究の意義を述べ、ヴェントの民族心理学の全訳、明治、大正、昭和史の書きかえを今後のテーマとするといわれた。上田先生は、人文科学に於ける伝統の喪失を指摘されたが、これは閉会式のご挨拶の中で「天皇制」の正しい把握を説かれることによつて具体的となった。岡田先生は儒学の研究業績によつて近く渡米されるが、特に学問をする

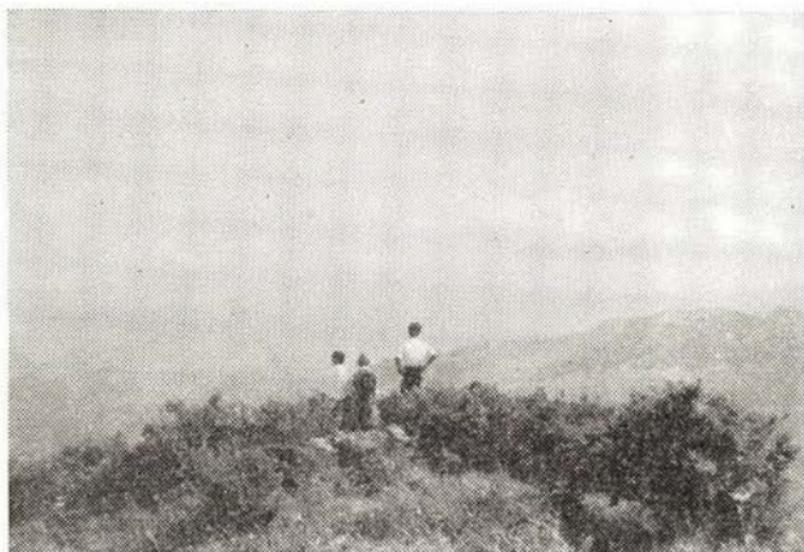
態度についてのきびしいお言葉が心に残った。最終日の全体発言では、合宿経験を凝縮した真率な言葉が吐かれて、何度か胸が熱くなるような気持を味わった。

×

×

最終日の短歌批評の後、小田村理事長は次のように述べた。

△この合宿でわれわれは皆歌を作ったが、それは現代の歌壇で行われている、会員の歌を選択して優劣をつけるというようなものとは全く違った次元のものだ。いわば、日本人の心の道をたどることであって、「趣味」や「文化的教養」ではなく、生命をかけて学ぶべき学問である。真心をうったえるという点では、すべての人は歌がよめるはずであり、外的差別をのりこえて平等に心が通い合う道でもある。この道を避けて、外的平等のみを叫ぶのはうつろである。現代の大学の学風には内的平等の信をくりひろげて行く道がない。大学の最高学年で履習するものとして「しきしまの道」がとり上げられなければならない。それは心を鏡に映すように映し出す恐れべき力を持っていながら、素直な心をもったものには最もやさしい道である。また、文化科学、精神科学の領域に於ける学位は、少くとも日本の言語について肌で感じることができる人に与えられなければならない。従ってここでも当然「しきしまの道」はとり上げられねばならぬ。しかし残念ながら、大学には教える先生もいないし、審査の能力のある人もいない。自ら修練する外に道はない。



現代政治に於いて保守と革新のいずれを選択するかは、日本の文化と伝統を守るか守らないかという問題になる。政治的発言というより、問題は生命と自由を守るか守らないかにかかわって来る。現代の日本では保守と革新の選択がセンチメンタリズムに根ざしている。日本全体は「稚氣」がぬけない状態にあつて極めて危険だ。手の暴力は否定されるが、口の暴力はゆるされて来た。それを正すのが歌の修煉であり、班別討論であつた。これからの勉強は、力んで大きなことをするより、合宿中に書きとめたことを心をこめて復習することだ。それをしなれば学問としては残らない。大きな学問のあやまりをかかえこんでいるのだから、心してその整理に当たっていただきたい。人生に真実の平和と平等を求める気持があるならば、それはできるに違いない。◇

八月二十四日、午後一時より閉会式。式に先だつ

て、過去五ケ年、大合宿の速記者として献身的な協力をされた西川伍朔氏（最高裁判所勤務）に対して、感謝状と記念品贈呈が行われた。今年は公務で来られなかったため、奥様が代りに受けられた。

国歌斉唱に続いて、大学教官有志協議会を代表して上田通夫氏が、国民文化研究会を代表して宝辺正久氏が、学生代表として京都大学の福島義治君が、それぞれ挨拶を行った。

宝辺氏は「この合宿に於ては、言葉に表わし得ないような「いのちの実感」を体験した。これこそ学問の基礎であり、志のみなもとである。この実感を守って行こう」と述べ、二十年前東大在学中に病死した学友江頭俊一氏の辞世「しらぬひの筑紫の野辺にますらをが立てし誓ひの消ゆる日あらめや」を引用して結びとした。

学生代表福島君は「この合宿で耳にした、一生の支えとなるような言葉をかみしめ、自分のものとして生かして行こう。われわれはこの合宿ですばらしい友に会えた。われわれの胸には火がつけられた。この火をあかあかと燃やすことがこれからのつとめだ。また来年会おう」と心のこもった挨拶をした。主催者と参加者が向き合って「螢の光」を合唱する中で、合宿は劇的な幕を閉じた。

×

×

心配された台風十七号も、東へ進んで関東へそれた。この四五日の間に、季節は目に見え

て秋めいて来た。山肌の色も、遠い山脈のたたずまいも、一足早い秋を感じさせる。「本来の日本人の心への回帰」を胸にかみしめながら、参加者たちはすがすがしい気持で城島高原を後にしたのである。

(山田輝彦記)

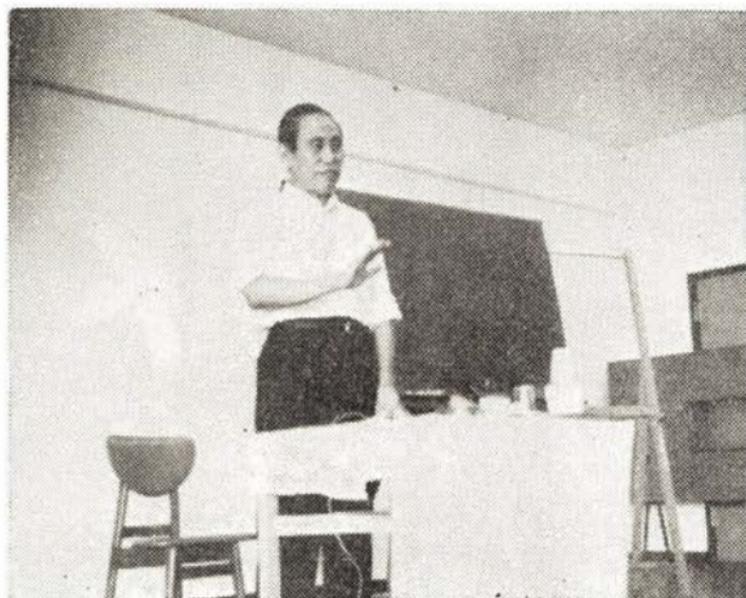


■ 合宿教室における講義



私の構想する  
世界の新秩序

木  
内  
信  
胤



緒言

現在、世界の問題は「東西問題」と「南北問題」である。そのうち前者は、すでに十分にヤマは見えたものといえる。後者はこれに反して、これからがいよいよ問題、と考えられる。場合によっては前者解決の最後のステージが後者と絡みあつて、未曾有の世界的混乱が起らぬでもない。

この情勢を眺めて感じられることは、「東西問題」「南北問題」を踏み超えて、「世界の新秩序」を構想することが極めて肝要だ、ということである。これなくして「南北問題」の解決はあり得ない、と思われるからである。

因みに、先進諸国間において、この世界新秩序の構想が熟しつつあるかという点、必ずしもそうではないらしい。先進諸国間に思想の混乱があるからであつて、見ようによつては、この「先進国間の思想の混乱」という問題を、上記二つの問題に加えて、第三の問題と認めたいくらいである。

一、世界新秩序の基礎

一、列強が力によつて支配したものが、第二次大戦までの世界であつた。この時代の最大の特徴は、何回となく列強間に戦争があり、その勝敗によつてもの事がきまつた、ということであつた。

いまその列強相互間の戦争はなくなつた。いまあるものは小国間の小戦争、並に東西両陣営間の戦争であるが、その性格は一変した。

二、列強間の戦争の勝敗がもの事をきめた。その戦争がもはやないに拘らず、「もの事」をきめる原理といふべきものはまだ確立しない。世界に「新秩序」が現われねばならぬ所以である。

三、科学技術の進歩により、人類は全く新しい物的基礎を持ち得ることとなった。この事實は「世界新秩序」の基礎であらねばならぬ。人類の相互交流、従つて相互理解が、格段の進歩をみせたことも、「世界新秩序」の基礎を造るものである。既成宗教がそのドグマを棄てつつあることも、加すべき一要因である。

## 二、世界国家か個別国家か

思想上の岐路はこの点にあると思う。世界が刻々にその相互依存と相互理解とを深めつつあるのを見ると、「世界国家」こそ間違いなくこれらの理想、と考えたくなる。

しかし、ここが実は誤りのもとであつて、一足飛びにそこを考えて、目の前を考えないことが、現在の混乱の一大原因であると思う。

世界はやはり、少くともここ当分、それぞれ責任を取るところの国家によつて組み立てられねばならず、そのそれぞれ責任をとつて貰う仕組みこそが「世界新秩序」の骨格をなすのである。

## 三、新秩序の要点

一、「力の支配」の代りに、「法の支配」が打ち立てられねばならぬ。その法の護り手として若干の仕組みが考えられねばならぬ。

二、昔の世界は、列強と称する「対等者間の世界」であった。いまの世界は「不平等なものが寄り合  
って住む世界」となった。

三、不平等であっても、程度の低いものにも「自由」が保障されねばならぬ。それによって「責任を  
取る」ことにもなるのである。

四、各国が自由を持つ世界、それは「国の個性尊重」の世界であって、世界一体化の趨勢とは一見反  
対であるかの如きものが、世界新秩序でなければならぬ。

#### 四、思想的吟味

一、歴史的な吟味をすれば、こういう考え方を提唱することは、格別異とするに足りないことである。  
二、なぜ先進国にこういう思想が現われないか。西欧的思想なるものの弱点がそこにあるからだ、と  
考えないわけに行かない。

三、われわれ日本人には、こういう思想を提唱するについて、何か歴史的必然性があるのかも知れ  
ない。

## 緒言

これからの話は、偶然ながら、いままで三回にわたって「新しい学風を興すために」という本に出ていることのしめくりのようなことになると思います。まず緒言のところに書いておきました。現在、世界の問題は、「東西問題」と「南北問題」である。そのうち前者は、すでに十分にヤマは見えたものといえる。というのは、ソ連はすでに「普通の国」になりつつあるということ、すなわちマルキシズムというイズムはすでに敗退した。ただ中共は違う。マルクス直伝の世界観に立って、世界にはプロレタリアート革命がなければならぬと思つてゐる。丁度スターリン時代のソ連に似ている。しかしソ連は、スターリンが死に、フルシチョフを経て、いまのようにおとなしいものになったでしょう。まるで変りましたね。それはマルキシズムがイズムとしては、既に死滅してしまつたという何よりの証拠です。だから中共もいずれそうなるというのが私の観察です。もっとも中共の本質はソ連と違いますが、ソ連とは違う経路をとるかもしれない。しかし結局は同じでしょう。

後者、即ち「南北問題」はこれからがいよいよ本番、もつれる一方でしょう。その現われの一つがヴェトナムです。アメリカは共産主義の浸透に対して戦っている。しかしあまり効

果があがらない。それは今迄、誤った思想に立つて南ヴェトナムを助けてきたからです。アメリカは援助によって民生をよくし、生活程度を上げてやって、北と対抗させようとしてきた。しかしそのやり方は、害こそあれ益はなかった。こうしてヴェトナムという国は、だんだん根性の抜けてしまった、自立性のない国になって来た。それを助けて共産主義と対抗させるといつても、それは、私に言わせれば、不可能なことなのです。

他人の国に、共産主義を、武力もしくは陰謀で押しつけようとする手合いがいる。それは例えば混んだ電車の中で、短刀を抜いて女の人かなにかを刺そうとしている奴がそこにいるのと同じことなのです。そんな時、その女の人に、空手か何かを教えて、短刀を払いのけさせようとしても、そうは行かない。刺そうとしている奴の手を直接おさえるほかに手段はないはずだ。北を直接うつというのはこの原理なのです。だから私は北爆は大賛成なのです。もつともそれは、本当は国連がやるべきものでしょう。混んだ電車の中では、お巡りさんがいればお巡りさんがやるべきことなのです。しかしお巡りさんがいなければどうするか。誰か力のある者がおさえるより他に方法がないでしょう。それと同じです。国連には力がありません。それなら、たまたま力のあるアメリカが、ちよつとおさえたらいいではないか。おさえてきかなければ、少ししめたらいいではないか。まだきかなければ投げ飛ばしたらいいでしょう。それだけの話。こうして、「武力もしくは陰謀によって人の国に自分のイズムをおし

つける」ということは、俺もやらないが君もよしたまえ、という「世界正義」を、きびしく実現すればいい。そこにもっていかないから、ヴェトナムはなかなか解決しないのです。

それはともかく、この「南北問題」というものはうまく行っていない。その上「東西問題」はヤマは見えたとはいえ、まだかたがついていない。だからその二つが絡みあって、これから未曾有の世界的混乱が起らぬともかぎらないのです。このような情勢を眺めて感じられることは、「東西問題」「南北問題」を踏み越えて、今こそ「世界の新秩序」を構想することが肝要だ、ということ です。

さて「世界の新秩序」を構想する場合、何が正義なのか、何が守らねばならぬ規則なのかを考へるべきですが、その一つに、自分のイズムを陰謀に乗せ、武力にものをいわせて人々の国へおしつける”ということをやってはならぬ、という項目があるはずで、それは悪いことだから、いまも申した通り、もしやったら叩かれても仕方がない。そういう秩序がなければだめです。個人の間でも、一つの部屋に入っていれば、おのずからそこに守るべき礼儀があり規則がある。それと同じく、国と国との関係を律する世界的な礼儀というものがでてなければいけない。それが「新秩序」の基礎にならなければなりません。

ところで、先進諸国間にこの世界新秩序の構想が熟しつつあるかという、必ずしもそうではないのです。この先進諸国というのは、いまでもやはり世界のリーダーでもあり、責任

者でもありませんから、彼等の間に「南北問題」を処理し、「東西問題」に本当にかたをつける大原理というものが自覚されてくればいいのですけれども、そうはなっていない。なぜなら、先進諸国間に思想の混乱があるからです。私は見ようによっては、この「先進諸国間の思想の混乱」という問題を、上記二つの問題に加えて、第三の問題と認めたいくらいです。

### 一、世界新秩序の基礎

列強が力によって支配していたのが第二次大戦までの世界でした。力によって支配していたというよりも、列強相互の抗争だけが問題であったのだ、といったほうがいいかもしれない。この時代の最大の特徴は、何回となく列強間に戦争があり、実は戦争をやりながら列強というものができてきた。その勝敗によって、もの事がきままりました。だからナポレオンが欧州を征服すれば、欧州の新しい姿はナポレオンによって決まってしまう。そのナポレオンをイギリスがやっつけたから、今度はイギリスの思うような世界になっていったのですね。そういう姿が、ついこの間までの世の中だったのです。ところがその列強相互間の戦争がなくなりました。これは第二次大戦後の、世界の大変化です。今も戦争はありますよ。いつもどこかで戦争をやっている。しかしこれは小国間の小戦争、並びに東西兩陣営間の戦争であって、それは前のような列強間の戦争とは性格がちがう。これが現代の特徴です。

そこで、列強間の戦争の勝敗がものをきめた、その戦争がもはやないに拘らず、「もの事」を決める原理というべきものは、まだ確立していない。だから、世界に「新秩序」が現われなければならぬにも拘らず、なかなかそう行かないのです。これに対して、国連が新秩序の基礎であるかの如く信じている人がいる。しかし、国連は今半身不随みたくなって、国連の場には到底大事なことを持つていくわけにはいかないのです。キューバ問題に、国連は無発言でした。干渉できないのです。今度のヴェトナムにも干渉できない。大事な問題には国連は顔を出せない。つまりぬ問題、小さな問題だと思つて顔を出したのがコンゴですが、兵隊まで送つたけれどもどうにもならないで国連には借金ばかりできてしまつた。結局うらまれて、何の役にもたたなくて、国連を半分つぶすようなことになつた。これが国連の現状です。

民族主義、民族の独立を新秩序の基礎と考へている人もあるでしょうが、これもまた錯覚です。たとえばコンゴには、二〇〇ぐらいのトライブ（部族）というものがあるだけで、コンゴ民族というものはまだ形成されていません。だから民族なき国家というものを、これからは考へざるをえないし、既にそういう国家ができています。だから、ある地域のごくごく一部の、自分では民族主義に燃えているような連中が、そう思つていてだけで、それで世界新秩序は構成できないのです。

ところで、非常に違うことがここに一つ出てきた。それは科学技術の進歩によって、人類は全く新しい物的基礎を持ち得ることになった、ということです。科学技術の進歩の結果、いまではものを作ることが非常にやさしくなった。いかにやさしいかということは、日本を見てみればすぐによくわかる。

たとえばツバメ食器という有名なものがありますね。食器ですよ。金属食器、これは非常に安くできる。だからアメリカが関税障壁さえたてなかつたら、ツバメだけでアメリカの食器を全部まかなうことができるのです。その時に燕という町の人口は二倍ぐらいになるかもしれないけれども。あの小さな町を倍にするだけで、アメリカの全食器をまかなってしまふ。ものを造ることはそれほどやさしい。もっといい例は日本の造船です。戦後日本の造船業は、一時全部なくなっていたのに、いつの間にか、全世界の造船を一手にまかなくなってしまいました、それほどになってしまったのです。これが近代科学技術というものなのです。

またアメリカの農業というのは、人口の七・五%が農民だといわれているが、その七・五%で全アメリカの需要をまかなって、なおその上に非常に大きな輸出をして、まだ過剰だといつてさわいでいる。土地はもちろん余りに余って、いまは土地を自然に返す、また森にしてしまおうという運動を、盛んにやっているわけです。ところが少し良く知ってみますと、今の農場を高能率な大農場に改善すれば、人口の三%でいまと同じ生産量ができるとい

うのが、本当の数学なのです。

古来人類というものは、ものが足りなくて、貧乏と闘い、病いと闘い、それだからこそ相互に戦争をし、飢饉があれば大きな人口減少があつて、それで進んできたのです。それがこの現代では、作ろうと思えばいくらでもものは作れる、ということに変わってきた。いままでは、ものは足りないと思うから、人の土地が欲しかったり、資源がほしかったりして、戦争をする。その戦争をするためには、大きな人口が欲しかったのですけれども、いまでは領土拡大などということはもういらぬ、という基盤ができたわけです。これが平和の基盤、世界秩序の重要な基盤だということを申し上げたいのです。

この事實は「世界新秩序」の一つの基礎でなければならぬ。その上にもうひとつ、人類の相互交流、その結果としての相互理解——これは飛行機のおかげですね。あつという間に、行けるから——、この相互交流・相互理解が格段の進歩をみせたことも、「世界新秩序」の基礎を造るものなのです。相互に交流をしますから、相手を知ってみれば憎らしくなくなるのです。知らないからアメリカ人は憎かつたのです。こうして毛色が変わり言葉が違い、即ち民族が違つても、怖がるという気がなくなり、嫌うという気がなくなつてくるのです。

その反対の事實として、いまアメリカでは、黒人問題が大騒ぎになつてゐるではないか、という人がいるでしょう。しかし世の中の流れには、逆流というものには始終あるのです。逆

流を主流と思うようではだめです。右へ行っている力も、左へ行っている力もあるが、全体はどっちへ流れているのか、本流はどれか、ということをつかまないとだめですね。とにかく相互理解が進歩したから、お互いが憎み合うなんてことはなくなりつつある。それが本流です。

その結果でもあるのですが、既成宗教というものがそのドグマを棄てつつある、ということに注目していただきたい。スペインが中南米を植民した時などは、彼等は泥棒しに行ったのですが、あわせて宗教も普及したのです。そういう二重人格みたいな、奇妙な植民政策でしたが、昔の人というのは、そういうものでしたね。ところでその宗教を教えに行った人達は、本当に熱心に真面目に布教したのだが、それでも改宗しない奴、どうしても自分にはむかってくる奴は、悪魔にとりつかれている人間だから、殺したほうがいい、そう考えて、そのようにやった。それが宗教的ドグマです。そのキリスト教的ドグマが、いままでの世界の基礎の一つであったわけです。それもいまは変りつつあって、そういうドグマを棄てつつあります。カソリックの人も随分変りましたね。だからわれわれが話をするのに、非常に楽だし、ことにむこうの人が——鈴木大拙先生のおかげがずい分あると思います——禪宗なんか一所懸命に勉強して、非常な敬意をもってわれわれに接してくる。この態度、大いに嘉すべしですね。なにかそこに、自分達の心の悩みを救うものがありはしないかと思つてアプロ

いちしてゐるわけでしょうが、そういう気分もまた新しい秩序の基礎です。すなわち、いろいろの点で世の中はいままでとは違う。列強の争覇戦、その「力」がものを決めた時代とは、全く違う世の中ができてきつつあり、そしてそのための条件は、すでに眼の前にあるわけです。これらのことを新しい世界の秩序の基礎だ、と私は思っているのです。

## 二、世界国家か個別国家か

では、これからどんなものが出てくるのだろうかと考えると、その「思想上の岐路」といふべきもの、すなわちどっちの考えに傾くかという岐路は、個別国家か世界国家かということになると思います。いま各国の相互理解が進みつつあるところから、国連がもつとしっかりすればいいのだとか、一挙に世界国家を考えて、世界が一国になってしまえばいいのだ、と考える人があるが、果してそうか。

日本の政治一つ考えたとして、実に複雑怪奇で余程の寛容と忍耐力を持ち続けなければ、日本の、このいまの経済の危機を救うことすらできないのです。国家というものは、実に細心の注意を払って、我慢すべきところは我慢し、努力すべきところは渾身の努力を傾けてこそ、やっとどうにかいく程度のものです。それが、いきなり世界国家になれるはずはない。だからすぐに世界国家に飛ばうとする人達は、私は無責任な考え方に立っている人達だと思

う。真面目に自分の国のこと、自分のまわりのことを考えないから、そんな安易なことを言う。「修身齊家治國平天下」という順序をとばすことはいけない。自分というものは、なかなか自分の満足するようになれないでしょう。ところが本當に地道な努力を積んで、自分をいいものにしていくということができないのに、何か悪いことがあると、それは国家が悪いのだといって、自分以外のもののせいにする。世界國家論というものも、そのような考えに非常に近いのです。

そうではなく、世の中が良くなくても、どんなに乱れても、どんなに墮落しても、自分は大丈夫だというほうからいかなければいけない。ところが人々はそうは考えないで、「一足飛びに」世界國家を考える。こういうことも、現在世界が混乱している一大原因だと私は思っています。世界はやはり、少くともここ当分——当分というのは何百年ということですが——それぞれ自分で責任を取るところの國家によって、組み立てられなければならぬ。その「それぞれ責任をとってもらう仕組み」こそが、「世界新秩序」の骨格をなすのです。すなわち、めいめいが自己責任者です。どこかの國がまずいことをやって世界の秩序が乱れたとすれば、その國は他の國から叱られるかもしれない。しかしそれとは別に、自分自身が悩む。それは自分のせいであって人のせいではないという自己責任です。そういうめいめいが責任をとるような世の中に仕組まれていくのが、これからの世の中の行く道と思うの

です。

### 三、新秩序の要点

そこで「新秩序の要点」ですが、これは敷衍ふえんすれば、いくらでも出てくるのですが、その要点だけをとってみれば、既に申したことによっておわかりのように、「力の支配」の代りに「法の支配」といふべきものが考えられます。またその法の護り手として、若干の仕組みが考えられねばなりません。

法を破る奴があったら、それをどう処理するのか。さっきの例でいえば、非行少年が混んだ電車の中で人を刺そうとしている場合、どうしたらいいか、どうやってその法を乱す行為を制御していくか、という若干の警察的な仕組みが考えられなければならぬ。いうまでもなく秩序のものは警察的なものです。国家というものも、警察力を持つことによって秩序が保たれ、文化もまたその秩序のもとで発展した。しかし警察的なものといつても、警察が法を決めるのではない。お巡りさんが勝手にやるのではなくて、別の敵として法というものがあって、それを破るやつがあったら、それを排除する仕組み、それが警察です。その場合の「法」とはどのようなものか、その仕組みとはどういうものかを考えるのが、世界の新秩序を考えることだと思ふのです。

昔の世界は、列強と称する「対等者間の世界」でした。皆が本当に対等ではなかったけれども、対等と思っていたのですね。お前は弱いから、お前は文化が劣っているから、別の待遇をするということはなかった。皆同じ土俵に同じ資格で出てきたのです。ところがいまの世界は「不平等なものが寄り合つて住む世界」となったのです。世界の仕組みの単位は、やっぱり国だ。国でなければ、前に申した責任主体たり得ないからですが、しかし国といえるかどうかわからないものも、やっぱり国として扱わねばならぬという現実がある以上、そこには非常な不合理があるわけです。

実質が違うものが、どういう原理によつてお互いに一つの秩序のもとに生きていくか。その場合、程度の低いものにも、「自由」が保障されねばならぬ、というのが、一つの大原理でなければならぬ、と私は思うのです。だから自由とは何ぞやということは、常に常に、くり返しくり返し問題にすべきものです。これは非常に難しいのですが、とにかくこれからの世界では、何らかの意味の自由がどの国にも保障されなければ、秩序というものは立たない。自由が保障されてはじめて、個々の単位が責任をとるようなものになる。自由がないところには、責任はないのです。

ところがその自由を保障するものとして、先進国がいま持つことになった科学技術の進歩があるのです。ということは、先進国は、あえて弱者を従えなくともいいということなのです。

すなわち、弱者を自分の支配下にとり込んで、その資源を利用するとか、その労力を利用するということをやらなくても、今の科学技術によれば自分一人きりで、物資が得たければいくらでも物資が得られるということに相成った。その自由を与えてくれたのが、科学技術の救いといふべきものなのです。これが世界解放の原理です。日本なら日本は、勿論或る程度の貿易はしなければまずいけれども、しかしそれもあまりしなくても十分な繁栄が確保できる。こうして近代科学技術の進歩が、弱者を従える必要をなくしてしまった。そこに、相互の自由を確保する場が出来てきたのです。これが新秩序を考えうる一つの基礎です。

次に考えなければいけないことは、各国が自由を持つ世界とは、「国の個性尊重」の世界であって、この世界一体化の趨勢とは一見反対であるように見えるものが、世界の秩序でなければならぬ、ということ。個性尊重というのは、俺は俺だということが、ちゃんと見える世界です。個性をみずから尊重し、いわゆる先進国が程度の低い国々に対して、"あなたはその方がいいのかもしれない。何百年か先きを考えたら、あなたの方が私達よりよくなるのかもしれない。自分たちはこれで、いつもりでやってきたけれども、そのうちみんながノイローゼになって、いまに子供を生む能力もなくなるかもしれない。そういう世の中になつてしまった時には、アフリカの諸国の人達が悠々と顔を出してくるかもしれない" そう言うかも知れない世界です。先進国は半永久に、先進国であるかもしれない。けれどもそうでな

いかもしれぬ。そしてアフリカ、アフリカに限らぬけれども、どこかの後進国の方がよくなるのかもしれないのです、実際は。東京と田舎を比べてごらん下さい、田舎の方がずっといいということがまだわからないかな。それと似ている。そう考えるのが個性尊重です。

こういうことを言うような思想に立たなければ、新秩序は構成できないと私は思っている。そこで、その自由と個性とを尊重する方法として、世界の経済秩序はどうあるべきか。貿易自由化、ガット、ILO等の国際機構がすべて新しい審査にかかって、お前の仕事は済んだという点がつけられてしまつて、これからはもうガットもいらぬ、ILOもいらぬ、貿易自由化も大いに考え直した、というようなことになるのが、少くとも経済的には新秩序だと私は思っています。

何故ガットがいけないかという、人の国が関税障壁を撤去すれば、自分の国の過剰生産物が売れると思うから、関税障壁を取り除け取り除けといつておしつける。それがいまのガット、ことにケネディラウンドというのは、正にそうですが、それは世界に害をなす。もしも世界が一斉に、貿易自由化で完全無関税のような世の中になったら、後進国は決して浮ばれない。そもそも後進国は、まず何をおいても科学技術を身につけねばならない。そのためには、どうしても自分でものを作ってみなければならぬ。自分で作ってみると、いいものがないかもしれぬ。コストも高いかもしれぬ。しかしそれを自分でやっている間に、

「技術」が身につくのです。それを無関税にしてしまつたら、アメリカやドイツや日本が造るものと対抗できるはずはないから、結局自分で作るのは止めた、ということになる。自分の欲しいものを自分で作る、始めはまずいものをつくるでしょうが、そうやっている間に能力が身についてくる。自分が良くなる。後進国はそのような道をとらなければなりません。そうしている間に、貿易したほうがなるほど得だと思つものだけ、その程度貿易していればいいのです。

ILOにしても、先進国相互の間なら労働条件を均一にするのもいいかもしれない。けれども、それが一番弊害を出しているのが、後進国の場合です。八時間労働だの、男女平等賃金だの、後進諸国にとってはまことに愚にもつかぬことをならべているが、後進諸国はただ、見栄でそういうILOの条約にサインしているだけで、本当は八時間労働も何もないものです。労働するにも仕事がなくて困っている連中は、もしも十時間十二時間働く対象があつたら、それにとびつきたくてたまらないのです。そういう国の違いというものを無視して、一率にああいう条約を作るなんていうのは、とんでもないことなのです。

世界新秩序というものを本当に考える段になれば、貿易自由化もガットもILOも皆、審査にかけて落第点をつけなければならぬ、と私は思う。ではそれにかわるものは何か。

私が考えるところでは、これは第一に、思想を固めねばならないということです。いまの

不平等の問題でもそうです。おくられているように見えている連中が、本当はいいのかもしれない、という、その「かもしれぬ」という考え方、これが謙虚な態度というものです。本当に自己反省をしてみますと、いまの自分、いまの先進国の内容というものは、そう自慢したものではない。ただ努力して成就しようと思ったことを、次々に成就して来ただけです。つまりお月さまへ行つてくるとか、火星の写真をとるとか、そんなことをただやりたくてやっている。原水爆でもそうです。人の国を一挙につぶしてしまふようなものを作りたかと思つて作つた。そのように、狙つたことができたということは、自慢してもいいが、その「総合結果」というものは、果して良いのかどうか、実は重大なる疑問ですね。

自分と人との比較にしても同じことです。俺の方が優秀だという。ある一つの標準では優秀なら、そう思つてもいいが、本当のところはわからない。本当のところはわからないのだ、ということを感じながら、一応のところで作る秩序が世界秩序です。だからその背後にあるものは、自分のわずかな知恵を、あまり過信しないことです。さっきのアフリカのほうがいいのかもしれない、といったようなのは、みんなこのような自己反省から出る言葉ですが、そういう考え方を盛りこんでみることです。そうしてみますと、いまの威張っている奴とそうでないのが、そこではじめて平等に見えてくる。そうなると、現実の不平等を認めながら、そこに一つの仲間として平等に付き合える部面というものが見えてきますね。それは何

だ、といったら、めいめいお好みのように、自分のベストを尽して、それぞれにやったらいいでしょう、ということ。そこに世界秩序が生れるのです。

ただその場合、ならず者がいては困るから、それに対しては警察力を行使しなければならぬ。いまあるのは共産主義の脅威です。共産主義という一種の狂信的な誤まった原理を人におしつけようと思つて、武力陰謀までを使おうとする。それはおやめなさい、どうしてもやめなければ、本当にたたきつぶしてしまわなければならぬ。共産主義という一種の暴力主義、無法行為に対しては、警察が必要なのです。

第二の新秩序の基礎は、自分の都合から人にものをおしつけない、ということなのです。ハイエックの言葉でいうと、Arbitrary Coersionを排除するということです。コアーションとは、おしつけ、アービトラリイというのは、恣意的な、ということ。即ち権力を持った奴が、自分の都合によつて、人に対して押しつけをしない状態が、自由な状態です。

だからフリーダム（自由）というのは、それ自身には価値はないけれども、邪魔ものがない状態で、価値を作りうる状態だから尊いのです。戦争がないことが平和ですけれども、戦争という邪魔ものがあると本当の価値が作られないから、戦争がないほうがいいだけであつて、戦争がないピース（平和）というものそれ自身には、価値はないのです。自由もそれと同じく消極的概念ですが、それがあつると本当の価値を作り出す基盤ができるから尊いので

す。従つて自由とは、あるかないかではない。どのくらい自由があるか、という程度の問題なのです。それがハイエックによつて教えられたところです。

しかし私がハイエック始めヨーロッパ人に申したいことは、国の中の個人の自由は、彼等には実に良く研究している。しかし世界というひとつの大きなコミュニティの中の構成単位である国というものに対して、あなたがたヨーロッパ人は、大いにアービトラリー・コアーション（恣意的な押しつけ）を与えてきた。過去の植民主義時代がそうであつたばかりではない。いまでもたとえケネディみたいなやり方だと、お前が貿易を自由化しなければおれはこうする、といつて、つまりいじめろぞといつておどかすことになつてゐるのは、一種のコアーションです。ですから、国の中での個人の自由についていうことを、そのままに国の関係においても世界の中にコアーションがない状態を造るように工夫されたもの、それが世界新秩序だと私は言うのです。

その中では、法として、これが秩序の原理だとして掲げるべき条項はごく少なくてよろしい。ややこしい国連憲章みたいな、あんなくしゃくしゃしたものがあるようではだめです。あの中にはすでに強制がある。あれがわからないやつは馬鹿だと思つてしよう。そういうふうな建前で書いてある。そうではなく誰でもわかるようなものがスラックと五ヶ条ほど書いてあればいい。書いてなくてもいい。誰でも言われてみればあたりまえと思つてよいもの、こ

れが世界の法なのです。それを破る奴があったら制裁もあるし、その法に従ってやっていかないと、世の中はうまくいかないのだ、という信念が世界的に行きわたっていけばいい。即ちきわめて単純なものであってほしいですね。現在のように、難しいことをくしゃくしゃ書いたものを示して、これがわからないとだめだ、と思わせるのは、すでに一種のコンプレックスを作るものです。後進国がいまみんな乱れるのは、みんなこのコンプレックスに陥っているからでしょう。

#### 四、思想的吟味

そこで最後の「思想的吟味」ですが、歴史的な吟味をすれば、こういう考え方を提唱することは格別異とするに足りないことなのです。つまりヨーロッパについて言えば、ローマによって一つの大きな秩序がつけられていた。ところがそれに野蛮人が入ってきて、全く違う世の中になり、その野蛮人がキリスト教に感化されてしまつて中世のヨーロッパができ、さらにルネッサンスが始まつて、全く違う世の中になった。そうやっている間に、列強というものが出てきて、今日のようなになった。

ところが列強は、不思議に戦争をやめてしまった。そのうちに近代科学技術の進歩の結果、交通が楽になったから、舞台が世界的になつてしまつた。その世界的になつた今日です

から、もう旧観念でいくはずがないじゃないですか。だから、大きな新しい観念、ものの考え方が出てこなければならぬのは、これは当たり前というべきことでしょう。

では、なぜ先進国にこういう思想が現われないのか、という問題ですが、私はこれは西欧的思想なるものの弱点がそこにあるからだ、と考えるわけです。西欧的な思想というものは、対立抗争的で、征服的で、また存外一面的で、ものを机の上に並べたような思想です。深みをもって考えるという考え方が、どうも足りない。私が欲しいと思うものは総合的直感力のことですが、彼等は分析的にならべることばかりする。だから、いままでと違ったものにボンと飛び移るということは、彼等にはできにくいのではないか。特に近代科学技術というものが、あまり偉くなってしまつて、この分析的な物質的な文明が非常な勢いで人に覆いかぶさってくる。こういう世の中では、人間は学校を出なければ問題にならぬ。ところが学校を出るまでの間に頭がだんだん偏頗になつて、総合把握ができる人がいよいよいなくなつていく。日本もそうだが、ヨーロッパ・アメリカは一層そうではないか、という気がするのです。

例えばILOなんていうのは、実は私は憲章を見たこともないのです。けれどもスポンとものが言えるのです。どんなILOの大家と話しても、ちつとも差し支えない。ところが、むこうの人は何を論ずるにも書物を沢山読んで、資料を山のように積んで、それを理解して

はじめてものが言えるのだ、と思っている。しかしそういう理解をやっている間に時が経ってしまふ。頭も死んでしまふかも知れぬ。どうもそういう状況をヨーロッパ文明に私は感じる。そんなところに西欧的思想なるものの弱点があるように思います。

ところがわれわれ日本人には、私がいま申しているような思想を提唱するについて、何か歴史的必然性がそこにあるのかもしれない、と私は思っている。というのは、日本ではもの把握のしかたが、三千年來この方、島に住んで、仏教が入ってきたりなんかして、練りに練られている。そのわれわれの考え方は、日本人に話せば何でもない。私はあなたがたに話すのに、何の躊躇もなく、苦勞もなく、これをわかつていただけのものとして話している。ところが、これももしハイエック先生だとすると大変です。同じことを言うのでも相手がヨーロッパ人だと。ハイエック先生のように、私とはめざらしく気の合う人でも。ともあれ、日本という国は西欧文明の埒外らちがいにありながら、彼等とまさに対等、科学的技術等においては対等もしくはそれ以上に達している。すなわち異なる文明を吸収して、それを本当に自分の身につけたという歴史を持っているということが、日本に、こういうことについての世界に向つての発言を可能ならしめているのではないか、と考えられるわけです。一層深い立場から言えば、日本人のものの考え方、把え方というものは、それは長い歴史の鍛錬によつて生れています。従つてこのようなこれからの使命にも耐えられるのではないか、と考えられるのです。

《質問に答えて》

◇ 「北爆」について

アメリカのヴェトナム作戦はヴェトナムの内紛に介入しているという立場でなく、人の国に自分のイズムを押しつけるということは許さないんだという立場でやっている、と考えるべきでしょう。たしかにそのやり方は拙劣かもしれない。うまくはいっていないのです。しかしそのうまくいかないのは、いままでやってきた後進国開発のやり方が間違っていたからこんなことになってしまったのです。アメリカ人が、人の国を、民族を分裂させるというけれども、分裂させるように仕向けていったものは一体だれなんだ。

ベトコンの力は、北からの長い間の援助によってはじめて生まれた。北からの強烈な援助、工作員の潜入、それが非常に大きな組織を作る。その上八十年間のフランスの統治の間に、ヴェトナムの根性というものは曲げられているわけですね。

ヴェトナム語は漢語系のことですが、フランス人はその漢字をとってしまったのです。そのことがヴェトナムが国としてまとまる力を失ってきた大原因じゃないかと思えます。その他いろんなことがあって、国としてまとまりにくいのです。だからそれに少し工作すれば、ああいうベトコンのようなものを作るのは割にやさしい。その工作は、一九六〇年から

始まって非常な大きな力が注がれてきた。それが、ひとの国に対して短刀をつきつけている、ということなのです。ところが日本人たちには、その面はほとんど報道されない。そしてこの戦争は全くの民族的なものだということばかり報道されている。だから、日本人は殆んど全部誤解に陥っている。共産主義の浸透を許したら、ヴェトナム全土はもちろん共産化する。タイもラオスもみんないけない。日本もあぶないということになるのです。だから今のような北爆をやって、それを防ごうというのは、手段としてはまずいでしょね。しかし、それ以上にいい方法が見つからなかったから、そうなってしまった。だからこれからもやるほかないのです。つまらんことです。しかし仕方がない。しかし、その仕方がないところが、後進国問題のむずかしさなのです。

#### ◇ 法について

法というものは、人が気がついていても気がつかなくても、厳としてそこにあるのです。いまの世界のまちがいは、多数決で決めたものが法だと思っていることにある。しかし多数で決めたものが必ずしも法だとは限らない。法というものは厳としてそこにあるもの、人間が謙虚な心持になって、私を滅して謙虚にさぐり出す気持ちになっていけば必ず気がつくもの、それが法なのです。つまり砂糖は甘いというようなもので、からいといくら思おうと思っても、甘いものは甘いでしょう。どうにもならない。そういうスタイルにおいてあるのが法な

のです。だが、それに人は必ずしも気がつかない。だからそれを謙虚にさぐらなければいけない。法というものはさぐり出すものであって多数決で決めるものではないのです。

#### ◇ 私の国連観

私が国連はだめだと言うのは、人々が国連に過大な信用と期待を置くからです。自分は怠けていながら国連があればいいようなことを言うからです。それでは一体国連にはどういう欠陥があるかというのと、作った時には、これからもソ連と協力ができるといふ前提があった。ところがその前提が実は存在しないのだから、いざやってみたら、拒否権の発動ということ、大問題はひとつも決まらない。こうして国連は、くだらぬ演説会の場所のようになっていくわけです。皆がわあわあとして自己宣伝する場になっている。大きな問題で国連で決まったように見えるものは、みんな米ソ両国があらかじめ了解したものを国連へもち出して決めたものだけです。また国連をはずして米ソだけで決めたものも沢山ある。これが国連の歴史です。大国の支配というけれども、国連は大国なんかを支配してはいない。むしろいま国連を支配している者は、A Aグループです。このグループが世界のためではなく、自分のためを考えて、連合すると、それが一番票が多い。だから、このA Aグループがいまの国連の支配力といえるのです。もっともアジア・アフリカといっても、その基礎はばらばらなのだから、すぐ利害によって分裂する。これが国連の現状です。

◇ 憲法について

憲法改正の議論があるが、私は憲法を変えるよりは、憲法というのをやめた方がいいと思う。日本という国は神ながら「ことあげ」しない国なのです。文章で書いてガチャガチャ言うのは西洋流です。彼等の世界では、いつか必ず争いがあるから、正確な文章を書いておく必要がある。だが日本人はそういうふうには争わない。日本人は、非常に大事なことは言葉にならないということをよく知っているのです。万感胸に迫って言葉をなさず、ということとは、誰にもよくわかっている。日本人というものは、ほんとうに感じたときにはあまり多弁ではないのです。

だが西洋人は感じるとベラベラ喋る。オペラを見ればそれがよくわかる。だから、日本人の性質から言えば、憲法というものは法律にしないほうがいい。憲法をやめてしまつて、不文律でいくがいい。現にイギリスのように不文律の国もあるので。ほんとうの国の基礎は不文律にしておいて、自然の赴くままに、国民感情かなにかで処理していく。ただ行政のやり方をきめた法律だけを作ればいいのだ。行政基本法です。それを遠慮なくいつでも直す。毎年毎年直してもいい。そうやって行けばいいと思います。

◇ 日本の貿易について

日本は資源のない国ですから、適当に物売って原料なりエネルギー物資なりを買わなけ

ればならない。必要なものは石油から始って食糧までたくさんあります。ただここで注意しなければいけないことは、輸出はその金を作るだけという限度にしぼるべきだ、ということです。輸出すれば経済はよくなると考えて、シャニムニ輸出をすべしということはおやめなさい、と私はいつている。買いたい物を買うために、そのためのお金を儲けるために、それだけ輸出する。それだけ余分に働くという働き方がいいのです。ところが、日本のいまの思潮は、輸出さえ多ければいいのだ、という昔からの惰性がつづいている。それがいろいろな弊害をもたらしている、と私は考えています。

#### ◇ 自己責任について

世の中がどんなに悪くても、最終的には自分だけは平然として生きられるという心境があるわけです。そういうことを先に考えないで、先ず社会をよくしなければならぬと考える。自分が満足して生活できないのは国家が悪いのだと考えて、自分の責任を回避しようとする。社会主義とはつまりそういう行き方、左翼思想というのは、みんなつまりそういうのです。だから私は、生まれながらにして反社会主義なのです。私は自分で責任を取るといふことを、子供のときから考えているからです。自分で責任を取る人は、決してすべてを国家の責任にはしない。ひと口に言えば、ずるい人が国家の責任にする。団体を組んでワイワイやっつて、国家改造のためだという。一種のゲームです。マルキシズムというものに、学会並び

に学生が取り憑かれてゐるひとつの理由は、このゲームの面白さにあるといえましよう。

◇ 世界秩序と共産圏

私が言っている世界秩序というものは、共産主義というものがなくなつてから出来るのです。だから、国連から共産勢力をなくして、三十なら三十の国だけで新しい秩序を作りましようと言つて、新しい国連を造るつもりでやりになつて少しも差し支えない。

人の国を共産化してもいいのだというイデオロギーをお捨てになるまでは、そういう国は仲間に出来ないのです。仲間に出来ないということは、決してそれを相手に戦争するという事ではない。仲間に出来ないが、そつとしておけばいい。そうすればいまのソ連がそうなり、いつかは東ヨーロッパがそうなるであらうように、中共もきつと「普通の国」になる。そうなればいいのです。これは考えによつてはやさしい芸当なんです。決まりきつたことをやるだけなのだから。ただ導くに道をもつてするとうか、おつき合ひする側が、そのやり方が利口でさえあれば、自然に彼等にもわかつてくるはずです。そういう意味で、私は中共とも貿易をしたほうがいいという論者です。彼をしてそういうことを悟らしめるためにね。

◇ 力と法との関係について

力があれば、中共の原爆工場、ミサイル工場を爆撃したほうがいいんじゃないかと私は言つたという御質問だが、私は力があれば、と言つたのではない。アメリカには武力は十分あ

る。力はありあまるほどあるけれどもやらないのです。やると世界がごちゃごちゃになる。その処理に自信がないからやらないだけだと、私は思います。やってもいいんですよ。私がここで申しているような絶対平和の思想に立って、悪びれずに、平気でやればいいのです。見せかけの謙遜ではなくて、本当にこだわらなく、おれは強いから、だから悪いやつがいたらおれは征伐してあげるのだ。だから安心していらっしやい、と平気で言えるようなアメリカになつたらいい。しかし、それだけの悟りはないでしょうね。アメリカ自身にも。武力はあるけれども、ほかの力がないし、状況は熟していないから、いまはやらないほうがいいというだけです。法の支配があればいいけれども、それがいまはない。法の支配が本当に出来たときなら、問題なくやったほうがいいと思います。

また共産主義に対しては、自由陣営は武力で立ち向かってよいものでしょうか、という質問ですが、向うが武力もしくは陰謀というもので立ち向つてくるならば、武力をもって、もしくは陰謀を使って、立ち向かうべきものです。立ち向つてもよいのでしようかじゃない、立ち向かわねばならないのです。それを遠慮しているから傷がだんだん大きくなるのです。しかし、向うがそういうことをしないように、そういうことが出来ないように、未然に防ぐことが出来たら一番いいのです。

◇ 絶対平和の思想について

現代は力の均衡によって平和が保たれていますが、それは本当の平和ではない。本当の平和とは、平和を破ろうとするイデオロギーに勝つイデオロギーを風靡させることです。自分の国だけでも、科学技術を本当にうまく利用して、国内が本当に和合して、高い理想に導かれて国政をやっていけば、どんな生活でも出来るようなのが現代です。だから、何を好んで、力で人を支配するものか。そういう思想をみんなが持つてしまえば、兵器などはどんなに発明してもこわくないし、第一発明の意欲がなくなりますよ。そういうイデオロギーが、もう少しはつきりしてくれば、それでいいのです。戦争というものが、真にばからしくなればいいのです。戦争をこわがらなくなる、あまり気にしなくなる、そのような人が、本当の平和がわかった人間だと、私は思っています。

#### 講師略歴

東京大学法学部独法科を卒業。横浜正金銀行に入り上海、ハンブルグ、ロンドン等において勤務、戦後大蔵省に移って終戦連絡部長の要職にあった。現在世界経済調査会理事長。著書に「総合経済政策の提案」（日本経済復興協会）「国の個性」（文芸春秋社）「世界の見方」（論争社）「国策を考える」（時事通信社）などがあり、グループ研究として「後進国開発の研究」等多数がある。



日本的情緒について

岡

潔



はじめに

「情緒」とは何か

自己中心のセンス

死を見ることが帰するが如し

文化の基盤

〈質問に答えて〉

## はじめに

最初に表題について申し上げます。春のころでしたが、主催者の内のお二人が見えて、学生の方たちの合宿教室に来て話して呉れないかといわれてお引受けしたのです。表題を何とするかといわれるので「日本の情緒について」と言ってしまったのです。ところがその日本の情緒について、私が知らないと言えば嘘ですが、どう話せばよいか知っていると云ったらまた嘘になってしまいます。非常に言いたいことだけれども、その頃はまだ言えなかつた。夏までには言えるようになるだろうぐらいに思ったのでしよう。夏になりましたがやはり言えそうもない。それで、知ってはいるが簡単に言えそうもないことについて、非常にお話したいと思うからお話することなのです。

私は数学の研究を専門にやっていますが、近頃いろいろ随想集を出しております。それらのものについて、ある人は私を哲学者だと批評しました。自分では、私は科学者だと言ったことがあります。そのうちまたある人は私を詩人だという。それで、一体自分は何だろうと考えてみた。やはり詩人というのが一番あたらしい。私は一生の大部分、数学の研究をしてきたのです。そのとき何を使ったかと申しますと、直観と情熱を使った。直観と情熱を使うのだったら、哲学者ではありません。科学者でもない。詩人です。それで、いま分

ってはいえるが言うことのできないものについて言おうと思っている、という状態なのです。どういふことになるか知りませんが、一時間半ほどお話する。そのあと、私の話について関係のあることでも、ないことでも聞いて下さい。知らなければ知らないと答えます。それより仕方がない。私はいつも直観と情熱でいくらしいのです。

### 「情緒」とは何か

日本の情緒というのは、日本民族というお魚がそこに住んでいる水のようなものである。同じ国籍であっても異民族もあるでしょう。そういう人はそんな水には住んでいない。日本民族、あるいは日本人といった方がおだやかですが、その日本人というお魚が住んでいる水のようなもの。その水に住んでいる魚だからその水がどんなものか分ってはいる。しかし始終そこに住んでいるのだからどんな水かは言えない、そういうものを少しでも彷彿していただこうと思つたら、そこに住んでいる魚の泳ぎ具合をいえば、ややわかるような気がする。そこで早速、魚の一尾である私の泳ぎ具合をお話ししたい。そういう魚を住ませている水という少しはわかるでしょう。

ところで、情緒という言葉ですが、私は「心」という代りに「情緒」と言つたのです。情緒という言葉は昔からあります。心という言葉も昔からあります。はっきりした定義はな

い。しかし、情緒というのはある使い方使われてきている。情緒と聞けばあるセンスが起る。心と聞けば他のセンスがおこる。そこで、情緒と聞いた時に起るようなセンスの側から心というものを見たかったのです。在来使われている情緒というよりは、つまり心という意味にまで拡げて理解してもらわないと、この言葉の意味がわからないことになりま。す。何故心を情緒と言ったかという理由は「紫の火花」に書いて置きましたが、ここで繰り返しておきます。

狭い意味での情緒ですが、それもいろいろあるでしょう。日本の情緒といえ、例えば式子内親王のお歌にこんなのがあります。

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮れの空  
また和泉式部の歌にこういふのがあります。

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天下り来むものならなくに  
ここに詠まれているものが情緒です。萩原朔太郎という人は、この二つの歌は非常に傑出した歌だといった。それにつけ加えて、和泉式部の方は小ぶとりにふとった人を思うし、式子内親王の方はやせた人を思うといっています。その話を聞きまして、是非そういう歌のおさまっているものを読んでみたくて、「恋愛名歌集」を買って来て読んでみました。結局全体を見ても、この二つが一番よい。こういうものが情緒です。それを心といふところまでぐ

つと拵げたのが私のいう情緒です。既に亡くなられた折口信夫先生が、戦後の世の様を嘆いて、「大和撫子よ、精神的な恋をせよ」といわれました。一寸言い方が違っているかも知れませんが、これが日本の情緒です。いま日本の女性が懐れているのは、アメリカ的情緒と言います。折口先生はそういうことをするなといわれたのです。アメリカ的情緒というのは、刹那のためには死もいとわれないという強さは全然ないのです。だから、そういう心を中心におきますと、身も心も全体がぐにやぐにやになる。日本の情緒ならびんと張るのです。

こんなことを言っていたら、少しは彷彿とするのだろうかと思つて申すのですが、ギリシヤ人は心の働きの知情意と分けました。その後、西洋人が感覚という言葉をつけ加えた。それで知情意感覚が心の働きだといっています。その感覚はしばらくおいて、知情意のどれが本当の心の主人公だろうか、こういう問題を少し話してみます。これはやはり情緒の説明になつてしましますが。

知には情を説得する力はない。意志はもとより情を押えつけることができるだけである。そして人は情が満足すれば——これは広い意味の満足ですが——満足することができる。知が満足し、意が満足しても、情が不満を唱えたら——適当な言葉がありませんが——どうしても満足することができない。それで人の中心は情だということになります。われわれは、自分に対しては時として知によって情を説き、乃至は意志によって情を押えつける。これは

時と場合によって必ずしも悪くはない。しかし、人に対しては絶対にそれをしてはいけない。つまり自分の知や意によって、人の情を説きふせようとしたり——説きふせるといっても押えつけることですが——人の情を曲げようとしてはならない。これが多くの人とともに生きる時、是非知っていなければならぬ根本の心得です。

民主主義という言葉がしきりに使われますが、アメリカから取って来た言葉だけあって、内容がないのです、この言葉に内容を入れようとするならば、民主主義という言葉がアメリカにできはじめたころ、地上にどのようなものがあつたかを考えねばならない。その反対が民主主義という言葉の内容です。実際ワシントンのころには、歌にもありますように天も許さぬ虐政がありましたし、リンカーンの頃は黒人を奴隷扱ひするという事実もありました。その反対でなければならぬというのが民主主義です。いつも上流は澄んでいるけれども末は必ず濁ってしまう。その濁りきつたところをとって来てまねようとしているのが今の民主主義のとり入れ方です。それでは民主主義の真髄とは何か。それは、大勢の人の知や意によって、たとえ一人の人であつても、その人の情をひどく泣かせ悲しませるようなことは絶対避けなければならぬということだと思います。松川事件というのがありました。全員無罪になつて、私は大変うれしく思いました。仮りに無実の人があつて、その人に子があつたとする。そうするとひどいうらみがその人の心に結ばれて、どうしてもとけないということにな

るでしょう。たとえ一人の心だからといって、こういうことは決してしないというのが民主主義だと思ったからです。そこで私はやれやれ死刑がなくなつたと思つて大變うれしく思いました。そうなれば人の心は喜ぶものです。これが日本の情緒なのです。

### 自己中心のセンス

支那に「水清ければ魚住まず」という諺があります。私は三高に入りましたが、三高の寮歌に「それ濁流に魚住まず、秀麗の地に健児あり」というのがあります。私はそうだと信じて疑いません。濁つた水に住むのは、どじょうかなまざるぐらいなものでしょう。日本の情緒、つまり日本人という魚の住む水は非常に濁りをきららう。日本人は濁り、特にその人の根本である「情の濁り」を嫌います。それが澄んでいなければいけないのです。つまり、人の行為を判断します時に、正邪、善悪によつて判断するのではなく、清濁によつて判断するのです。それでは、その「濁り」というのは何であるかといえますと、その根本は「自分中心に知情意し感覚する」ということです。つまり自分中心のセンスです。それを濁りといつてもよろしいし、それが濁りの根源であるといつてもよろしい。「あいつ、あんなことをいつてあんなことをしているのに、内心は自分の利益をはかつている」と思えば、またそう感じれば、全然認めない。日本人は利己的であるという臭いに非常に敏感なのです。人間は自己中心である

ということを離れては、なかなか行為はしにくい。だから日本人のうちに、そうはできない人が多い。しかし、そういう人でも、内心それをよいとは思っていない。だから他人を讃えるときは自己中心のセンスをもっていない人を讃える。これがわかりやすくいった日本的情緒です。

ところが、終戦後になって一切を変えてしまった。個人主義を採り入れるというので、真先に日本国憲法の前文が出たのです。あれを読んでみますと、「自己中心に知情意し、感覺し行為する」ということが万古の真理であって、これが個人の尊厳であると書いてある。とんでもないことです。こんなことはずっと昔からの日本的情緒の正反対をいつていることがお分りでしょう。とんでもないことをいつたものです。

個人ということについて、もう少し言いそえておきましょう。自分の肉体、自分の感覺、自分の意欲、大体それが中心になったものが自分である。一人一人の自分は個人である。分りきったことだからに個人主義というものをごく安易に考えている。そして、あんな無茶苦茶な作文を書いたのです。そういうものは仏教では小我と呼んできたものです。西洋人はそれを自我といっているのです。もし個人が小我であるならば、個人というのは、昔から人類の先達である大天才たちがもてあましているものなのです。孔子は個人を小我と考えたでしょう。そして自分をしつけにかかった。そして、自分という個人をちゃんとしたものにし

つけるのに七十年かかっています。それで孔子は「七十にしてはじめて矩をこえず」というようなことを言っていて嘆いたのです。個人をちゃんと行儀づけるために七十年かかるのなら、そのあとは何をすることもできないと云って嘆息したのです。

また欧米の民族は、小我を自分と思うことしかできない民族です。それがあの民族のもっている一番大きな欠点です。欧米人は自我と呼んでいます、彼らは自我を自分だとしか考えようがないらしい。そういう民族に、「自我は本当の自分ではない、自分の敵だ」などと、仏教がいつているようなことを教えても、全然無駄であります。だから、そういう人達に布教しようとしたキリストは、人の子は罪の子だとおっしゃった。これは当たっています。その通りです。小我が自分なら、罪ならざる自分はない、大体そうなります。

もう一人ソクラテスがあげられるのですが、ソクラテスだけはそういうことは何も言っていない。人には理想が大事だというような別のことを言っています。人は普通人類の先達として大天才を四人数えあげているのですが、そのうち三人までは口をそろえて小我を去ることを言っています。釈尊は、小我は自分ではない、自分の敵であると教えておられます。儒教もそれを取り入れて、「山中の賊を破るはやすく、心中の賊を破るは難し」といっています。その心中の賊とは何かと言いますと、あなた方が学校で、「これがお前だ。だからそれに基本的人權を与えて大切にせよ」といわれて来たそれなのです。この体、この感情、この意欲

といへばすむところを、自分の体、自分の感情、自分の意欲というのです。「自分の」ということは自己中心にのみ考えるところの意味です。これはとんでもないことです。

欧米から取った思想といつても、キリスト教は人の子は罪の子と教えているのです。そういう人間を尊厳だと言つたのです。呑気ですね。何も知らないで作文を書くことのできる人です。憲法の前文には署名がないから、誰が書いたのか分りません。あれはおそるべき悪文ですね。内容的にいって、よくあんなものが書けたものだと思います。あの作文に基づいて憲法をつくり、法律もつくる。それだけではありません。それぞれの社会通念をつくり、それを広めることを大新聞が手伝う。とうとう今では皆そんな風に思っている。それですませればまだいいのですが、教育がそれに同調したのです。これはひどいことです。他のものはただその時代ですみますが、教育にそうやられたのでは次の時代がそうなってしまう。たった二十年ですが全くの無茶をやつたものです。ひどいことになるのは当然です。

法務省は中学生の三割が非行少年であると発表している。三割といひますと罹病率は大抵のものより高いですよ。そんな恐ろしい学校へ是非入れと強要しているのが義務教育です。人身御供を強いているようなもので、一体どこからそんな強権がでるのか、天も許さぬ虐政です。実際やっていることはみんなそんなことです。

おかしい字ばかり少し決めて、よさそうな字はみな省いて、この字の中からでなければお

前の子や孫の名前をつけることは相成らんと立法府が決めて、その通りやっている。どこに自由がありますか。もう実に悪政です。

もう一つ厚生省の発表を添えておきましょう。三才児の四割が問題児だということ。生まれる子供の四割はできそこないという意味です。他の国は一パーセント前後です。大体、子供を産むときに四〇パーセントも産みそこなうことを続けて行ったらどうなると思いますか。町を作るとき三分の一は罪人の住む家を作らなくてはなりません。いちいちひどいことになっているのです。

日本の情緒の中でなければ住めない魚の水をかえたりすると、こんな結果がでるのです。投票でもそうです。先年の参議院議員選挙の最高点当選者は美容院の校長さんです。自分の家の生活費が安くなるように投票せよ、と教えられながら、美容院の校長を最高点で選ぶというの、その二つの間にどんな関係がありますか。美容院の校長を最高点で選んだら、たぶん生活費は上ります。日本人は全く啞然としてしまっている。啞然として自己を見失っているというのが現状です。芭蕉にいわせると「是非善悪の区別もなく、鮎の泥に酔ひたるが如し」というのでしょうか。それが現状です。

死を見ること帰するが如し

おかしな方に話がいきましたが、ともかく日本が今しようとしていることは、その中心に仕込まない魚の水をかえようとしている。もっと端的にいえば、水の中に住んでいる魚から水をとろうとしているようなものです。アメリカ人という魚の住んでいる水と、日本人という魚の住んでいる水とは全然違うのです。アメリカ的情緒の方は外から見るのだから言いやすいのです。日本の情緒の方は言えない。折口さんは大和撫子らしい恋をせよと言った。その一瞬のために命を惜まない日本の情緒でなければ、そういうことはわからない。一人の人の心にもうらみを結ばせるということは絶対してはいけない。こういうのが日本人の考え方である。そしていざとなれば非常に強い。「神風特攻隊」の恐しさは、本当にこれを見た人でなければ分らないとイギリスの歴史家が言っています。沖繩で見たのですがね。死の方にもいろいろありますが、ああいう死に方ができる。「死を見ること帰するが如し」なつかしいところへ帰るような死に方でしょう。これは小我を自分だなどと思っただけでは決してできない。そんなにも強い。そんなにもやさしく、そんなにも強い。

元寇の時、時宗が元の使者を龍の口に斬りましたね。あれを時宗は平気でやってのけた。あれはなかなかやりにくかったのです。それで祖元禪師のところへ相談に行ったのです。そうすると「怯懦いづこよりきたる」と問われた。お前は臆病になっただけか、それはどこから来るのかと問われた。時宗は答えられなかった。「怯懦時宗よりきたる」とおっし

やった。時宗というお前の名前から臆病さが来るのだとおっしゃった。時宗は不服でいろいろ反対を述べたけれども、とうとう小我が自分だと思つてゐるから恐しいのだとわかつた。それで時宗は、小我を自分だと思ふことをやめた。本当の自分は真我といつて小我ではないのだから、小我は捨てようと思えばいつでも捨てることができるといふのです。それをしてしまえば、なすべきことをなせばよいのだから、平気でできるのでしよう。後世の人は時宗を剛毅果斷といつていますが、剛毅果斷でも何でもありません。時宗からすれば、真の時宗どおりに行つただけなのです。小我の言うことに耳を傾けなかつただけなのです。自己中心には何も考えなかつたのです。それだけのことです。だから勇氣といふものがあるのではない。怯懦といふものがあるのですね。「神風」にはその怯懦といふものがない。普通の行いを普通にする、それが限りなく恐しいとイギリス人の目に映つた。そういう風なものが日本的情緒なのです。

ところで、まだ日本的情緒がちつとも形に出ておりませんが、何とかしてそれを出そうとしてゐることは分つていただけるでしょう。日本的情緒そのものはなかなか描けない。それはそうですよ。そこにしか住んでいない魚に水を描けといつたつて。そこで、何とかしてもう少し上手にいうようにしたい。

そこで、一度世界のありさまを見てみましょう。今大抵の人は文明だといつていますが、

その内容をよくみてみますと生存競争に他ならない。コッホがコレラの原虫を発見した頃は、科学のすがすがしい夜明けという気がしますね。そのへんではたしかに科学は福祉に貢献しました。死にたくないと言っている人を、細菌によって殺されることから守ったのです。インドの沼に原産する虫がコレラのものであるということを見つけたところから、何だかおとぎ話を聞いたような気がします。ところが、それからしばらく経って、人類あつて以来の世界的な規模の戦争をはじめてしまった。科学がそれをするに足るだけの破壊力を準備したからです。コッホ以来たった百年しかたっていない。実に速い。

それから、アインシュタインが、全く何もない方向に理論を立てて、ノーベル賞をもらったのです。人々はそれからずっと研究を進め、最後に具体的に原子爆弾を作り出した。それを広島に落とすようになった。その間たった二十五年です。実に速い。悪いことをさせると実に速いのです。恐ろしくて仕方がない。文明の内容が生存競争ならば、これは人類時代とは呼べない。獣類時代の最後というほかはない。人という名のついている獣類は、非常に悪がしこい奴で、生存競争は熾烈をきわめている。これが現状です。原子爆弾、水素爆弾のよくな破壊力、何もないと勝手にそれを作るのに二十五年なのだから、いっどこに何をつくるかわからない。誰が見ても、激しい生存競争をやっているのです。それを人類の福祉だなどという、みなそうかと思うくらい何も知らない。それが現状なのです。

仏教的な例えで申しますと、今の人類の様相は、まるで肉欲、我欲の火が燃えさかっているようです。そして、恐るべき破壊力が用意されている。火焰の燃えさかっているような有様です。何とかしてこの火を消して、生物を絶滅から救いたい。所で、この火を消すためには「帰するが如く死ぬ」ことのできる民族でなければ、とてもできない。小我が自分だと思ふところから利己主義がでて、我欲の火が燃えさかっている。それを消すためには、自分がそんなものを持っていては駄目でしょう。そんなものを持っていては、まるで油を背負って火に赴くようなものです。だからこれは日本民族でなければ消せないということです。

そういうときですから、この日本民族が日本民族であるという本来の姿に一刻も早くなつてもらいたい。そして人類を滅亡から救ってもらいたい。大体「死を見ること帰するが如し」などという妙な民族が何故これまで用意されていたかといえますと、大自然はこれを用意しておかなければ、いまに人類が滅亡すると、そう思ったからでしょう。日本人のこの素質は、他には一向使い道がないと言ってもいいくらい特殊のもんです。いや、使い道はいくらもあるのに、ろくな使い方をして来なかったというべきです。神風特攻隊というようなところにだけ使っても仕様がなない。けれども、あれによって日本民族はこんな民族だということも分つた。最も下手な使い方をしたので。しかし、何をやるにも、本当にやる時にはこれは使える。ことに、真も美も善も、広義の文化の内容はすべて創造といわれています。

が、創造するのに小我は邪魔になる。だから、すぐそれから離れることができるというの  
は、容易に得られない素質です。人類時代の文化を始めるためには、是非その素質を使わ  
なければなりません。

生存競争のためというような時には、本当に真剣になれないでしょう。それを、今よりも  
真剣にさせようと思うと、人々は根性というようなものを大事にしてはいけません。根性など  
でやってみて、人類の福祉に役立つようなものができるのですか。ともかく差当って人類  
の滅亡を救わなければならぬ。それにはこの火を消さなければならぬ。日本人の素質は  
そういう風に使いたい。そういう使命が正しい日本人にはあるのですが、その前に、こんな  
水の中で住めといわれたら、真の日本人は死んでしまいます。残るものは異民族ばかりで  
す。やはり日本という国籍は持っているでしょうけれどもね。こんな水の中に住めるものは  
日本人ではありません。日本は昔から外国の真似をして、自国は駄目だというやり方を何度  
もやって来ました。しかし、今度アメリカに対してしようとしているほど弊害のひどいのは  
なかった。今度ばかりはもうそれはやめてもらいたい。でなければ真の日本人は死滅してし  
まうだろう。それでは、人類を滅亡から救う者はなくなってしまう。そう言いたくなる。真  
の日本人の住んでいる水がこんなものと言いたいのですが、それがなかなか正確に言い表わ  
せないのです。

## 文化の基盤

善とか悪とか言っても、その民族の情緒によってひどく内容が違います。日本ではどんなものを善と行って来たかを、歴史上の逸話で考えてみましょう。応神天皇の御子のうち末子は宇遲能和紀郎子命（うぢのわきのいらつこのみこと）というお名前前で非常に学問がお得意になった。当時は儒教が日本へ渡って来た直後だったと思います。そこで応神天皇は、こういう方に国を治めてもらったら、さぞかしうまく治まるだろうとお思いになっていた。しかし、そういうことはおつしやらずにおなくなりになった。次の天皇を立てる時、人々は長子の方のところへ行つた。これが後の仁徳天皇です。大阪に住んでおられたので、当然その方が天皇に立たれると思つて、皆お祝の品を持って大阪へいったのです。すると、「いやいや、わしじゃない。お父上のお考えは末の皇子である。だから宇遲へ行け」といわれた。人々はお祝いの品を持って宇遲へ行つた。そうすると「当然上の皇子が後を継ぐべきである。しかもあの方は非常に情深い方だから、きつとうまくゆくだろう」とおつしやつた。そこで皆はまた大阪へ行つたのです。そんなことをやっているうちに、お祝いの鯛は腐つてしまいました。た。そういう困つた事態になった時に宇遲能和紀郎子命は黙つて自殺してしまわれた。話はそれで済みます。そして仁徳天皇が位におつきになった。そういういきさつがあつたからな

おさらなのでしようが、御世は大変よく治ったといわれています。その宇遅能和紀郎子命のような行為を、日本では昔から善行と感じて来ているのです。

また明治に入ってからこういうことがありました。ある小さな子供が禅の修行に出来ました。お母さんのもとを離れる時に、「お前がもし修行がうまくいって、世の人がもてはやしてくれるようなら、私のことなんか忘れてしまつてよろしい。しかし、一旦うまくいかなくなつて、誰も相手にしなくなつた時には、私のことを思い出して、是非私のところに帰つて来て欲しい」とお母さんが言いました。それから随分経ちました。その禅師は修行ができて、仙台の瑞巖寺か何かの、大きなお寺の住持になつた。そうするとある日、「お母さんが病の床について、もう起き上れないような有様だから、一度会いに帰つて来て上げてほしい」という使いが来た。禅師が帰つていかれると、お母さんがその顔を見て「私は三十年間お前に一通の手紙も書かなかつた。しかし、お前のことを思い出さなかつた日は、一日としてなかつたのだよ」といったのです。それでお終いです。日本ではやはりそういうのを善行といひます。

これはいつごろのことだつたでしょうか。満洲事変と日支事変の間の、重苦しい、戦争のない期間のことです。そのころ新聞にある歌の本の広告がでたのです。恋愛に破れ、睡眠剤で自殺した女流歌人が、死の直前に一首の歌を詠んでいるのですが、それが実にうまい。そ

の歌も広告に出ていました。

大いなるこの静けさよ天地のときあやまたず夜は明けにけり

私はその広告を見ましてすっかり買いたくなつた。当時大阪から十数里離れた和歌山県におつたのですが、すぐ大阪に行つてその本を買いました。「武尊ほたかのふもと」という題がついていました。武尊とは山の名前です。そんな風にして買って来たのですが、他のうたは讀み流しただけです。広告の一首のために、わざわざ大阪へ行つてその本を買つたわけです。これが「死を見ること帰するが如し」というその瞬間の心境です。小我を離れるとそうなるらしい。

一家心中の話を永井龍男という人が書いているということを、この数日前小林秀雄さんから聞いたのですが、まだ読んでいない。一家心中だつて、「さあやろう」としたとき、「死を見ること帰するが如し」と、つまり小我を離れることができれば、その心中の仕方が大変變つてくる。まだ読んでいませんが、もしそれが本物だつたら、小我を離れるという境地が分るのです。

日本人は本質的には、小我を離れた境地にいます。それが、死の瞬間にはっきり読みとれるのです。もし、永井龍男さんの創作がイミテーションでなく本物なら、それを見れば大分日本の情緒の色どりがわかるはずです。あれはやはり専門家でなければ、なかなか書い

てもらえない。日本の情緒は、本当の日本人という魚がその中に住んでいる水のようなもので、わからず屋たちが寄ってたかって、その水をアメリカ的情緒というようなものと入れ替えてしまおうとしている。これをやられては真の日本人は死滅するほかはない。そうなれば、世界の滅亡を、人類の滅亡を防ぐことのできるものはもうおるまい。そう言いたいのです。

日本人は、この日本の情緒という基盤の上に真善美、つまり広義の文化を建設するより仕方がない。日本人ならそれしかできない。このどさくさの中をうまくのりきれたあとに、日本の情緒があつてこそすべての文化、この広義の人類の文化に生きがいを与えることになるのです。ともかく、日本の情緒というのはそういうものなのです。そういうものがはつきりとあるのです。特に女性の方は、日本の情緒の中に住んで下さることをお願いしておきます。アメリカの女性が恋愛とと思っているものと、日本の女性が恋愛と思うものとは、一方を肉体的、一方を精神的といえはわかるくらいちがうものである。だから折口さんは「大和撫子よ、精神的な恋をせよ」といったのです。何も恋だけじゃありません。特にそこが目立つてよく分るから、それをとらえて言っただけです。日本の情緒の中で住んでほしい。それができなければ、ちゃんと子供を育てることも何もできなくなってしまう。他のことはみな肯んじられても、この水の入れ替えだけは承知できない。そう思います。

一応お話はこの辺でお終いにします。どこまでいっても、はっきり言えそうもない。ただ、はっきり言えそうもないが、非常に大事な日本的情绪というものがあるのだと、そう思  
って下さい。

《質問に答えて》

日本の情緒の感じ方

(問) 私達は日本の情緒というのは、まだはつきりと自分で感じられないのですが、どうしたら感じ得るようになれるでしょうか。

(答) 私はそんなことにならぬように教育してもらいたいといっているのですが。例えば、明智左馬介という男が、どんな風に琵琶湖の湖水を渡ったかというような歴史的な例を教えなくても必要があります。ひとつひとつの魚の泳ぎ方を教わるうちに、自分も同じ種類の魚であることを知って、そう泳ぐ。そう泳ぐことを可能ならしめているものが、日本の情緒なのです。だから、日本人という魚に本来の泳ぎ方を教えてやってくれ、それを教えなければ困ると教育へ呼びかけている。あなたは、そういう教育をされずにここまで来てしまったのです。たとえば、明治にあつて個人主義について真剣に考えた人、そしてちゃんと成功している人は夏目漱石です。漱石のものを少し読んでごらん下さい。あなたは、よその情緒ばかり習って来た。それで、少し努力をしないと分らないでしょう。しかし、鮎はやはり鮎です。泳ぎ方を全く忘れていても、一寸と見せてもらえばすぐ分るので。ただ機縁がなければ全く分らないでしょうね。明智左馬介の湖水にざんぶと乗り入れる銅像を大津市が琵琶湖畔に

建てるといっていました。非常によいことです。そんなことをいろいろやってくれますと、日本人という魚が日本の情緒という水の中で、どんな風に泳ぐか分る。そんなことを教えて何にするのだ、講談のときか何かでなければ使われはしないじゃないかと今の教育者は思っている。じかには書けないけれど、日本人が日本人として行為したということなら書けるから、そういう例をいろいろ書いてくれたら、そういうことをあらしめている根底のものがわかるのです。何故って、大体自分がそれなのですから。全くその種族から離れていたら、忘れているでしょう。鳥だとしたら、一声鳴いたらもうすぐ思い出す。そんなものでしょう。日本の情緒の中に於ける個人主義とは如何にあるべきものかというようなことを言いたいのなら、そんなむずかしいことをいうより、漱石を読む方がはやい。それを読めないように教えるという今の教育はまことに閉口だけれども、その代り少し努力するということはできるのだから、そのチャンスを生かせばいいのでしよう。

### 女性と日本の情緒

(問) 先生は特に女性は日本の情緒の中に住んでほしいとおっしゃいましたが何故でしようか。また子供に接するとき最も大切なことをお教え下さい。

(答) 恋愛は情緒のオリジンですからごく分りやすいのです。アメリカの有名な映画スター

などの恋愛の仕方、あれは精神的恋愛などと義理にも言えないでしょう。腐肉の匂いがする。その反対が日本の情緒です。日本の情緒とアメリカ的情緒の違いは、女性に最もよく表われます。女性は気一本にそこのうち込めるから全く違ってしまふのです。

子供を育てるといふこと、これは非常に大事なのですが、日本は今敗戦の痛手がまだ癒えきらない。それどころか、これから益々それが拡がろうとしている。一口にいえば、国民精神が日々沈滞して、例えていえば風船の空気がぬけてしまつて、べしやつとなつていふような状態にある。それで簡単に忘れるはずのない日本の情緒を忘れてしまつていふのです。そういう状態から立ち直るためには、婦人が子供を日本の情緒によつて育ててもらわねばならない。その女性が私の期待と最も反対なことをしているというのが現状です。だから特に女性にと申しました。

子供に接するとき最も大切なことは、やはり日本の情緒といふことです。その中に生きる人をつくるといふことです。人の心がよく分る、わけても人の悲しみがよく分る、というのが日本人です。そのために、いざとなれば元の使者を龍の口に平然として斬るといふのが日本人の強さです。あくまでも人に対してはやさしい。そして無慈悲なことをするものに対しては真底からの憤りを感じる。それが男性に現われた日本の情緒です。女性の場合は、真に精神的恋愛とはどういふことがわかるような人として現われるでしょう。そういう人だな

ければ本当に子供を日本人に育てることができない。

### 自然科学と日本の情緒

(問) 私は自然科学を学んでいる者ですが、自然科学と日本の情緒の関聯についてお伺いしたいと思います。

(答) 自然科学によって得たものは、みんな「道具」にすぎないのでしよう。人それ自身は日本の情緒でなければならぬでしょう。便利な道具があっても、使い方が悪いと、これはよくない。人の心というものが進まないのに、自然科学という手段ばかり進んだ。それで、まだあんよもろくろくできない子に刃物をもたすようなおそろしい結果になった。それが現在の有様です。自然科学のよりどころであるはずの、自然とは何かということをよく考えないで素朴な概念としての自然に基づいてやっていただけです。厳密に言えば、こんなものは学問とはいえないでしょう。そういうやり方でやっても、破壊だけはできるのです。建設はとてできない。私は子供のころ、葉緑素はまだつくれないと習いました。今でもまだつくれないでいると思います。葉緑素がつかれないのだと、最も簡単な有機化合物がつかれないのです。大体できることは破壊だけです。機械文明と言いますが、そこで使っている動力は何かといいますと、石炭、石油みな昔植物がつくったものを拝借しているのです。原子力発

電などといっても、もとはやはり自然が作ったものでしょう。文明文明といっているものも、自然が作ったものを借りて来て、それを破壊することによっていろいろやっっているだけなのです。だから、日本的情緒がちゃんときななければ、自然科学を学ぶというようなことをしてもらっては困るといっているのです。

### 道徳教育と日本的情緒

(問) 道徳教育と日本的情緒の関係は密接だと思うのですが、如何でしょうか。

(答) ある国の人が善といっているものは、その国の情緒の中における魚の泳ぎ方がよいといっているのです。だから、そういうのをいろいろ集めたら何か出ますけれども、それだけでは日本人はどう行動していいか分かりません。日本的情緒というものを知ったのち、外国人に対しては外国人のその行動を是認するという風でなければいけません。住んでいる水がみな違うのですから、どの水の中に住んでいる魚ということをいわずに、いろいろな魚の泳ぎ方を寄せ集めただけではどう行動していいか分かりはしない。だから、道徳教育ということは世界の魚の泳ぎ方を集めた図のようなもので、日本的情緒は、日本人という魚の住む水のことであって、そこが違いますね。これは直観的にわかります。ただ忘れていきますから教育によって思い出させてもらわねばならない。人は日本的情緒の中から生まれて来て、死ぬと日

本的情緒の中へ帰って行くものと私は思っています。だから日本人が昔どこにおったかというようなことが知りたければ、本的情緒が世界のどこにあるかを探すのが一番たしかだと思っています。

日本人が善といっているものと、支那人が善といっているものと、西洋人が善といっているものと必ずしも一致しはしないという事実に注意すべきです。その相違をこえて理論で組み立てる倫理学というのは、これは西洋的情緒なのです。日本人はそんなことを思いはしません。一分違っても、善でないものは善でない、本物とイミテーションは違う、そう思っているのは日本人だけでしよう。倫理学などというものは、そう思っていないからできるので。そういうものが何にもならないとは申しません。日本人の行為だけよく分っても、外国人の行為がよく分らないというのでは困ります。しかし日本人の場合は、それは清流に住む鮎の泳ぎ方だ、それは違うと、こんな風に直観的に分れるのです。それが日本人の善行です。善行を行なおうとしなくていいのです。澄んだ水に住もうとすればいいのです。

### 本的情緒と日本人の使命

(問) 本的情緒を失なえば日本人でなくなるとおっしゃいましたが、その内容について説明して下さい。

(答) 小我を自分だと思ふ。そのために人類が滅びそうになっている。もつとも、そのためだけではなく、科学が破壊力を準備したためですけれども、今更水爆を知らなかった昔に返せといつてもこれはできない。小我は、自分の体、自分の感情、自分の意欲、それが自分だと思ふ。その考えを捨ててもらわなければ必然的に生存競争になる。ところが、それを捨てさせるためには、自分が、小我は本当の自分ではないと思つていなければならぬ。内心本当にそう思つているという民族、たしかにそうであると言へる民族は、日本民族以外にならう。つまり、火が燃えさかっている時、それを消そうとするならば、油を背負つた人やつては意味がない。背負つていけない人に行つてもらわねばならない。日本民族以外にそんな人はあるまい。こう言つていゝのです。もし他にあれば、勿論その人達に行つてもらふ。小我を自分だと思わないといふことは、そう簡単にできることではないのです。ところが、日本人はわけなしにそれをやる。小我を捨てて行爲しなければできない行為を平気でやる。芸術の作品などでも、小我を自分と思つてはとでもできないように作つてある。今度の戦争での死に方で一番よく分りました。他にあれば結構だけれども、ない。みな肉欲、我欲の油を背負つている。そのために火が燃えさかっている。消すどころの騒ぎじゃない。

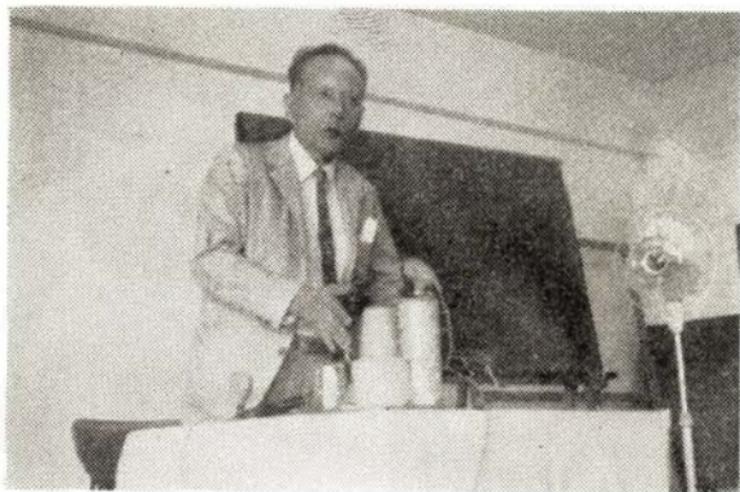
## 講師略歴

京都大学理学部数学科を卒業。以後数学の研究に従事、昭和四年より七年までフランスに留学、専攻の分野における世界的な業績に対して学士院賞、朝日文化賞、さらに昭和三十五年には文化勲章を受く。最近は「春宵十話」発刊以来、教育に関する深い関心を各方面に発表して戦後の日本教育界に重大な問題を提起されている。現在奈良女子大学名誉教授。著書にはほかに「風蘭」「紫の火花」「春風夏雨」などがある。

日本政治の

憂うべき動向

花見達二



一、戦後は終わらない、注目すべき領土問題の未解決

二、世界は安定せず、混乱の中に「核」の哲学を

三、国連は世界の課題に答え得るか

四、着々と進行しつつあるケレンスキ―内閣出現の陰謀

△質問に答えて▽

一、戦後は終らない、注目すべき領土問題の未解決

八月ということになると、何年たっても敗戦の思い出が去らない。二、三日前には総理大臣が沖繩へ行って『沖繩の祖国復帰ができない限り戦後は終っておらぬ』と話したようだが、沖繩ばかりではない。樺太、千島、齒舞、色丹の北方領土についてもこれと同じことを言わなくてはならない。沖繩の方はまだ一つの理屈がある。それと言うのは平和条約の第三条で、沖繩、小笠原その他の諸島の施政権を合衆国に渡すと記し、それを日本は批准している。

アメリカとしては、沖繩は永久に占領したい考え方に立っていたし、今もそうなのだが、大西洋憲章で『領土の割譲は認めない。政体の変更も認めない』と約束しているから、沖繩をアメリカによこせとは言えぬ訳である。大西洋憲章は後日、連合四十七ヶ国の共同宣言にさえなっている。だから日本に領土主権（潜在主権）を認めながら、實際上の宗主権はやはりアメリカが持っている、という変則的なやり方で沖繩を支配しているわけです。

それにアメリカは沖繩を昔から欲しがっていたのである。前ベトナム大使のテーラーは、統合参謀本部議長の時、アリュエーションから沖繩、台湾、フィリッピン、この線をつなぐ極東戦略のラインは、絶対に手離すことはできない、と繰り返し言っている。今もそれは変わって

いない。その辺の事情が総理大臣の訪問にも出ていて、施政権の返還は決して近い将来に保証できない。そこでいろいろな援助を増大して本土並みにしてゆくということをいつてい

る。  
　　こういうわけで沖繩の方はまがりなりにも平和条約第三条で決まっているし、今の憲法でも条約はこれを尊重すると書いてある。氣にくわなくても、これを守るよりほかない。ところが今度、沖繩の基地からB52が発進する。すると施政権を早く帰せという意見がでてくる。そして平和条約はこれを認めないという意見が国会でも出てくる。国会で批准した平和条約を認めないというのは筋が通らない。それにアメリカは平和条約第三条を盾にとって、容易なことでは返すはずはない。

　　しかし沖繩を返させるたった一つの方法がある。たった一つ。それは日本の防衛力が強くなることです。そしてアメリカを納得させることだ。ただ返せ返せ、という外交交渉では返すはずはない。娑婆の風というのはそう甘いものではない。

　　沖繩の方は以上の通りだが、残されたものは北方領土である。こちらの方は平和条約もへちまもない。これは火事場泥棒——いや真昼間の強盜略奪というやつで、ヤルタの秘密協定以外には何にも根拠がない。秘密協定というのは国際的拘束力は持たない。現にアメリカのアイゼンハワーですらも、アメリカが過去に結んだ秘密協定は一切認めないと、就任早々の

一般教書で言明している。この中には当然ヤルタ協定も含まれる。この史上最大の闇取引であるヤルタ協定、これ以外にソ連が樺太、千島、齒舞、色丹などを取る理由がない。しかも二十年過ぎた今日依然としてそうなっている。これでどうして戦争が終ったと言えるでしょうか。

大体私に言わせれば、ソ連は連合国または連合軍ではない。なるほど形の上では連合国になっている。ポツダム宣言にもソ連の対日戦争後に加盟しました。しかし彼は最初はポツダム宣言に調印してはいないので。する資格がなかった訳です。二十年八月八日に一方的な宣戦布告をして、九日に樺太に攻めてきた。その時はじめてポツダム宣言に調印している。これは侵略のためで、じつにきたないやり方だ。日本とソ連とは中立条約こそあったけれど、戦争はしていないのです。一方的に日本を蹂躪しただけだから、日本がソ連を連合国として扱うことがおかしい。

なお言いたいのは、政府自らソ連に対し固有の領土である南千島を返せという。だが南千島だけがなんで固有なのか。樺太、北千島はなんで固有でないのか。

元来北千島は、明治八年に締結された千島樺太交換条約によって日本領となったものです。この時ロシア人は『日本人ほど人のいい者はいない。あの千島樺太交換条約は、日本が日本のものをロシアにやり、日本が日本のものを自分で貰っている。それで交換だという。』

こんな人のいい民族があるか』と言っている。だから南千島だけが固有の領土という観念はまちがっています。更に南樺太は日露戦争の結末、アメリカのセオドア・ルーズベルトが仲にたつて、堂々と日本のものになったのです。それをソ連が南樺太、千島全部を白昼強盗したので。しかもアメリカはサンフランシスコ講和会議の前の年に『この領土問題は米英仏ソ四ヶ国の国際会議で決める』と言ったのです。これは講和七原則の中にあるのです。さらにその四ヶ国会議で決まらなかつた場合『これは国連で決める』となつてゐるのです。

ところがいまだかつて四ヶ国会議を開こうという話もなければ、他の国際会議あるいは国連で解決するという努力を示したという話も聞かない。アメリカも卑怯です。卑怯であるばかりでなく、一方的に略奪した領土を二十年も認めておくというのは、国連憲章の精神にも反する。アメリカはなぜ責任を持たないか。アメリカばかりではない。日本人がなぜこれを黙っているのか。社会党共産党に至つては、ことあればすぐ沖繩沖繩と騒ぐが、北方領土については何も言わない。

社会党の河野密氏は、団長でソ連へ行つて当時首相のフルシチョフに会つた。『領土を返して貰いたい』と言つたら『領土は解決しています。但し将来日米安保体制をやめる時が来たら考慮の余地がある』と言つて、逆におどかさされて帰つてきた。爾来北方領土を返せという声を聞かない。

その点で一番だまされたのは鳩山内閣だったので。私は共同通信の依頼で鳩山さんと対談したことがある。日ソ交渉をおやりになるのなら、侵略戦争の産物である領土問題を第一に解決しなければ何の意味があるか、と言った。すると鳩山さんは、そこにこだわっている。と長くなるから平和宣言だけにしたい、といった。私は宣言する場合には中味がなければならぬ。ただ平和というだけでは意味がない、と重ねて言ったが聞き入れなかった。果せるかな国交回復条約の調印には、鳩山首相、農林大臣河野一郎、元外務次官松本俊一らが全権団として乗り込んだ。行く前に鳩山・ブルガーニン両首相の書簡のやり取りがあつて、その中に鳩山からブル首相に対して『領土問題の審議をして貰いたい。或いは継統審議に移すという確約をして貰いたい。そうでなければ日ソ国交回復の話はできない』と言つたのです。返事は来たが領土の部分についてはノーコメント。そこで松本俊一が当時のグロムイコ第一外務次官（現外務大臣）に対して同じ書簡を出した。その返事には『お説の通りにしよう、それが両国のためだ』と書いてあつた。それでモスクワへ行つてみたら、領土というのは歯舞、色丹のことで、他の領土は全部解決済みだ、と言ふのです。泣き寝入りとはこのことで鳩山内閣の日ソ交渉はダラシのないものだった。ここから鳩山内閣の悲劇が始つてゐる。

鳩山内閣は日ソ共同宣言条約の批准の時に、与党から八二名も反対の欠席者を出した。その代り社会党左右両派は共同して賛成した。野党が賛成して与党が反対する。これは保守政

党の事実上の分裂であったのです、しかも鳩山首班指名のいきさつが珍無類であった。相手に緒方竹虎がおって鳩山、緒方の一騎打ち。ほっておけば緒方が勝つので、社会党兩派こぞって鳩山に投票した。与党の票では足りないから、野党の票を貰って首相に就任した。戦後のあやしいできごとでした。

このようなやり方は社会党としても筋が通らない。社会党は当時鳩山に何と言っていたか。あれこそ永年の東京市会のボス、京都大学の滝川幸辰事件の立役者、治安維持法制定当時の内閣書記官長、保守反動の権化、と罵っていた。その人に、首班指名の投票をするとは一体何事だ。ここが社会党のデタラメな所です。なんで河上丈太郎なり鈴木茂三郎なり片山哲なり、自分の方の統領に入れなかつたか。

とにかくこういうあやしげな状態をはらんだまま領土問題は鳩山内閣の日ソ交渉でウヤムヤとなつて今日にきている。この条約の悪い所は齒舞、色丹だけ規定してあることで、日ソ間に平和条約が結ばれる時には齒舞、色丹は引渡す、と書いてある。これは南樺太、千島の領土問題が解決したという言質をソ連に与えたことになるのです。これというのも河野一郎全権がソ連へ行つて、外交上やってはならないことをやったからだ。つまり秘書も通訳も連れずに一人でクレムリン宮殿の奥に入つて行って、二時間以上も話をした。その時に言質をとつた、とソ連は言っている。私がいりいろ調べようとして外務省へ行つてみたら、日ソ交

渉の大事な資料は一つもない。これでは秘密協定と同じではないか。こんな情ない外交は、まず今までにはなかったらうと思う。こういう状態ではいつまでたっても戦後は終わらないのです。

## 二、世界は安定せず、混迷の中に「核」の哲学を

戦後が終わらないことは、国際問題についても言える。ドイツが真二つ、中国が真二つ、朝鮮真二つ、ベトナムしかり、日本なんか国内に三八度線ができた。世界にあるものは絶え間のない革命流血騒乱です。A・A諸国が独立の形をとり、国連加盟国も百余カ国に増えたが、いずれも独立の資格と条件がない。アメリカから経済援助を受けるかと思えば、ソ連から武器援助を受ける。非同盟主義をとっている国で、安定した国は一つもない。のみならず第二次大戦後満五年もたないうちに朝鮮動乱が起った。この朝鮮動乱は第二次大戦よりも内容は惨烈無比、彼我動員四〇〇万、死傷者も四〇〇万。動員数と死傷被害者ほぼ同数という動乱で、これはひどい戦争であった。その後もアフリカ、中南米、とくにキューバなどいたる所に混乱の禍根が潜んでいる。

更に今の世界にとって二つの恐怖がある。一つは共産主義による世界赤化革命、一つは核戦争です。そこでこの核は人類殲滅の兵器である所から、核戦争はできない、という結論が

出ている。しかし果してその通りかどうか。核戦争を望むのではない。核戦争をなからしめるために抱く疑問なのです。一部軍事研究家の言うように、数字の統計やら兵器の質の解剖だけでは、戦争があるかないか、勝つか負けるか、そんなことは結論できるはずがない。それで答案になるならば、今までに戦争などなかったはずだ。

カイザー・ウィルヘルム二世、この人はずば抜けた頭の持ち主だった。無論一種の専制君主の立場をとって、自ら参謀総長格で陣頭へ出たことがある。彼は第一次大戦でドイツが敗れてオランダへ亡命した。そこで何と言ったか。『ああ恐ろしい悪夢の時代になった。何という恐ろしい時代になったろう。あけてもくれても空から爆撃をくらう。これではいかに勇猛果敢な兵卒ありと雖も、将来に戦争はやれまい。もし起っても二十四時間で勝敗は決まるだろう』といった。これは第一次大戦後の述懐です。

ところがなんとその予言がまったく狂った。一九三九年ヒットラーがポーランドへ電撃進駐をかけてから第二次大戦が始まり、以来なんと六年間戦われた。真珠湾攻撃から勘定しても大東亜戦争四年間。そして最後にはトルーマンの原爆が落下した。

この一例を見ても戦争はやまない。そして核戦争はなお恐ろしい。一発やれば十五分以内に報復を受ける。だが第三次大戦は起こらないと簡単に片づける訳にはいかない。現にアメリカのハーマン・カーンという学者は『核戦争恐るるに足らず』と言う。探知、予報、A・M

・M (アンチ・ミサイル・ミサイル) による迎撃など、これが非常に発達してきた。向こうがやった時には殆んど同時に報復できる。しかも民間防衛があつて、被害を最少限にとどめることができる。もしアメリカがやられた場合、かつては一億の犠牲を覚悟しなければならなかつたが、今は三〇〇万の犠牲で足りる。しかも復興は早い。こういうのです。またソ連の陸軍首脳も、迎撃機 (A・M・M) の恐るべきものができたと言つております。

これらの意見もそのまま受け入れていいかどうかは疑問です。ただ問題となるのは、その核をやめることができるかどうかということなのです。部分的核実験停止協定がモスコで調印されて二年になります。日本も加盟して、これが大変な効果のあるもののように新聞は書きます。しかし中味をあけてみると、これほど人を小馬鹿にしたものはありません。

この条約は大気圏内外と水中の核爆発だけを禁じている。そして戦争の時の爆発は拘束を受けないと、当時のケネディ大統領は即座に宣言しました。しかも地下の実験だけは許されています。ここがみそであります。地下実験は大変お金がかかるけれど小型で爆発威力の凄いのができる。だから地下という一つのおめこぼしがある以上、条約の値打ちはないのであるのみならず、この条約は三ヶ月の猶予をおけば脱退できる。アメリカのハリマン大使は当時の調印に出席した人物だが『脱退条項がなかったら私は調印しなかつたらう』とまで言っている。抜けられる条約だから入る、というのはおかしいことですね。それにアメリカは

『この条約を脱退する国があったら、直ちに太平洋で大がかりな空中実験をする用意がある』と言っています。

こんな条約だから、中共はかえって馬力をかけてやってしまいました。インドネシアは帝國主義に反対するためには、核の威力で対抗する以外にないと『核武装寸前にあり』と言わぬばかりのことを言っている。インドネシアが核の仲間入りをすればインドもやるでしょう。インドは一ヶ月あれば、これをやるだけの準備があると首相が言明している。するとアラブ連合も黙っているはずがない。イスラエルも、そして西ドイツも勿論やるでしょう。

先年日本に來たラップ博士（アメリカ最高の核の権威）が『核実験停止協定には興味はない、それは事実が優先しているからだ』と率直に言っています。博士によると、アメリカは現在ソ連領土を全部灰にするだけの量の二十五倍の核兵器を貯蔵している。これを数字にすると三万メガトン。つまり広島に落したのがTN換算で二万トンだから、その百五十万倍です。だから大気圏内外や水中の核実験を停止したからといって何の痛痒も感じない。ソ連だって感じない。部分的核実験停止協定は、そんなくだらないものなのです。

このほどフランスのガロア將軍が、再々日本について論評して、もしも日本が一等国でありたいのなら核を持って、核を持つことによって独立国の面目が保持できる、核を持たない国家は永久に植民地、或は後進国として釘付けされるだろう、と言って、だいぶ気合いをかけ

た。さらに村松剛氏は、核を持つことは日本の精神的支えになる、世界がこうまで核によって色どられた以上、そこからのがれる道はない。むしろ平和と国民の精神的支えのために核を持つべきだ、という意見を出しています。そういう意見が出るほど核が地上から消える見通しはうすい、それが現状である。

フランスとイギリスはアメリカの二パーセントぐらいしか核兵器を持っていない。中共は先日実験したばかり。それでも事があればやると言わんばかりの態度をとって、一等国みたいな顔をしている。この核の哲学は単なる人道主義、平和主義ではなく、現実に照らして研究する必要がある。日本も核兵器をもつべきものと信じる。

### 三、国連は世界の課題に応え得るか

国際連合がもう少し力があるのなら、核停条約を結ばなくても、そこで解決すべきものなのです。日本政府は二言目には『国連外交』を言うけれど、国連の実態はないよりましという実にあわれな存在である。ドイツの哲学者カール・ヤスパースも『大国が拒否権を発動しない時だけ、なんらか意味のあるあわれな存在が国連だ』と言ったが、けだし名言。アメリカ共和党のゴールド・ウォーターにいたっては『国連はバベルの塔だ』と罵った。まさにその通りです。

コンゴに国連が軍を出した。その分担金はソ連もフランスも払わない。金を払わなければ国連総会の投票資格はなくなる、と規定にあります。だから去年からずっと総会が開けなかった。ところがそれでは困る、というので、今度はアメリカが折れて、金を払わなくても投票権を認めることにした。世界の融和という点からすれば、これは意味があることも知れない。しかしそれよりもっと大きなマイナスがある。いやしくも平和の殿堂と名乗っている国連で、金を払わずにあぐらをかいた方が勝ち、真面目に金を払った方が敗ける、というような組織で、平和維持機構の資格があるか、といたいたいのです。

現にチベットのような、あんな弱い三〇〇万の人口しかない国に、しかも『自治権は尊重する』という中蔵協定があるにも拘らず、十万の軍隊を投入してダライ・ラマを追っ払い、人民公社が進出しました。これは国連の派遣要請があろうがなからうが、国連で解決すべきものです。しかし一片の決議しかなかったのです。

ハンガリーでもそうです。『ハンガリーはせめて中立にしてくれ』と頼んだためナジ首相は首をはねられて死に、戦車を含む二十ヶ師団によって残虐な行為に及んだ。それでも国連はこれを救い得なかった。

第一次大戦後の国際連盟でもそうでした。大したことはなにもやっていない。エチオピアの遠征の時に、なんぼか小言を言った程度です。要するに国連主義外交というのはきれいご

とであり、理想であつて、現実に日本は救えないのです。やはり日本は防備を持ち、精神力を持ち、経済を持ち、就中工業力を充実することが大事なのです。

もし今のまま日本は非武装中立でいくなどと言っていたら、赤子の手をひねるようにたやすく侵略を受けるでしょう。さつき領土の話をしたけれど、終戦当時はスターリンが北海道の半分を寄越せと言つた。留崩と釧路を結ぶ線の北東側を取ろうとした。北海道の半分を奪わないと、ロシア人は日露戦争の復讐をしたとは信じない。このロシア人の国民感情に訴えるために、スターリンは北海道を要求する、といった。だが、これはマッカーサー司令官が反対して失敗した。ただしそのソ連の気持はまだ残っているのだ。

#### 四、着々と進行しつつある日本共産化の陰謀

さて、そういう敵しい国際情勢を背景にして、日本の国内では一つの陰謀が着々と整えられつつあります。それは共産党、社会党、総評によって用意されておるのです。総評の議長、事務局長らは、去年あたりからしきりと社会党を育成すると言ひ始めています。今年に入つてそれは非常に強くなつた。例えば、このあいだ国鉄労組大会が岡山で開かれた。この大会では鈴木委員長が『国鉄労組は総評の中軸、四番バッターとしてその責任を果す。そして一九七〇年の安保闘争には組合の実力を發揮する』と演説して支持された。即ち昭和四十

五年には、国鉄労組が交通麻痺をおこして一大政治ストをやる、と宣言したと見てよろしい。

このような動きを背景にして事務局長は社会党員を二十万人に増やして、四十五年までに社会主義政権を建てるのだ、と言っているのです。東京都議会選挙でも社会主義陣営が勝つた。東京の場合、まず出てくるものは都の公安条例の廃止だろう。現在の政治分野だと廃止されかねない。公安条例、これは一時東京地裁でも違憲判決があったが、最高裁では合憲判決で今日に及んでいる。都条例が廃止されれば、公然と国会周辺で政治デモが行われる。国会はマヒする。次には警視總監や東京都公安委員の人事に圧力をかけてくる。東京都はじつに危くなってきたと思います。

そこで社会党ですが、佐々木委員長になってから急速に容共化しました。なったから容共化したのではない。容共化したからあの人（佐々木）がズーズー弁で委員長になれた。昨年（昭和三十九年）の秋には、佐々木派は反主流で少数派であった。それが昨年（昭和三十九年）十二月の大会でガラッと逆転した。中央執行委員の数が上回ってきた。この委員長が就任早々、社会主義の連合政権をたてると言ったのです。それでここで、彼ら（社会党）という連合政権について説明しておきます。

社会党はタッタ五万二千の党員で、総選挙の総得票数は自民党の半分、議席数も大体自民

党の半分です。これは余程のことがあれば激変しましょうが、まず絶対過半数や比較第一党になれる見込みは今の所ない。せめて比較第一党にでもなれば、憲政の常道として社会党に政権を渡さねばならないが、社会党が第一党になる目算はありません。ないのに政権をとる、とは何を意味するか。何によって政権をとるというのか。これが問題だ。

共産党ではおなじことを『民主連合政権』と言っております。徳田球一、志賀義雄が、昭和二十年に府中刑務所を出て、すぐその足で訪ねたのは社会党本部です。そして革命的連合政権を作ろうと言った。しかしあの数ではそれができない。今度は徳田は保守政をひっくめて連合政権を作ろうと言いだめた。ところが保守側はそれを断ったので駄目になりました。

連合政権によって切り崩してゆく一種のケレンスキー内閣方式は、このように既に二十年前からあるのです。私はその足取りを示そうと思って、自分がまとめた「人民戦線連立工作の裏付け」をここに持っているが、時間がないので略します。

つまり連合政権論は歴史が古いのです。だから佐々木委員長が就任早々連合政権をたてると言ったのは、単なる思いつきではなく、古い背景がある。

昭和三十九年の七月から八月にかけて、佐々木委員長（当時は委員長ではない）、細迫兼光、黒田寿男、それから共産党との共闘を前々から唱えている大柴代議士、こういう人々が

中共へ行きました。『三尺さがって師の影をふまず』と言う言葉があるが、彼らは向こうに行くのと全くその通りにふるまった。その人達が印刷して出している文書がここにある。それをかいつまんで言うと、佐々木氏は中共要人に対して『中共は社会主義革命を達成して堂々とやっておられるから心配ないが、我々はこれからそれを達成しなければならぬ。従って米帝国主義、植民地主義に対して徹底的に闘って安保体制を粉碎しなければならぬ』といった。すると毛沢東は『非常にいい意見だ。その方法でやって貰いたい』続いて細川代議士は『日本の保守政権は必ず打倒してみせます』と。ここで「毛沢東先生」は佐々木先生、細迫先生の決意のほどを多とします、ということになった。これが社会党の半面だ。

それから帰ってきて、社会党のこれらの人を含めた反主流が非常に強くなって、一挙に執行部の人事を占めた。新聞を見ると江田がどうの、和田がどうのと書いてあるが、佐々木委員長出現は、前からの予定のコースだった。ところが現在では中共の手が保守政党の中にまで伸びています。保守の分断政策です。保守から六十人奪ってこちらへ寄せれば、鳩山内閣が政権をとったのとやや似た形でケレンスキー内閣ができる。この際誰が首班になるかはどうにもなる。社会党が指導権を持った政権であればよい。

ここで一つ申しあげておきますが、日米安保条約は発効から十年たった昭和四十五年でも黙っておれば効力が続くから、やかましく言うな、という意見が保守派の幹部からもきかれ

ます。日米安保条約の第十条には『国連が日本の平和と安全に役立つまでこの条約は続ける』と書いてある。けれども昭和四十五年六月以後になると、日米のどちらからでも一方的に廃棄通告することができる、となつています。今までの国際法から言うると、一方的ということはない。必ず合意の上でやめるならやめるといふのが条約の常識なのです。しかしこの安保条約はそうなつていない。そこが特色なのです。もしも容共的ケレンスキの政権ができると、国会なんか問題じゃない。憲法上の内閣外交権をもつて、いきなり日米安保条約廃棄を通告する。基地撤廃、ヤンキー・ゴースホーム。そこでソ連は虎視眈々と北方を狙い、中共は九州を狙う。北鮮も山陰を狙つてじつとしていない。北鮮、ソ連、中共は三国で三角軍事同盟を持つている。その根幹は日本を仮想敵国としていふのです。昭和二十五年の朝鮮戦争でもアワよくば日本上陸を狙つていたのです。

そこで安保条約が廃棄され、日ソ間に平和条約が締結され、北方領土を捨てる。中共とは即時国交を回復、日華平和条約は忘れたようにつぶしてしまふ。そうなると和製ケレンスキ内閣では恐るべき大混乱がくると見なければならぬ。経済にも当然響いてくる。自由陣営諸国との貿易もストップする。経済制裁もある。インフレどころの騒ぎではない。経済は第一次大戦のあとのドイツみたいになるでしょう。そしてアメリカを敵として戦わざるを得ない。ダレスは『同盟国日本をアメリカが失ふことは、三を失うのでなく十を敵に与えるこ

とになる』と言ったが、ダレスの予言がここに見事に実現されることになる。日本の工業力、労働力はフルに共産勢力に利用され、徴兵反対を唱えている学生と青年は、逆に共産国のために徴兵と徴用を強いられる。強制労働にかり出されて、シベリア開発に使われるかも知れない。または中共の農業戦士となるか。つまり奴隷だ。

いまソ連はアメリカに対して、シベリア開発のため百万ドルをよこせ、よこせばホー・チミンに供与したミサイル基地を撤去する、貸さなければもっとミサイルを増やす、と言って脅かしている。これがソ連の外交だ。これから日本が弱いとなったらおしかぶさってくる。脅迫とかけ引きはロシアの伝統だ。

昭和三十五年の安保闘争にはのべ千四百万の署名をとりました。あれまでやるのに実は五年かかっている。それは昭和三十年八月、日米安保について相談する、と言って重光、河野、岸らがアメリカへ出かけて行った。これが海外出兵の話ではないかと言って一騒ぎを起した。その時から安保反対闘争の準備が始まっている。今年（昭和四十年）は昭和四十五年の丁度五年前に当る。社共両党の共闘はまたどうせやるだろう。三十五年の時にも共闘しないと言って、共産党はオブザーバーで入れたのだが。オブザーバーの方がつよい発言権を持った。

三十五年のときは、その七月に社会党も告白しているが、『岸内閣を倒したけれど浅沼政

権はとれなかった。当時景気がいくらかよかったから、保守反動がこれに支えられて池田内閣が成立した』と言っている。しかし今度はそうじゃない。中共から来た中日友好協会の趙安博も『安保体制打破と革命政権の樹立は不離一体であることを知れ』と、日本の革新陣営に『訓示』しています。『訓示』を待つまでもなく、そういう方法で進んでいる。私はここにその詳細な資料をまとめてきたが、時間がありませんのであとは質問の方にゆずります。

△質問に答えて▽

(問) 昭和四十五年に対する革新陣營の闘争態勢はどんなものか。それに対して私達はどのように対決していったらよいか、という点についてお伺いしたいと思います。

(答) 社会主義革命政権を立てるためには、どうしても実力行使の態勢をとらなくてはならない。そのためには何といっても公務員のスト権を奪回しておく必要がある。例えば公務員制度審議会が今度内閣の諮問機関として作られた。これに最大の関心をもっているのは特に総評系統です。公務員のスト権を奪回して、これを政治ストに向けてゆくのが彼らの革命戦術です。つまり実力行使スト態勢を築いて、国会のルールを無視して政権奪取の手段を講じようとする。そのため社会党から保守政党の一部に働きかけ、党内では佐々木委員長の指導権を強める。これが四十五年に対する大きな基本戦術と言えましょう。ケレンスキー政権の日本版です。

ところが共産党はもう少し変わったことを考えている。一説によると、アメリカ大使館や商社に焼打ちなどの危害を加えてゆく考えもあると聞いている。

いずれにしても第一次の昭和三十五年の安保闘争とは比較にならない規模の大きさを考えておく必要がある。あの当時に比べて現在は更に大きな国際的な圧力や誘惑が強くなって

る。つまり国際対立が日本の安保闘争をとらえて、そこにのりかぶさってきている。苛烈な闘争になるのではないかと予想しているわけです。

それに対して我々はどうするか。私はやはり今の憲法が非常なわざわいをなしていると思う。これは一つの悪意、つまり日本庄殺の意図をもってできたものです。高柳憲法調査会会長は、日米合作だからいいじゃないかと言うが、果してそうだろうか。松本烝治氏が書いた所によると、アメリカの原文には、一院制でやってゆくようであった。これに対し松本博士は二院制度にしたらどうか、参議院を作って衆議院をチェック・アンド・バランスしてゆこう。先進国は皆そうだ、と言ったので、原案を作った兵隊さんが、なるほどそうだと言ってそうなった。その辺だけが合作で、ほかは銃剣の押しつけだ。だから日米合作というのはおかしい。あとの根幹は全部アメリカ様がお作りになったものです。

更にこの憲法の一歩いけない所は、自衛権を奪っている所です。第九条を解釈するのに、片山哲さんのように、自衛権は軍備や戦争にあるのではなく、国民の精神にあるのだという解釈をするのならば別問題です。しかしそんなセンチメンタルで通る世の中じゃない。第九条第二項は「陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権はこれを認めない」となっております。ベルサイユ条約だってドイツに十万以上の軍隊を認めたのに、日本は完全武装解除です。更に戦争による国際紛争の解決を認めていない。一体軍備のない所に自衛権

があるでしょうか。そしてはつきりと国の交戦権は認めないと言っているのです。

昭和二十五年一月一日に、マッカーサーが『この憲法は自衛権を決して奪っていない。自衛権は認めている』と声明したが、こういう声明を特別に出さねばならないほど、自衛権は奪われているのです。

その他憲法には矛盾したことが沢山あります。天皇制の問題でも文民規定でもそうです。軍隊のない所にどうして文民規定があるのですか。宗教の条項でも教育基本法と憲法は矛盾していますね。ドイツでは与えられた憲法は占領管理法にして、独立したら廃棄するという考え方で臨んでいます。

憲法問題が第一で、それから国防を大事にしなければなりません。国防力がないと一人前の外交はできません。アメリカに対して主体性を持つてと言った所で、アメリカは日本を助けてやっているのだとアメリカから言われたのでは、頭の上るはずがない。私は日本も核武装をして発言権を持たねば外交も駄目だと思う。日本は力がありますからね。工業力が優秀なことは世界が認めています。そして何より大切なことは精神的伝統―教育ということになってくる。にも拘らず日本はそうでない方へ行きつつある。敗戦二十年にしてだんだん敗戦意識が定着してきている。正が亡びて邪が勝ちつつある。そのことに反省を加え、覚醒を促してゆくことが大切と思います。

（問）社会主義連合政権ができる場合、保守党の左派を抱き込んでゆくと言われました。しかしいざその危険がでてくると、財界も反対するでしょうし、保守党の一部がそんな政権に参加することはないと思えますが……。それから第二に革命が進行する過程において、自衛隊はどういう役割を果すか、以上二点についてお願いします。

（答）財界も混乱を恐れるでしょうし、保守党も本来これに反対する訳です。しかし保守党の内情は中共貿易一つをとってみても、意見がだいぶ違います。中共へ保守党議員が行ったり、中共から向うの首脳が訪ねてくる度に、社会党と同じような考えを持つ人が増えています。例えば保守党の中にアジア、アフリカ研究会というのがある。此のあいだ亡くなった河野一郎氏の仲間が大半を占めているが、これらの人たちの中共に対する意見は社会党と同じです。同じならいつか共闘できる訳です。

更にあげれば国連の中国代表権、これはいま国民政府が持っているし、恒久的に常任理事国になっている。ところがアジア、アフリカ研究会は、国連代表権を台湾から中共に渡せとっています。貿易でも輸出入銀行の保証をしてのべ払いをやつたらいいじゃないかとも言っています。輸出入銀行の金は総裁の自主性にまかせるべきだともいっています。しかし輸出入銀行は全額政府出資で、血税でできている銀行です。だからその用途は政府が責任を持たねばならない。ところがA・A研究会は輸出入銀行の金を使え、と主張している。そうい

う所も社会党と似ているのです。

また昭和三十五年の日米安保条約には、自民党は全員起立賛成するように党議で決つていました。ところが河野一郎、松村謙三、石橋湛山以下十三人は反対のために欠席したのです。そこで党規違反に問われたが、うやむやになつてしまつた。だから中共の周恩来は、これを見て彼らは間接同盟軍だと称している。同盟軍の大きな所は河野一郎、松村謙三、石橋湛山のほか小物中物いっぱいいる。これは社会党と同調します。今は池田、河野氏が死んで派閥再編成を唱えているが、細かい旅団みたいなのに分かれてしまうと、むしろ社会党と意志を通ずる潮時が生まれるのではないかと考える。

次に自衛隊のことですが、一昨年の国会で防衛庁長官が『共産党員が隊内に約三百人ほどいると認められる』と言つた。社会党が社会主義革命憲法の制定を主張したことがあつたが、この中には自衛隊を解散して産業建設隊にするのではなく、自衛隊を赤化することが書いてある。

更に自衛隊は文官優先というたてまえをとつている。統幕議長なんかは軍人でないものになつていた。だから中は複雑で、思想的にも強固であるとはいえない。強固でなければならぬのに、まだ世間一般が日陰者扱いにしている。これは甚だ遺憾なことです。

(問) 総評がなぜ革命結社性格を帯びてくるのかについてお答え下さい。

（答）簡単に言えば社会主義あるいは共産主義が進歩的なものであり、歴史的必然であるという大正デモクラシー以来の病気が治らないということ。そこへ外国が多額の金を注ぎ込んでひっかき廻す。例えばこの前の総評大会で中国総工会の劉寧一が参加して『安保闘争、松川裁判闘争、三井、三池闘争、これらはすべて英雄的行動であるから、我々は資金カンを惜しまなかった。三井、三池と松川両方合わせて千四百万円送った』と数字まであげて述べています。

松川裁判は独立国の司法裁判事件なのです。それを外国人が何のために応援するのか。無罪を要求する運動がどうして英雄的闘争なのか。松川事件は日本の裁判所でさばくべきことなのです。理由もヘチマもない。そういうことを演説させて黙っている総評もおかしい。もう一つ例をあげれば、総評の太田議長がソ連からレーニン平和賞をもらった。他人の領土を中立条約を破って白昼泥棒をやった、その国からもらったなら非平和勲章だ。それをありがたがって胸に飾って総評大会に出てゆく。それでも誰も指摘しない。そして実力行動に訴えても保守政権打倒、安保体制打破とくるのですから、革命的政治結社でないとはどうしても言えない。

（問）お話を聞きながら、しっかりしなければ——という気持は起るのですが、それとは別にまあ心配することもあるまいという気も起こってきます。危機に敏感に反応する感覚が

自分の中に失われているような気がするのですが……。

(答) 危険が目の前に起こらないと、人間は安心するのです。昭和三十五年の安保の時でも、みんなそんな大動員にはならない、と言っていた。しかしハガチー事件があったし、社会党は議員総辞職(国会放棄)の決議もやった。六・一五事件が起り、東大生の樺美智子が死んだ。流血の惨事をまねいてやっと安保条約が成立した。岸内閣は公約を実現したのだからやめなくてもいいのに、社会不安を醸成したという責任をとらされてやめた。あの時中共は革命近しと見て軍艦を出す用意までしていた。それをソ連がとめた。

このような動乱の様相や革命状態が起こりやすいということは、現在の日本が平和でなく、暗雲たれこめた危険な状態であるということです。しかも日本の左翼勢力には国際背景がある。コミンフォルムこそないけれど、日本と中共、ソ連、北鮮との関係が非常に流動化しつつあります。第一次安保闘争より第二次安保闘争の方が、はるかに深刻になることを考えてもらわなければならぬと思います。

（附記） 初め演題に『大正デモクラシーから日本ケレンスキー内閣まで——』というサブ

タイトルがついていました。また私もそれをお話して諸兄弟のご批判をねがいたいと思つたのですが、時間がなくてやめたのです。

そこで一言だけ申しますと、大正デモクラシーというのは、大正の初期に、藩閥、軍閥に対する抗争と、べつの面では世界各国の革命に影響された民権思想、革命思想のふたつで組み立てられております。

たとえば明治末期の中国の辛亥革命<sup>しんがいはい</sup>、大正のロシアのソビエト革命、ドイツの王政転覆などの影響が非常に大きい。

大正デモクラシーの理論的指導者といわれる吉野作造博士は、天皇統治権をみとめ、その基礎の上に立って議會主義、政党主義、選挙主義のデモクラシーを学説としましたが、それではあき足らぬ商売人の社会運動家が現れて、公然と共和制を主張しました。堺利彦などその一人であります。

この奇怪なデモクラシー論が官学、私学の底に勢力を占めまして『社会主義、共産主義は歴史の必然である』というバカな思想となり、これがいまもつづいていのです。従つてそういう思想の政党も存在しているわけです。唯物史観を不変の哲学とするアキめくらです。つまり、日本革命をめざす邪盲がはびこってきます。祖国の伝統も歴史の価値も知らぬ非

学問的思想です。社会科学という言葉はやや新しい言葉ですが、社会科学イコール唯物史観と成ったのが日本の悲劇です。

△この附記は講義要旨の加筆修正をおねがひした時、講師よりお送りいただいたものである▽

#### 講師略歴

読売新聞の政治、文化、企画各部長を歴任、戦後政治新聞を興し主幹となったが言論ページとなり退社、著書に「日本は侵略されないか」「日本政治論」「現代日本の解剖」「現代政党批判」「昭和四十五年の危機（時事新書）」など多数がある。なお東京タイムス紙上政治週報を担当して十五年に及び、現在も継続して掲載されている。

パネル・ディスカッション

木内・岡・花見 三先生を囲んで



一、日本の国語国字問題について

一、教育はどうすればよくなるか

合宿第三日の午後七時から、合宿教室恒例のパネル・ディスカッションが開かれた。今までのパネルは雲仙（「新しい学風を興すために」第二集）桜島（同第三集）共に、木内信胤講師を囲む会であったが、今年は、岡潔・木内信胤・花見達二の三講師を囲み、ほかに上田通夫氏（鹿児島大学教授）高木尚一氏（労働科学研究所理事）夜久正雄氏（亜細亜大学教授）川井修治氏（鹿児島大学助教授）島田好衛氏（共同通信論説委員）長内俊平氏（電源開発本社勤務）小柳陽太郎氏（修猷館高校教諭）らもパネルとして参加した。

定刻七時になると、広い講堂の東側中央に急造された講師席を中心に、二二〇人が車座になってとり囲んだ。本夕の会は期待が大きいのか、開会前から会場は熱気さえはらんでいった。まず司会者の小田村理事長が、第一のテーマ「国語国字問題」について、簡単に輪廓を話した。

「二十年前に戦争に敗れたあと、アメリカから教育使節団が来ました。その使節団は日本の教育を根本的につくり変えようとしたのですが、その一環として、日本政府に対し国語国字問題について勧告をしております。この勧告の背後には、戦前から日本国内にあった国語問題における、ある一派の意見が強く働いておりました。その一派は表音派と言って、日本語をやがてローマ字化しようとする考え方をえている人もおられました。

そこでこの使節団は、日本の文字の複雑さを簡素化せよ、そうしなければ日本の児童生

徒の教育的成長を阻害することになる、と勧告した訳でございます。即ち日本の文字を伝達的手段にだけしてしまふ。一種の便宜主義と申しますか、日本の国語並びに言葉が持っている生命というものには配慮を払わずに、国語国字の問題が扱われた訳でございます。

その結果、この勧告に従って諮問機関として「国語審議会」ができ、小中高校で教えるべき漢字を制限することになったのです。そして日本人が使うべき文字として「当用漢字」を決めました。差し当り使う漢字を一八五〇字に決めた訳でございます。その後仮名使い、送り仮名等についても同じような趣旨のもとに改正が行われ、今日使われているような活字が日常語となりました。そのために、若い人たちは日本の古典が読めなくなり、明治時代のものさえ読むことが困難になるといふ歎かわしい事態に達しております。本日は、三先生に御無理な日程をお願いいたしました、ここにお揃いいただきましたことを厚く感謝申し上げます、まず始めに木内先生にご発言をお願い申し上げます。どうか皆さんが討議でき易い雰囲気をお作り下さいますように。」

木内 一昨年のパネルのときに、国語問題の経過について話しましたが、この問題が国家の干渉下にどんなに進められているかを、先生方さえ余りよく知っておられない。しかもこれは負け戦だという話です。私はびっくりしまして、この会の先生方が負け戦と思つていふようでは全く仕様がなない。そこでこれはこういう問題なのだということを、まず説明し

ました。実は私、この問題に対しては並々ならぬ努力をしている。それを岡先生や花見先生にも今日は少し知って頂きたいし、両先生をこの運動に巻き込みたいのです。(笑)

いま何が行われているかというところ、小学校では漢字を八八一字しか教えない。しかもそれを、なるべく嫌なものだと思わせるように教えている。というのは、漢字が教科書の中にポツリポツリと出てくる。その時、音で出たら音を覚えればよい。訓で出たら訓を覚えればよい。音訓あわせて、使い方とか熟語だとかを同時に教えてはいけない。理科とか地理で覚えた字を、国語の試験に使うと消されてしまう。

その上略字がある。権力の権を権と書く。これは書くにはいいかも知れないが、活字をなぜそうするのか。活字は作ってしまったら何千でも同じ字が刷れるのだから簡略にしないでいいと思うのだが、活字までそうしている。もっと大事なものに音訓表がある。訓を制限してしまった。神という字は、訓が<sup>かみ</sup>、音が<sup>しん</sup>です。これを<sup>神田</sup>の<sup>かん</sup>だとか、<sup>神戸</sup>の<sup>こう</sup>だとかいうのはいけない。これは地名の場合だけは許されるが、ほかの場合はいけないのが、今のやり方です。

だから海<sup>の</sup>苔<sup>と</sup>と書いての<sup>り</sup>と読む、海という字にはの<sup>と</sup>という訓はないというのでこれは仮名で書けとなる。しかしの<sup>り</sup>と書いたのでは海苔のことなのか糊のことなのか区別がつかない。これは漢字の本領を全部殺していることです。ひどいのはきょう、きのうという

時に、今日昨日は、こんにち、さくじつと読むべき字だと決めてしまった。私など原稿に今日と書けば消されてきょうにされてしまう。私という字もどういふ訳かわたくし、我々はわれわれと書くように決められてしまった。

もひとつひどいのは、お父様、お母様。父という字はふが音でちちが訓なのです。とうという読み方はないのだから、お父様はおとうと書かなければいけない。

当時の司令部の簡素化を命じた人達は、字を簡単にすれば、漢字を覚えるための精力をほかの所に発揮できると思っていた。それに便乗した一部の日本人は、簡素化しなければヨーロッパ文明に追いつけない。日本は食えなくなる、という観念にとりつかれていて、そういう気持から司令部の言いなりに動いていた。

私の考では、難かしいことを教えて頭を鍛えれば、頭は無敵によくなると思うのですが、どうですか。漢字が混乱した状態で最も非効率であるにも拘らず、日本は度々お話しして来たように超一流の進歩をしている。非効率な漢字を使いながら、しかも悪い教え方をやりながらここまでできているのです。こういう事実に着目して、彼らの論拠は全然くつがえっているのだ、と言わんとしている団体が「国語問題協議会」です。それをスタートさせたのが小汀さんであり福田恆存さんであり、その他おなじみの方々が沢山おられます。

岡 現在の国語教育は、真の日本人が一人もいなくなるようにする道です。国語と歴史をお

ろそかにしたら、日本人に伝わる何が残るか。日本語のような美しい言葉はほかにありません。私は正しい日本語とフランス語、その二つを知っていればいいと思います。あんなヤンキー語なんか要りやしない。あれは野蛮な国語です。

息をふっと吹き込めば、泥人形もまた人になるのです。ところがその吹き込むべき息をなくなど言う。現代の国語政策はそんなものだと思います。国語と歴史の抹殺です。

木内 国語問題協議会の運動は、始めてから七年たった。昨年の春、ある方が運動の趣旨を書いて国民に対する訴えをしました。ところが賛成の手紙が二五〇〇通ぐらいきた。その中には立派な方が実に沢山おいでになる。私はその名簿を見て、このわれわれの運動は勝つに決まっている、しっかりやれ、と言っているのですが、協議会のメンバーは、いまのところ国文学者とか評論家とかが主体なので、どうも実務的に物を推すことが弱い。

花見 三年前に木内先生は、池田高度成長政策の批判をやられて、今日を言せられた。その非常な功績のある木内先生が、国語問題について、これほど熱心であるとは知らなかった。私もこれからは御指示のように協力します。国語というものは国の伝統なのだから、やたらに制限すべきものではない。漢字がいくら難かしくても、子供の頃から習い覚えて一〇〇〇字や二〇〇〇字分らないような話はない。私の知ってるのに頭は大してよくないが、外国語だけ七ヶ国語マスターしているのがいます。言葉を知ることにはやさしい事なの

です。

フランスのデュアメルという文豪が『国の伝統は食物にある。食物の性格が変わった時、その国は亡びる』とまで言っている。これは全く面白い話です。日本で演説した話です。国語問題とちよつと似ているのですね。言葉というのは精神の食物ですから、これを失うと伝統を失うことになる。アメリカの占領政策は日本の伝統抹殺から始つた。戦争中ルーズベルト大統領はそうすると云つたのですから。

小田村（司会） 三先生はともに国語国字問題には心を勞しておられます。大学で国語表現法を教えておられる夜久先生、どうしたらよいかという問題について……

夜久 さきほど木内先生が先年の会で、国文研の人達は負け戦といったというお話がありました。したが、それは一、二年のうちにとにかくに拘泥していたからでした。それは一般大新聞、ジャーナリズム、教育界に根強く存在している表音派、花見先生の言葉を持ってすれば思想的な日本抹殺派の力が強く、一、二年の間に復原することは無理ではないかと申し上げた訳です。

昨年岡先生のところにお伺いした時、国語問題が出ましたが、私は先生に次のようなことを申し上げました。小学校で旧体の字や仮名遣いは間違いだと教えます。子供は家に帰って母親に文字を聞きます。母親は教えます。すると学校では母親が教えたものは間違ひ

だと言います。これが日本の家庭の親子の信頼関係を切断することになって、親はどんなにそれで苦しんだか分らない。子供はそれによって両親に対する不信を抱くわけです。いわば一種の精神的革命が行なわれたと言えます。

そこでどうしてもこれは元に戻さなければならぬ。ただその時現在直ちに旧体ものに戻してしまうことになる、新漢字新仮名遣いで教育された人たちに対して思いやりの足りないことになりはしないか。私がこう申しましたところ、岡先生は直ちに「間違った事は即刻改めるべきだ」と非常に強いお言葉で言われ、私もまた愕然としてこの問題に対して決意を固めている次第です。

現在の青年は明治のものは勿論、戦前のものが読めないようになってきた。もっとも一応は読めても、字づらだけを追うことになりまますから、言葉そのものにこもっている命を讀みとることができない。それで大学の私の時間では、旧体漢字と歴史的仮名遣いが正しく読めるように、書く方は現代かなづかいと当用漢字とでやっていますが、効果がありません。便宜主義では表現力はつかないのです。この字は当用漢字にないからおぼえなくともいい、昔のものは読めなくてもよい、という考え方を改めるのは、容易なことではありません。

小田村（司会）

講師の先生方から次々と御意見が出され、ここにおられる合宿参加の諸君



たち自身にこの問題が迫ってきました。諸君たちはこれらの考え方に対してどんな意見を持つのか、あとでお聞きしますから発言の用意をしておいて下さい。その間三分間、島田先生に新聞の論説委員としてのご発言を——

島田 新聞の方も表音派が非常に勢力が強い。やはり進歩的文化人であるかの如き顔をしていたいからでしょうか。僕ら永い間かかって勉強してきたものを、まるきり変えてしまうことになる、それを覚えるのに大変な労力がかかる。「記者ハンドブック」というのがあって、それをいちいち見なければ、とても正確になおせない。例えば異なるなどは、今はなを送りますが、昔はなを入れないうで済んだわけです。このような混乱は数えきれないほです。

ここで司会者は、参加者諸君に対して意見を求めた。しかしテーマが充分消化されていないためか、意見よりも木内講師に対する質問が続いた。①国語問題協議会の運営がうまくいっていない原因は何か。②国語審議会のメンバー選出の内幕。③石井勲氏の方式はどんなに評価されているか。

木内 第一点、国語問題協議会は、現状ではまずいから、自分に答を打って推進しようとしているところです。大分よくなりつつありますからご安心願います。

第二点、国語審議会のメンバーですが、文部省は非常に利口で、表音派の委員の数が多くいように選ばれている。公平といいながらそのようにやるのは実に上手です。だからそれを打破するために、委員改選期を狙って、こちらの方を一人でもいいから増やすことを考えています。もしも委員の過半数を得さえすれば、それだけでできてしまうのです。世の中というのは、妙なことで動いているのですからね。

国語使用の制限をやったのは内閣告示です。岡先生が「春宵十話」に「情のこもった漢字」を使わせなくしたので、人の名前がつけられなくなったと書いておられますが、その内閣告示を改めれば……

岡 あれは憲法違反ですね。

木内 そうです。憲法違反です。自由の束縛です。そこで内閣告示を撤回させればいいのだ

が、いきなり撤回でゆくのはまずいから、まず委員の過半数を獲得して、この問題を全部一応白紙に戻してやり直すことにする。その場合、私どもの考えているやり方は、いわゆる歴史的仮名づかいに強いて帰れとまでは言わない。政府の命令でやるのをよして、しばらく自然の状態にほっておく。そうすればめいめいが、それぞれの動機からいい教育方法をだんだん起してくるはずだ。昔のように画一的にこうしろということは言わないつもりです。それが我々の運動方針なのです。

第三点の石井勲さん。この人は高校の先生だったのに、国語教育は小学校からやらねば駄目だと気づいて小学校におりた人です。この人は偉い人で、義務教育六年間の間に八八一字と言うけれど、一年生に三〇〇字教えるのはわけない、ということを実証しておられる。例えば木偏を教えたら杉も松も梅も桜も一緒に教えてしまう。そういう連想は沢山あって、雷は田の上に雨がふる。雷が鳴ってシューッと伸びたのが稲妻で電という字ができる。そういう風に教えると、子供は面白がって簡単に覚えてしまう。それに字のできた由来を少し教えると、漢字というのは無限大に面白い。エティモロジ（語源学）という学問がありますね。その頭を子供の時に教える。そうすると漢字を沢山覚えるばかりか、ほかの学業の成績もいいという実証を出しておられる。これが有名な石井さん。その石井さんのやり方が、どの位世間で受け容れられているかということとはよく知りませんが、テレ

ビにも出られたということは注目すべきではないかと思えます。

岡 ひとこと言いたいのですが。明治の人たちの感慨や心のありさまを手にとるように知るためには、その人の書いたものを読むよりほかない。ところがあなた方は、それが一切できない。ポツンと木の股から生れたようなものです。こんな本をほしいがと言うので、あそれなら寺田先生の「藪柑子」がよいとすすめる。ところがそれは読みにくいと言われたら、ほかにないのです。教わった字で書いてないのですからこんなことになる。本を深く読めば、「ああこの人はこんな人か」とわかる。それなのにあなた方はそれができないようにされてしまっている。だからあなた方は喫茶店に小さな池を切り抜いて、そこに入られた鯉のようなものだ。だから少し骨が折れるが、そこから外に躍り出なければならぬ。そうでなければあなた方の生きる道はないと言うほかはない。だから躍り出ることができるように、国語国字の制限は即刻取り除かねばならない。それが一年遅れれば一年、そういう小さな池の鯉を作るばかり。結局躍り出る努力をその人たちにも強いなければならぬことになる。だからこんなことは即刻改めなければいけない。

司会者はここで「いまの若い人々が日本民族が長い間積み重ねてきた文化遺産を読めないということは、なんと悲しいことか。国語国字問題がこのように便宜主義・合理主義で

簡単に扱われては大変だ、というご意見が講師の先生方からの御発言になってこれだけ続いています。それに対して、皆さんはどう思われるか」という意見発表を求めた。それに対して聴講者たちからは、「合宿に来て先人の言葉に触れるようになって、松陰先生や西郷隆盛の遺訓などが読めず非常に骨が折れる」とか、「小学校教員としては学習指導要領で決められた八八一字の線を超えることは難かしい」とかの意見が散発して、司会者の求めている自分自身の決意ある言葉はなかなか出なかった。司会者は更に声を励まして「現在の国語国字制限を変えようとすれば混乱も苦痛も起るのは当然だが、日本の運命を考えた場合皆さん方はいかに考えるか」と強く訴えた。すると漸く司会者の意図に触れることができたのか「混乱や苦痛が起るのはしばらくのあいだのことだから大いにやって貰いたい」「三省堂から出されている金田一京助先生の辞書は極端に表音化されており、あれで教育界は大分毒されている。あれは絶版にすべきだ」「私は維新史に興味を持っているが、好きな高杉晋作の文章一つ読むことができない。これから一生懸命とり組んで正しい維新の精神を掴んでゆきたい」「僕もこの趣旨には大賛成。この際この会の名で文部省に決議文を送ったかどうか」等の意見が続いて出て、昂揚した雰囲気を作り出した。司会者はその雰囲気をとらえて次のように結んだ。

小田村(司会)

文部省に決議文を書くのは五分か一〇分ですが、大切なこと

は我々がこの問題と取り組んで、この念願を達成するためにいかに努力するかの決意にかかっていると思います。三先生に対して、どうかよろしくお願いしますと言われた方もありますし、我々としても同じ気持ですが、ここで大切なことは、我々自身もその問題を考えていこう、決議とか決議文の上程などという流行よりも、我々自身がひとりひとりでこの問題に対処していこうという決意の方が一層大切ではないかと思えます。

国語問題に話が集中して、予定の時間はあと十五分しかなくなりました。「教育はいかにすればよくなるか」のテーマをめぐって、司会者はまず木内講師に発言をお願いした。木内 去年の合宿教室で私は日本の教育を建て直すには、東洋思想を復原しろという言葉を使ったのですが、徒らに西洋思想に負けているからいけない。本当に負けたのは戦争であって、思想が負けたのではない。そこをしっかりと掴まえること。もう一つは哲学を教えること。科学技術を覚えてものを安く作ることよりも、ものをしっかりと考える頭を作る。それには哲学と人間の思想の歴史を上手に教えること、歴史をやることだと思います。国語問題は、それをやるきっかけです。国語が復活しないようでは、自分の国の歴史も思想も到底分らないですからね。そこでそのような頭の切り替えには前提がある。日本をいま風靡している思想ですが、急いでヨーロッパに追いつかなければ日本は生きてゆけないと考

えることは全然いらぬことなのです。急ぐのもいけないのです。追いつく必要というのは別なことです。要するに食っていければいいのでしよう。そう気がついたら、自分の精神が本当に満足するように食って行けばいいのです。そういう心境になったら、恐らく物質の面ももっと伸びると思います。要するに早く追いつかないと大変だという、あの妙なあたりをかけているいまの教育をおやめになって、本当の己おのれに帰ることです。人間はものの本体が判らない時、つい末節を論ずるものですが、それをやめて、本体が判るまで、本体にステイックすること。そういう態度に帰ることが教育のあるべき姿だと思います。

岡 教育の現状は中学生の三割を非行少年にしてしまっている。そして生まれてくる子の四割が問題児ということになっている。ほかの国では一パーセント前後、日本だけ四〇パーセント。こんな状態では将来六人働いて一〇人養うことにしなければならぬ日がやってくるに決まっています。法務省の発表も厚生省の発表も、このとんでもない実態を示しています。ところがこの心配な状態を私が話しても、みんな国全体のこととなると対岸の火災のようにしか聞いてくれない。今の日本人はもはや心配する能力さえ失っている。私は日本の教育をどうすればいいかということとはわからない。ただせめて心配なことを心配することができるよう麻痺を解いて貰わなければならない。それからはじめないと実現の

可能性なんかありません。今後の教育のあり方については文部事務次官がそうして欲しいと言うから、親展書で意見を簡単に箇条書きにして送っておきました。それを繰り返しますと、第一は人の中心は情である。人間で一番大切なことは人の悲しみが判ることである。

第二は、人間は自律自戒の教育をしなかつたら、他の動物よりもはるかに悪いものになってしまう。これは前世紀以来の医学の定説。戦後教育はこれを全く怠った。そこを直して貰いたい。第三は創造性の教育、大脳前頭葉の発育を目標とする教育をしなければならぬ。それを全くやらずにおきますと、自由経済—開放経済のもとで食べてゆけるかどうか疑わしい。そのためには創造、クリエイションということが必要である。ここで自律自戒というのも、やはり大脳前頭葉の働きなんです。自分で働かすことによって強くなる。これがブレーキです。今の青年にはこのブレーキが働かなくなっている。これを働かして強くする教育をしなから非行少年が出るのは当然ですね。大体その三つを要求しておいたのです。教育審議会にかけてくれてあるはず。その後のことは知りません。

(編者註 大脳前頭葉Ⅱ大脳の側頭葉が記憶、判断の、こうな受動的な働きをするのに対して、前頭葉は感情、意欲、創造等主動的な働きをする部分。)

花見 いまさら日教組の批判ではないが、日教組は勢力的には優越感を持っているのですが、日本という点から言うところの恐るべき劣等意識を持っていると思うのです。それは日教組

ばかりではない。行政、立法、政党皆そうです。何ともいえない劣等感がはびこっている。一例をあげれば文部大臣なんているのは伴食扱いなのです。この人が筋金入りの文教政策の権威者であるかどうかは問題にしないで、およそ縁のない勉強の熱意もないような伴食の人を持ってくるという傾向。それからさつき木内先生が言われた国語審議会、これがうまくゆくことを祈るわけですが、ああいう多くの審議会や諮問機関を作る場合には、政府は必ず徹底的なバランスを考えて人選する。憲法調査会、中央教育審議会その他全部ご覧の通りです。あんな所で碌な結論が出るわけではないのです。しかもこの傾向がだんだん濃くなってきている。それは政府が責任逃れになるからそうやるのです。いい結論がでて、外部の抵抗があつてやりにくい場合には、責任を転嫁してしまふ。総体的に言うと、全部にはびこつた劣等意識から直してゆかないと、教育は立ち直るまい。しかしこれには相応な時間がかかる。私の方は大分悲観論です。私は字を書いて暮そうとしているので国語が女房だ。文句はキリなくある。

小田村（司会）　上田先生ひとことを。

上田　いま岡先生が、現代の社会ないし教育は憂うべきことを知らなくなつたと言われまして、全く同感なのです。憂うべきことに気がつけば、あとは直すよりしようがない。手段などは自ずと出てくる道理なのです。どうして憂うべきことを憂うというきわめて当

り前のことに、気がつかないのか。私の考えでは人がやわらかい、やさしい心を失ってしまった。現在のよ様な教育のやり方は、そのやわらかい心をなくしてしまうようにできている。やさしいというのは本当の意味でやさしいので、そこら辺の女の子にやさしいのと違います。昔から日本の男子の代表的な人を実際に調べてごらん下さい。全部やさしい。やさしい心を持ち得ないような人間が本当に強くなる訳はない。とにかく柔軟な心を持たせるような教育にしなければならぬ訳です。時間が無いから具体的なことは申しあげかねますけれども……

小田村（司会） 高木先生にもひとことを。

高木 木内先生の直観、岡先生の日本の情緒、上田先生のやわらかい心、これらを全て養い伸ばすために、最も端的な方法は和歌の創作ということ。これは三千年来、日本の皇室と国民が一つになって伝えてきた「しきしまのみち」の伝統です。これが教育の基になるというふうに確信して、苦しくても和歌の道にいそしみたいと思います。そればかりではございませぬけれども、そこに心を陶冶する一番端的な道があるのではないかというふうに思います。

小田村（司会） 小柳先生もどうぞ。

小柳 さきほどの国語問題のとき、先生方の言われることはよく分った、ひとつ大いにご努

力を頂きたいと言う聴講者からの言葉がありました。先生方のいまいわれたことがほんとうに分るためには、やはり皆さんは、むずかしい古典に直接ぶつかる努力をされ、それを持続してゆかなければ、「分る」ことにならないでしょう。そのぶつかっていく迫力が勉強の底力となって出てこなければ本物ではない。強い痛感を持って古典と取り組み、幾多の障害を乗り越える意志を、諸君の魂の中に奮い立たして貰いたいと思います。

小田村（司会） 教育をどうすればよくなるかという問題くらい難しい問題はございません。

ん。政府並びにその筋の機関による委員会では、おそらく概括的な意見しか出ない。そういう時点の中で、きょうご発表頂いた内容はまことに具体的なご指摘だったと思います。これからは、そのひとつひとつを實行しようとする意志のある人を、一人でも二人でもふやしていかなければいけない。そのことを除いて、日本の教育を改革することはできません。時を得るならば、制度や政策の上にもその具現をはかって頂きたいのですが、仮に制度政策を変えてみた所で、その運営に当る人たちが、木内先生ほかの諸先生の言われたことの内容が理解できる教師でなければ、その効果を期待することはできません。かかる意味に於て、きょうお話し頂きました問題は、本日直ちに我々の手によって、我々の心の中に於て、更に日常生活の中において、これを実行に移すように心がけてゆきたいと思

ます。

■ 古 典 入 門



吉田松陰  
「士規七則」

玖  
村  
敏  
雄





士規七則 毅甫の加冠に贈る

冊子を披繙せば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人読まず。即し読むとも行はず、苟まことに讀みて之を行はば、則ち千萬世と雖も得て尽すべからず。噫あ、復た何をか言はん。然りと雖も知る所ありて、言はざるに能はざるは、人の至情なり。古人これを古に言ひ、今我れこれを今に言ふ、亦何ぞ傷まん。士規七則を作る。

一、凡そ生れて人ならば宜しく人の禽獸に異る所以を知るべし。蓋し人けだには五倫あり、而して君臣父子を最も大なりと為す。故に人の人たる所以は忠孝を本と為す。

一、凡そ皇国に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬葉一統にして、邦国の士夫世々禄位を襲つぐ。人君民を養ひて、以て祖業を続きたまひ、臣民君に忠して、以て父志を継ぐ。君臣一體、忠孝一致、唯だ吾が国を然りと為す。

一、士の道は義より大なるはなし。義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長ず。

一、士の行は質実、欺かざるを以て要と為し、巧詐あやまち過かざを文かざるを以て恥と為す。光明正大、皆是れより出づ。

一、人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ。讀書尚友は君子の事なり。

一、徳を成し材を達するには、師恩友益多きに居り。故に君子は交游を慎む。

一、死して後已むの四字は言簡にして義広し。堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是れを

お  
舎きて術なきなり。

右士規七則、約して三端と為す。曰く、「志を立てて以て萬事の源と為す。交を扱びて以て仁義の行を輔く。書を読み以て聖賢の訓を稽ふ」と。士苟かんがにここに得ることあらば、亦以て成人と為すべし。

「士規七則」というのは、武士の守るべき道七ヶ条という意味で、もともと吉田松陰先生がその従弟、玉木彦介（毅甫）元服の時に作って贈られたものです。彦介の父玉木文之進は松陰先生の父杉百合之助の末弟、先生の恩師にもあたるわけです。その長男彦介が十五才になって元服する。これからはいつまでも子供ではあるまい。一箇の青年として世に立つのであるから、どのような心構えがなければならぬか、その心得をここに示されたのです。時に安政二年正月松陰先生二十五才の時のことでした。

安政二年といえは明治維新前十四、五年、当時先生は前年三月伊豆の下田から海外に出ようとして失敗、自首して縛につき、江戸に送られて獄につながれ、同年十月、郷里の萩に護送されて、野山の獄に入れられていたのです。その当時のことを詳しくお話する時間がないので省きますが、先生が江戸に護送される途中、芝高輪の泉岳寺、そこには赤穂義士の墓が

あるのですが、その門前で次のようなうたを詠まれたのです。

かくすればかくなるもの  
と知りながらやむにやまれぬ大和魂

これは赤穂義士のことをよまれたのです。しかしそれは同時に松陰先生自身の心境をよまれたものだと思います。「やむにやまれぬ」そこに先生の当時の感慨のすべてがこもっていると思われます。

さて本文にはいりますが、こういう文章というものは、声を立てて、朗々と自分の魂のリズムに合わせて読まなくてはいけない。ただ今日は諸君と一緒に読んでいく時間がありますので、やむを得ず、私が自分のリズムにあわせて読んでいきます。

『冊子を披ま繙せば、嘉言林のごとく、躍々として人に迫る。顧ふに人読まず、もし読むとも行はず、苟まことに読みてこれを行はば、則ち千万世といへども得て尽すべからず。ああ、また何をか言はん。然りといへども、知るところありて、言はざること能はざるは、人の至情なり。古人これを古に言ひ、今我れこれを今に言ふ、また何ぞ傷まん。士規七則を作る。』

書物をひもといて見れば、すぐれた古人の言葉は林のごとく数多く、躍るがごとく人の胸に迫る。ところが人はそれを読もうとはしない。もし読んだとしても行おうとはしない。だ

がもしも真心こめて古人の言を読み、それを実行して行けば、どれほどの時をかけても、つくることが出来ないはずだ。ただ黙々として実行する以外にはないではないか。ところが自分で知るところがあれば言いたくなるのは人の情である。古人もそれを言い、自分も今、感ずるところをこの「士規七則」で言いたいと思う。それは別に古人を傷つけることにはなるまい。——以上が前文です。

そこで本文に入って第一則に

『一、凡そ生れて人たらば、よろしく人の禽獸に異る所以を知るべし。けだし人には五倫あり、而して君臣父子を最も大なりと為す。故に人の人たる所以は忠孝を本とす。』

人と鳥獸とはどこが違うか、諸君は「人間は火を使う、道具を使う、そして知識とか理性とかいうものによつて文化をつくる——人間と他の動物との違いはこの文化の有無にある——」このようにお聞きになったらどう思う。それはそれでいい。だが文化は何のためにあるか、ただ単に欲望の満足のために存在するのか、たしかに人間の生活は動物に比して複雑です。谷川を清く流れる清水を飲んで喉の渴きを癒す鳥や獸とは違って、人間は冷蔵庫で冷やされたコーラを飲む、だがその両者は単純と複雑という点では違うけれども、喉を潤おすという目的を果す点においては何ら本質的な違いはない。

そう考えて問題を煎じつめていけば文化の中で特に尊い文化とは何かということはどうし

でも考えざるを得ないので。動物が簡単にやるのを人間は複雑にやる。それは何も尊いことではないはずだ。そうではなく、次元の高い尊さとは一体何か、それが問題です。

昔アリストテレスは、人間は、動物や植物と共有する精神をもっている。しかし人間はそれ以外に「理性的精神」というものをもつことによって人間独自のものを生み出すと言った。松陰先生も同じ問題をなげかけられたのです。諸君の人生の目的は何か、まさかただ「食うため」ではあるまい。食うだけなら犬でも猫でも食っている。人生の目的、意義というものはそんなところにはないはずだ。

人生を本当の意味で具体的に統一するもの、それは道徳です。人から信頼され、尊敬される生き方、人間のあたたかみと、誠実さ、そこに最高の人生の統一原理がある。「凡そ生れて人たらば、よろしく人の禽獸に異る所以を知るべし。けだし人には五倫あり」という先生の言葉はその端的な表現です。結論は五倫です。五倫とは五つの糸、五つの人間関係の糸、筋道ということです。五つとは君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五つです。その五つの人間関係の中で君臣の義と父子の親、その二つを最も大事だと、松陰先生は言われるのです。その場合、私たちは君ではなく臣ですし、さらに父としてではなく、子としての立場に立てば、君には忠、親には孝ということが私たちの心構えの基礎になる。「人の人たる所以は、忠孝を本となす」ということになるのです。

## 次に第二則は

『一、凡そ皇国に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。けだし、皇朝は万葉一統にして、邦国の士夫世々禄位を襲ぐ。人君民を養ひて、以て祖業を続ぎたまひ、臣民君に忠して、以て父志を継ぐ。君臣一体、忠孝一致、唯だ吾が国を然りとせず。』

皇国というのは天皇のお治め下さる国という意味ですが、松陰先生の頃は日本を皇国として擲む、そのような擲み方をした人はきわめて少なかったことに心をとめていただきたい。次に「宇内に尊き所以を知るべし」とありますが、先生が日本の国を「勝れたる」と言わないうで、「尊い」と言っておられることに注意して下さい。では何故尊いか。それは「皇朝」——天皇のお血筋は、「万葉一統」——万世にわたって一筋であつて、「邦国の士大夫」——京都の公卿たちも幕府の役人も、あるいは各藩の大名や武士たちも代々世襲の禄を貰っている、かくて「人君」、それは天皇だけではなく、各藩の藩主もはいるのですが、その人君は民を養い、臣民は君に忠をつくす。その君のご先祖には、自分の父祖が代々忠をつくしてきた。だから忠をつくすことは、先祖の願いをつぐことになる。こうして「忠孝一致」——日本だけがこういう独特の国体をもっている。すなわちこの章では、第一章の「人間の自覚」をうけて、日本人であることを自覚せよと言っておられるわけです。「唯だ吾が国を然りとせず」ただ日本だけのもの、日本独自のもの、それを強調されるのです。それは他を真似しようと

しても出来ない、いわば日本の個性なのです。だからそれは比較をこえたものです。先に一寸注意しておきましたが、先生が「勝る」と言わないで「尊い」と言われたのはこういうことだろうと思います。比較の中からは自信は生れない。国民所得が世界の列強に比較してどうだとか、工業生産物がいくらだとか、今の日本人はそんな比較ばかりやって一喜一憂している。そうではなく、ここに我れ立てり、日本はここに日本のあるべき姿を維持しているのだという、そういう自尊心、自分で自分自身を拝みたいような、他との比較を許さない、尊厳なものへの自覚というようなのが本当に大切だと思います。

玉木彦介よ、まず人であれ、しかし人であるということは具体的に言えば日本人であれということだ、さらに日本人ということをもっと具体的にすれば、お前は武士の子だから立派な武士の子になれ、そういうわけで第三則は、「士の道は」という書き出しになるのです。

『一、士の道は義より大なるはなし、義は勇によりて行はれ、勇は義によりて長ず。』

「義」という字の「羊」は羊を意味します。羊という動物はいくら沢山集まっても喧嘩をしない。しかも沢山集まれば、お互に譲り合い、お互のきまりを守って筋道を立てる。そういう平和な動物なので、支那ではこれを善なるものと考えたのです。そういう「善美なるもの」と「我」、それが一つになったのが「義」なのです。「我」をそっちのけにして平和を説き、正義を説いてもだめだ。そういうことをこの「義」という字の成り立ちは教えてくれます。

すなわち士たる道は、正しいと思うことを身につけて、それをふみ行うことだということだす。

ところがその義というものは「勇によって行はれ」るのです。これが正しいとわかっていても、多くの反対をおし切って一人でそれを主張するのは難しい。「ああ、あのときなぜおれは言わなかったか」と勇気の欠乏をなげくことが実に多い。戦後、占領軍が日本の教育政策に干渉したとき、私もその衝にあたってそのようななげきをくりかえしたことでした。「義は勇によりて行はれ」という言葉のもつ意味は重大です。「勇」というのは武力が体のうちに満ち溢れている状態、中からグツと盛り上り、湧き上ってくる状態をいいます。「勇」は「湧」に通じます。

しかし「勇」はほっておくと妙なところに行く。だから「勇」は「義」によって長ず、正しい方向に成長していくのです。

#### 第四則

『一、士の行は質実、欺かざるを以て要となし、巧詐過こうさあやまちを文るを以て恥となす。光明正大、皆是より出づ。』

「質実」の「質」とは生地のまま、飾り気のない意味、「実」とは中味が一ぱいつまっていること、人間の心が満ちわたっている状態、誠といってもいい、それが「実」です。そし

て欺かないこと、うそをいわないことを最も大切なことと考えなければいけない。さらに「巧詐過を文るを以て恥となす」——「巧」はもののとまりまわしの巧みなこと、「詐」は人を欺くこと、すなわち利巧に立ちまわって人を欺き、自分の誤ちをごまかしてしまふ。それは君子のもっとも恥じるところだ。

「光明正大、皆これより出づ」

「光」は「公」という字を使ってもいい、裏も表もない、そして正々堂々として大きく前進出来るような、心の晴れ／＼とした爽やかさ、それはみなここから出てくるというのです。では今度は、士はどのように生きていくべきか。

#### 第五則

『一、人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ。読書尚友は君子の事なり。』  
人たるものは昔や今のことに通ぜず、すぐれた聖人、賢人を師として仰ぐことがなければ、実に品格の低い人間なのだ。だから「読書尚友」、書をよみ、歴史上立派な人物を友として大切にする、それが君子のなすべきことだといわれるのです。

孟子に次のような言葉がある。「一郷の善士は則ち一郷の善士を友とし」——一つの村ですぐれている人は、同じくその村ですぐれている人を友として交わり、「一国の善士は則ち一国の善士を友とし」——これも同じです。国の場合でも同じことが言える。さらに「天下の善士

は則ち天下の善士を友とす——諸君はまさしく天下の善士を友としてここにお集りになつた。だが孟子はさらにつづけて言う。「天下の善士を友とするをもって未だ足れりとせず、又古の人を尚論す。」天下の善士といわれる人を友としてもまだそれに満足せず、更に進んで古の人の行跡について論ずるのです。さらに「其の詩を頌し、其の書を読み、その人を知らずして可ならんや」——皆さんも天下のよき青年とここに交わっている。だがそれをもってなお足れりとせず、聖徳太子にも山鹿素行先生にも松陰先生にもここに来ていただいた。そしてそれらの古人の文章をよむ、詩を吟ずる。行跡をしらべる。そうしてその時代を論じる。このように古人に対するのが尚友であります。「読書尚友は君子の事なり」というのはこういうことなのです。

#### 第六則

『一、徳を成し材を達するには、師恩友益多きに居り。故に君子は交游を慎む。』

「徳」は道徳の徳です。「材」は木偏のない「才」と同じ。徳を成し、才能を發揮するには「師恩友益」——先生方のご恩と、友だちの与えてくれる益によってはじめて可能です。故に道に志す者は、どういう人を先生にし、友に選ぶかということを慎重に考えなければいけない。

#### 第七則

『一、死して後已むの四字は言簡にして義広し。堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是れを舎おきて術なきなり。』

「死して後已む」というのは、漢文で書けば「死而後已」で四字、この四字は言葉は簡単だが、その意味は非常に広い。「堅忍果決」——「堅忍」とは辛棒強く頑張ること、「果決」とはぐずぐずしないで、はっきりと決めるべきときには断を下すこと、そして「確乎」として抜くべからざるものは——一度決心したことは人が何と言っても、どうにも動かすことが出来ないという強さを身につけるのは、「是れをおきて術なきなり」——死して後已むという決心、そういう心の姿勢、それがなければ出来ないということです。

『右士規七則、約して三端と為す。曰く「志を立てて以て万事の源と為す。交を択びて以て仁義の行を輔く。書を読み以て聖賢の訓を稽かんがふ」と。士苟まことにここに得ることあらば亦以て成人と為すべし。』

「約す」というのは集約すること、まとめることです。まとめて見れば三つの端——糸口がある。その第一、それは「立志」、これが万事の源である。諸君も何か志を立てておられると思う。その志が、人となる道にそむいてはいないか、日本人としての道にそむいてはいないか、もし学をなすのはじめに、その志が間違っていればどうにもならない。志が万事の

源なのです。第二には友を扱ふことです。「交を扱びてもって仁義の行を輔く」——これは論語の中に「以レ文会レ友、以レ友輔レ仁」という言葉があるのです。学問をもつて友を集め、さらに友をもつて自分の心の「仁」——すなわち徳を修める助けを得るといふことです。そして最後に読書。「書を読み以て聖賢の訓を稽ふ」——稽ふとは比べるとか考察するとかいう意味です。以上三つ、立志、扱交、読書、それが人間修養のポイントだといわれるのです。

「士苟にここに得ることあらば亦以て成人となすべし」——その三つを身につけることが出来れば立派な人物といふべきである。以上が「士規七則」の全文です。

この「士規七則」は松下村塾の門下生を動かしただけではない。明治以後の教育にも大きくとりあげられ、明治時代にふさわしい新しい解釈を加えられながら、沢山の人がこれをくまび、これによって導かれたのです。

ここで明治の教育について一寸ふれておきたいと思いますが、明治の教育の著しい特色は、その理想が高かったといふことです。明治になって士農工商という階級制は崩れた、その結果どうなったかと言えば四民すべてが農工商の人達もその心意気、気位の上では士になることを目指した。国の平和と発展について自分の責任を感じ、みずから正義を持して生きるという武士の精神、それを身につけた実業家、芸術家、教育家があらわれる。これが明治

の教育の大きな特色です。それは現代の、自分一人の幸福しか考えない、人のことや国家の前途はどうでもいいというような風格の低い教育とは違っていたのです。

最後に松陰先生の教育について少し補足しておきたいと思います。

松下村塾の教育というのは実に不思議な教育です。あの二年半ばかりの短い期間、一人一人についていえば一年か或は半年、伊藤博文など一ヶ月位、一番長い人でも二年足らずの期間の教育でどうしてあれだけの効果が上ったか、これは世界の驚きです。そんなことを考えてみますと、教育者として最も重要な仕事は、一人一人の魂の奥底へ呼びかける、或は火をつける作業だということです。もっとも火がつくには学ぶ方にもそれだけの用意がなければいけない。中江藤樹先生も「火がつかないといって先生が悪いように言うな、それは木材がまだなまなましくて、乾いていないからだ」というようなことを言っておられます。ですから学ぶ者のほげしく求める心と、先生の与えずにはおかないという心が一つになったときには必ず火がつく。その火さえつけばあとは自分の心の中を自分でよく照らすのだから、自分のことは自分で一番よくわかる。わかったように自分を生かしてゆく。その最初の火をつけてくれた先生、それが恩師なのです。「出会い」というのですね。本居宣長は、賀茂真淵という先生に、伊勢の松阪で一晩お目にかかっただけで自分の学問の方向を決定したのです。

松陰先生は自分で一所懸命に学び、身を挺して何かをやるうとした人です。そして監獄に入れられ、後に自宅に帰っても謹慎を命ぜられて外には出られない。そんな境遇の中で青年の教育を始められた。この青少年たちをほかにして次の世界を拓く望みはない。先生にはなにかさし迫った胸の想いがあつたのです。そのおもいが、そのまごころが若い者の胸を打って火をつけたのです。萩の松本というのは実に狭い地域です。そういう狭いところから幕末、明治維新の頃に活躍した人が沢山出ている。神様が日本全国に人物を配置するとき、松本村にだけ特別の多くの人物になりそうな者を配置されたわけではない。問題は誰が火をつけるかということです。火をつける人がいたから火がついたのです。

先生は安政六年十月、数え年三十才で幕府のために殺されます。その前の五月に萩を出発して江戸にむかうとき松下村塾の教え子たちに残した言葉がある。それは「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり。」これは孟子の言葉です。「吾、学問すること二十年、齢亦而立なり。」而立は三十才をいう。「しかれども未だこの一語を解すること能はず。」がこの至誠があれば人間が必ず動くということがわからない。「今年関左の行」今私は関東すなわち江戸に行く「願はくは身を以て之を験さん」——自分の体を打ちつけて、「之」すなわち真心があれば人が必ず動くという、これを験（ため）してみよう。「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり——吾学問すること二十年、齢亦而立なり。しかれども未だ

この一語を解すること能はず。今年関左の行、願はくは身を以つてこれを驗さん」という言葉が残っているのです。先生は幕府の役人に自分の至誠を尽して幕府の政策の誤りを説き、必ずこれを動かしてみせるという、実に満々たる自信をもって江戸に向つて出発されたのです。

その時先生はこの書き物を渡した小田村伊之助——先生の妹寿子の夫——に、もしこの語が他日になって確かに自分が信じていたような実効があつたなら、どうぞ長くこれを保存してくれ、しかしもしも効果がなかつたら、これを焼いて、みっともない姿を後世に残さないでほしいとおっしゃつた。ところでその筆蹟はいまも松下村塾に残っている。残っているということは先生の真心が通じたということです。勿論幕府では先生の真心を聞き入れたわけではありません。先生は死刑の七日前、安政六年十月二十日お父さんや叔父さんたちに残した、有名な『永訣の書』という文をしたためておられます。その一番はじめに

親思ふころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん

という歌があつて、そのあとに「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格する事出来申さず、非常の変に立ち到り申し候」と書いておられます。すなわち私の真心で天地を感じさせ、動かすことが出来なかつた。先生はそういう遺言を残されたのです。しかしそれを見た弟子たちは、先生の生涯で出来なかつたことは自分たちがやらねばならぬと決心する。高杉晋作な

どは「我が師松陰の首、幕府に渡し候事、亦何にも無念にて、他日仇を討たでは相済み申さず候」と書いています。これがやがて討幕論として展開する。先生の魂は、いわば弟子たちにより移って、明治維新を作る一翼の力になったと言ってもいいかと思えます。先生の真心は通じた、そのように断言出来るのです。

私どもの人生においては、真心をもって何か事を行っても、その実際的な効果がすぐに現われていくほど、結構な、単純な世の中ではない。これも松陰先生が弟子の入江杉蔵に与えた手紙の中の一節ですが、次のような有名な文章がある。

「今日のこと誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かすところにあらず。」こんにちは日本の危機である。しかしながら日本の国は大きい。ちよつと憤激して何かをすれば、すぐ天下の人が動くようなものではない。「それただ積誠もてこれを動かし、しかる後動くあるのみ」——ただ真心を積み重ねて天下を動かそうとしてこそ、はじめて動くのだといわれております。積誠ということばの意味するところ、よくよく考えていただきたいと思えます。

## 講師略歴

広島高師徳育専攻科卒業。広島高師教授を経て文部省視学官。戦後文部省教職員育成課長、山口大学教育学部部長等を歴任。現在福岡学芸大学学長。著書に「ペスタロッチの生涯」「吉田松陰」「吉田松陰の思想と教育」などがあり、その間「ペスタロッチ全集」「吉田松陰全集（岩波書店）」などを編集されている。



山鹿素行について

筒井清彦



古学復興の風潮

山鹿素行先生の学問

山鹿素行先生の学統

道統の継承

## 古学復興の風潮

時間の都合で、山鹿素行先生の思想体系全般についてお話することができませんので、その学問の流れが、日本の思想史、あるいは日本の国民精神の歴史において、如何に生きて来たか、また生きていくかということについて、あら筋をお話したいと思います。

山鹿素行先生が出られました時代は、徳川幕府の政策によって儒教が文教の主統となりましたが、幕府は湯島に聖堂を建て、林家を大学頭とし、朱子学をもって正統な教学と致しました。朱子学は宋の時代朱子を開祖とする学派で理気心性の学と申しまして、理を尽し、性を究めることを趣旨とした体系であります。ところが、山鹿素行先生の時代になりますと、その学問の方向が周公、孔子の古典的時代に目を向けてゆくようになりました。そういう古典再生、ルネサンスの動きの一番先端に立ったのが先生でありました。儒教の歴史から申しますと、こういう学派を古学派と申します。古学派の学者としては、先生の他に荻生徂徠、京都堀川の伊藤仁斎等が挙げられます。そういう儒学の風潮は当時の学界全般の流れであり国学の勃興もその一つで、荷田春満、賀茂真淵のような学者が出て参るわけです。

古学の考え方は、儒教の本源は周公及びその道を祖述した孔子にあるという思想であります。中国の古典的時代、周公、孔子に直結しようとする学問の傾向であります。こういう風

潮が、国学の場合は日本の古典研究へ進んで行って、古事記、祝詞、万葉集等へ強い関心が向けられてゆくわけでありませう。

### 山鹿素行先生の学問

山鹿素行先生は、そういう古学復興の時代の曙光の中に立っておられた。既に十歳にみたぬ幼年の頃、林家の林道春に入門してまず朱子学の勉強を始めました。ところが先生の父君が学識の広い方で、朱子学の勉強と並行して古神道や仏教老荘の勉強もさせられました。それが後に古学を聖教として他の教学、学派を批判する「聖教要録」「たく謫居童問」に結晶してまいります。この中で、儒教の本流は周公、孔子の道統にある。唐、宋、明と次第に時代が下って、異端の学が入って来て、周公、孔子の正統の教学が没落してしまったと慨いておられます。幕府が採った朱子学は、理気心性の学、静座して工夫を凝らす学問で、仏教の強い影響下に形成されたものである。しかるに、周公、孔子の学問はただ自分一個の精神修養の学ではなく、四書の「大学」でも明示されているように、修身齊家治国平天下の学である。国を治め、天下を安んずることが学問の眼目、目的である。自己一人が「持敬静坐」して悟りを開くようなものが主目的であるのは、本當の周公、孔子の教学ではない。それが幕府の忌避にふれ、播州赤穂に流謫されたのです。赤穂には十年間居られたのですが、浅野侯は名

君で、素行先生のために家老級の扶持を給し、沢山の本を買って先生が何不足なく学究生活を送れるようにしたのであります。この十年間に、先生は東西の書物を実によく読んで居られます。「配所残筆」の中で、当今舶載の書はほとんど読んでいると言って居られます。先生は儒学者で、兵学者でありますが、また古神道、歌道等の勉強もしておられます。そして日本歴史の古典の第一書として、「日本書紀」の研究をされ、それが「中朝事実」という本になったのであります。この本は（実物を掲げて）乃木大将が学習院の院長をなさっております時、出版当時のままの姿で復刊されたものであります。（巻末を示して）巻末の「附録惑疑」、これは書紀に誌された記事の内容についての疑問に対する解答で先生の子孫、長崎県平戸の山鹿家に伝わっていたのを、乃木將軍が筆記して、凸版印刷にしたものです。

当時の儒学者たちは、中国をもつて文明の国であり聖人の国であると考えて来ました。日本は夷であるとして、荻生徂徠などは、日本橋から品川へ転居しました時、自分は聖人の国に近づいたといつて喜んだという話もあります。それほど奈良時代以来日本人は中国崇拜でありました。ところが「中朝事実」において、素行先生はこの卑屈な態度を直正面から批判されたのです。中朝とは中華文明の国であり、それは外ならぬ日本である。その日本が如何に立派な国であるかという事実を明らかにするという意味で、「中朝事実」という名前をつけられたのです。これがいわば素行学の骨髄といふべき思想であります。

松陰先生もこの書に先師の根本の考え方があると言っておられます。松陰先生が「先師」というときは山鹿素行先生であり、「我師」というときは佐久間象山先生です。すなわち松陰先生は、自分の家の学問の祖として終生山鹿素行先生を先師として仰いでおられるのです。この「中朝事実」の思想はいわば尊王攘夷の思想であります。正しい道を守るということは、中国においては周公、孔子の道を守ることであり、中朝、日本に於ては皇祖皇宗の道を守ることである。「配所残筆」の中で、学問で大切なことは、一つの道統として培われて来た「学問の筋」を大切にすることだ、と言われている。この「学問の筋」を離れては本当の学問、実践学は成り立たない。今も昔も。

### 山鹿素行先生の学統

山鹿素行先生は流謫十年目に免るされて赤穂から江戸に帰り、数年後に亡くなられました。

山鹿流の兵学の極意、大星三重伝は、代々、師から三人の弟子へ伝えることになっておりました。先生の直伝の弟子三人、その一人は吉田友之允といい、松陰先生の先祖に当たります。吉田家は代々山鹿流の兵学をもって毛利藩に仕えていたわけであり、その一人は素行の長男山鹿高基で松浦家の兵学師範に迎えられ代々家学を伝え、その子孫が現在の山鹿平戸市

長であります。他の一人は東北の津軽の殿様です。その子孫が常陸宮妃殿下です。

松陰先生は若い時、平戸に行つて山鹿万助に入門して家学の勉強をしております。その時の入門の起請文に血判を押されたものが、今も山鹿家に残っております。それから当時萩から持つてゆかれた萩焼きの茶碗も残つて居ります。

その松陰先生が江戸に出て、素行先生の傍系の子孫である山鹿素水のところへ兵学の講義を聞きに参ります。その時肥後熊本の上鹿流兵学の家に生れた宮部鼎蔵と邂逅いたします。

彼と二人東北に巡遊し、鼎蔵は後に京都池田屋で新撰組に斬られたのであります。宮部鼎蔵は当時幕末維新の志士の統領格であり、年令からいっても、肥後藩における地位からいっても、当時第一の指導者であります。山鹿流の兵学はそのように幕末勤王運動の思想的中心人物を生んだわけであります。これはあの「中朝事実」一巻の思想に外なりません。「中朝事実」は当時の尊王攘夷論であります。尊攘を学問でいえば、尊王とは国民精神、国民文化の正統を守ることであり、裏からいえば異端邪説を攘うことで、すなわち、攘夷であります。米ソのメシア思想、中国の中華思想、ドイツの「ウィーバー・アーレス」いづれも尊王攘夷といつてよいと思ひます。ただその「王」というものが日本では歴代一統の実中心として実在しており、他の諸国は虚中心であるという相違であります。

八ついで講師は当県の「豊後学」の学統、三浦梅園↓脇蘭室↓帆足万里↓岡松邇谷・毛利

空桑について述べ、万里の弟子の孫、岡松成太郎（元通産次官）木下郁景知事が大分鶴崎臨海工業地帯を発足せしめたこと、また鶴崎出身の秋山玉山が肥後熊本の藩校時習館を創立し、ここに蘭室、甕谷、空桑が教官であったこと、時習館の学統から教育勅語の元田永学、井上毅（匡四郎は甕谷の次男）が出たこと、福沢諭吉の父百助は万里の門人であることなどを示して学統は生きていと強調された。V

### 道統の継承

山鹿素行先生にしても、豊後学、時習館の学統にしても、やはりそのように一つの「学問の筋」が流れています。従って、その筋が立派でなければなりません。共産主義を信奉する人々を見ても、彼らもやはりマルクス・レーニン主義という一つの学問の筋を持っておりまゝす。それは一つの学統であります。問題は人間が宇宙人生を立派に生きてゆく上で、いづれが真善美であるかということになります。正しい学問の体系は、人間が天地の運行と共に、それに参じてゆくような悠久の深いものでなければなりません。一つの観点、一つの時点からだけ眺められたものであつてはならないわけです。従って、同じ筋といつても、その筋の立て方において聖教異端の判別が行われなければならない。その判別をすることが実は尊攘精神であります。日本の国は駄目な国だ、つまらぬ国だ、中国やソ連は立派な国だ、そち

らが祖国だというのでは、おれの親はつまらないから隣の親に孝行しよう、というのと同じで、これでは学問の筋は立ちません。正しい学問の筋は中朝の事実の上に立った生きたものでなければなりません。学問が生きたものであるためには、どうしても「中朝事実」という自覚の上に立てられたものでなければならぬ。事実の上に立たないものは、学問、科学とは言えない、「資本論」を無謬とするのは社会科学者ではなく一宗の信徒である。

時間がなくて大急ぎで話しましたが、素行先生の学問にふれる機縁になれば幸いだと思えます。

なお、ここに杉浦重剛先生が素行会において乃木將軍の追弔会をされた時に書かれた掛軸があります。

一死誰培士道根 可<sub>レ</sub>知其学有<sub>二</sub>淵源<sub>一</sub>

秋風落日宗三寺 齊弔古今忠義魂

杉浦先生はいまの陛下が皇太子のときに倫理学をご進講された方です。明治天皇のご大葬のみ車が宮城をお出ましになる九月十三日に乃木將軍は殉死されました。そこで、その翌年の九月十三日のご進講の時、「今日はどういう日でございますか」と殿下にお聞きしましたところ、殿下は「乃木が殉死した日である」と申されたそうです。そこで、杉浦先生は殉死の前に乃木が何か申し上げましたかとお尋ねしたところ、乃木將軍が十一日にお別れに参上し

て、山鹿素行の『中朝事実』を差出し、「ご成人の後、国をお治めになります時に、これが基本となるものと存じますので、これをお習いになりますように」と申し上げたことをお話しなされました。そこで杉浦先生は非常に感激され、早速乃木將軍と山鹿素行先生のお墓に参られました。そして昭和九年、山鹿素行先生の二百五十年祭が行われた時、この詩を作られたわけです。將軍は一死もって日本の士道の道統の根を培ったのである。しかし、その死にはその学問の深く遠い淵源がある、即ち素行学という学問の流れがある。いま秋風落日の宗三寺において、山鹿素行と乃木將軍という古今忠義の魂を弔らう、という意味です。乃木將軍は吉田松陰先生の遠縁の方です。学問を松陰先生の伯父であり、將軍の親戚である玉木文之進に受け、幼年時代には父につれられて度々泉岳寺の赤穂義士のお墓に参っております。乃木將軍は身をもって素行学、松陰学を實踐された方でもあったのです。

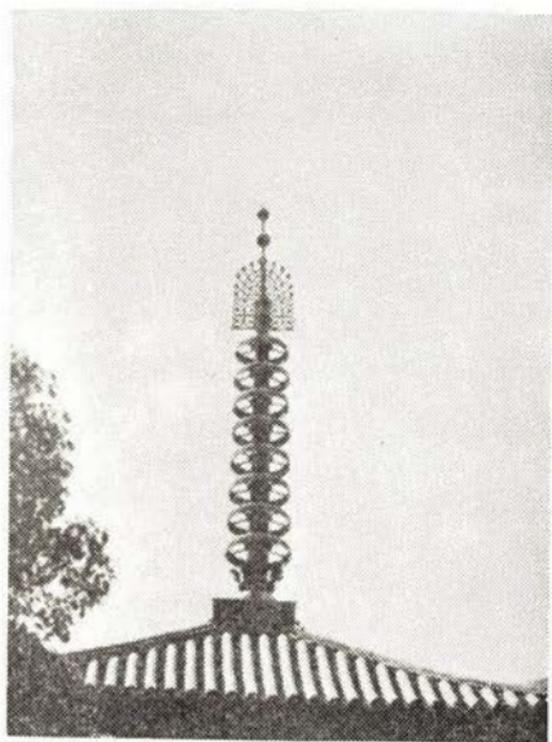
#### 講師略歴

京都大学経済学部卒業。国民精神文化研究所々員を経て（そのころ「山鹿素行集」を編集）建国大学創立と共に教授として赴任。戦後ソ連に抑留され二十一年帰国。その後大分大学教授。現在同大学芸学部長。著書に「近代経済思想史論」「経済学概論」などがある。

聖徳太子

「勝鬘經義疏」

夜久正雄



はじめに

心に残る太子のお言葉

勝鬘經義疏について

勝鬘師子吼一乘大方便方広経

如是我聞。一時。仏。住三舍衛國祇樹給孤獨園。時波斯匿王及末利夫人。信法未久。共相謂言。勝鬘夫人是我之女。聰慧利根通敏易悟。若見仏者必速解法心得無疑。宜時遣信發其道意。夫人白言。今正是時。王及夫人與勝鬘書。略讚如来無量功德。即遣內人名旃提羅。使人奉書至阿踰闍國。入其宮內。敬授勝鬘。

○……………○

勝鬘經義疏

「是我ガ女」トハ讚重ノ辞ナリ。言フココロハ子ヲ相ルコト父母ニ過グルハナク、臣ヲ知ルコト君王ニ如クハナシ。我ガ子ノ称ハ自他ヲ別タズ、唯善ニ在リ。今勝鬘ハ既ニ我ガ子タリ。マタ明德アリテマサニ勝道ヲ聞クベシ。故ニマタ自カラ我ガ子ト称スルナリ。「聰慧利根」トハ耳ニ善ク聴クヲ聡ト曰ヒ、心ニ明ラカニ察スルヲ慧ト曰フ。聡察爽明ナル之ヲ利根ト謂フ。「通敏ニシテ悟リ易シ」トハ表ヲ聞キテ裏ニ達スル、之ヲ通ト謂フ。善ク聴クノ致ス所ナリ。照了深明ナル之ヲ敏ト謂フ。善ク察スルノ致ス所ナリ。理ニ遇フテ即チ解スル、之ヲ悟リ易シト謂フ。利根ノ致ス所ナリ。前ノ句ハ其ノ性能ヲ歎ズ。後ノ句ハ其ノ功用ヲ言ヒ、共ニ相成ズルナリ。教ヲ稟クルハ必ズ善ク聴クニ由ルガ故ニ聴ヲ歎ズルヲ首トナス。此ハ器已ニ具ハルヲ明ス。「必ズ速ニ法ヲ解セム」トハ一タビ聞キテ即悟シテ再教ヲ待タズ。「心疑無キコトヲ得ム」トハ神情開朗ニシテ小乗ノ疑滯ナキナリ。

## はじめに

古典を読むということは、古人の言葉に直接ふれる経験を持つということです。そこで、本日は聖徳太子の著述といわれております「勝鬘經義疏」の原文を皆さん方と一緒に読んで、太子のお心を偲びたいと思います。

その前提として、われわれが精神生活の指標と仰いで来ましたが、黒上正一郎先生の遺著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」にふれておきたいと思えます。このテキストを、私は旧制高等学校の一年の時に、小田村さんたちと一緒に、今皆さん方がやっておられると同じ輪読形式で読みました。ところが、この本は読まれた方はすぐ感じられたと思いますが、非常に難しい。言葉そのものがむずかしいだけでなく、ひとつひとつの言葉が詩的な、波打つような調べをもち、しかも非常に高度な思想的内容をもっております。現在の諸君よりも、漢文の読解力や日本歴史の知識が多少はまさっていたかも知れませんが、読み終って感想を求められても、全く答えることが出来ぬほど難解なものでした。しかし、黒上先生の教えを伝えようとする先輩の熱意に感動して、一年ぐらい夢中になって読みました。その当時先輩たちが、この一冊をしっかりと読めば、他の思想的な文献に対する心の態度が確立すると言って呉れた言葉を今でもよく覚えております。当時の私は自分の生涯の生き方の根本的な

態度というものを求め続けていました。それが確立できない限り、自分の将来は暗澹たるものになるだろうと思いつめていました。私は別に聖徳太子の研究者になるつもりはなく、従って、聖徳太子についての知識を求めたのではなく、自分の生きて行く根本的な人生態度を学びたい気持でこのテキストと取り組みました。そして実に大きな影響を与えられ、生きる道をもそこに見出したというのが私の経験でありました。

### 心に残る太子のお言葉

この書物にどのような姿勢でとり組むべきかということについては、かつて小田村先生が合宿で講義されたことがあり、その緻密で正確な講義の全容が「新しい学風を興すために」第二集に収録してあります。後でそれをよく読んでみて下さい。

私はこの三十年、いつも自分と人との問題、自分と全体との関係を考える時、太子のお言葉をしるべとして来ました。その中で特に心に残った部分を二つだけあげて置きます。

その一つは、「新しい学風を興すために」第二集の一九八頁の一番終りの行にある言葉です。

「何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば、悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む。」

ことさらに註釈は必要としないでしようが念のために言葉の説明を致します。「天下の道理」とは、人生の大道、人類普遍の原理といつてもいいでしょう。「悪を遣る」とは、悪を自分のところから他に移す、自分が悪から逃れるということ。太子が善悪といわれる場合、それは必ずしも道德的な意味に限定されたものではありません。「南無とひとたび念ずるも善にあらずといふことなし」という太子のお言葉があります。仏の教えにふれて、それに帰依する心持が起った時、それは「善」である。「善」とは永遠の教えに従うという意味を持つていると思います。

「必ず己に始まりて方に能く人を勧む」とは、人生の正しい道を行うということ。必ず自分の心の改革から出発しなければならぬということ。従って「若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む」ということになります。われわれは家庭とか学校とかの具体的な問題を処理する場合に、とかく自分を全体から切り離して、それを批判しがちであります。しかし、もし全体が向上していかなければならないものならば、まず自分がその道を開いて行くべきである。その行為に他の人が感動して、おのずからそこに全体の向上というものがあるのだと太子は言っておられるのです。この他と共に道を開いてゆくことは太子がくりかえし説いておられることの一つなのです。「三経義疏」の中で、菩薩、大士というような悟りを開いた人々の精神を「他と共なる生」という一点にしばって考えておられま

す。われわれが人生を生きて行くという事は、孤立して生きていたのではない。家庭生活、職業生活、国家国民生活というような団体の一員として生きていたというのが現実です。このお言葉は私が団体の中で生きてゆく時、折にふれてしおりとして仰いで参ったものです。

次に二〇〇頁のところには次のような言葉があります。

「二には理に就いて論ぜば、声聞は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃を畏る。二つながら皆仏の深旨に違き俱に中道を失へり。故に之を前後の二辺に列ぬるなり。菩薩は心益物を存するが故に生死を厭はず、万徳常果を証せんと欲するが故に涅槃を畏れず。凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得たり。」

「声聞」というのは自分だけの救済、解脱を求める人です。「生死」とは愛欲に溺れがちな現実人生です。「涅槃」とは心の救いという意味なのでしょう。声聞は現実生活を否定して、観念的な救いを求めがちだということになります。凡夫はその反対で、現実生活に溺れて、永遠の世界に開眼することをためらうということなのでしょう。この二つの生き方は二つながら仏の教えにそむいているということです。

この引用の部分の少し前に太子のお言葉があつて、それには声聞、菩薩、凡夫の順に並べ

ることについて疑問を提出しておられます。もし尊より卑にいたるならば、菩薩、声聞、凡夫の順であろうし、卑より尊に至るならばその逆の順であるはずだ。それなのに声聞、菩薩、凡夫の順に並べてあるのは、それがかたよった生き方なので「前後の二辺」につらねたのである。中道の実践者として菩薩を中に挟んだということです。「益物」は「物を益す」ということで、「物」とは森羅万象のすべてという意味ですが、主として大衆民衆という意味で使われています。菩薩は大衆を救うことを唯一の念願としているから、現実人生を離れることがない。人生そのものの中に道を実現しようとするのです。又、万徳常果、つまり永遠の仏徳の成就を実証しようという念願を持っているから、宗教的世界に身を投ずることを畏れないといふのです。「凡夫の偏」とは「声聞、凡夫の偏」という意味だと思えます。声聞は現実遊離であり、凡夫は現実執着であって、いずれも「偏」であるといふわけです。

われわれはともすると他と切り離された個人的な救済を求めがちです。何故なら、その中に人生の正しい道を実現しようとして、全体と共に生きるといふことは、精神的には苦痛だからです。「生死を厭はず」とは、この人生の現実的苦闘を回避しないといふことです。しかも、ただ人生の中で低迷してはならず、そこに道を実現するために努力を傾けるところに「涅槃を畏れず」といふお言葉が出て来るのです。理想と現実の乖離かいりとか、個人と全体の分離とかいふ重大な問題をとく鍵がこれらの体験的なお言葉の中にはかくされていると

思います。人生において本当に力を持っているのは、自分のためにだけ心を尽すことでもないし、全体はかくあるべしということを理論として論ずることでもない。自分自身が全体の中に没入して、そこで必死の努力を傾けるといふ真心によつてのみ開拓されるものであることをこれらのお言葉は強く示しているのだと思います。

太子はお子様やましうの山背大兄皇子に対して「諸々の悪を為すこと勿れ。諸々の善を奉行せよ」といふお言葉を残されました。山背大兄皇子はそれを守つて、蘇我氏の包囲の中で自刃されましたが、それから二年して大化改新が実現し、蘇我氏の専横は抑制されました。国民のためには身を捨てて悔いがないといふ皇室のご精神に人々が感動したことが、大化改新の成就のため大きな力になったと考えます。そういう歴史的事実を思うにつけ、「悪を遣り善を取るはず已に始まりて方に能く人を勧む」といふお言葉は、全体のために生命を捧げる人の心によつて、全体の生活は開けて行くものであることをお示しになったものだと考えられます。

一人の人のまことが偉大な政治的事件の原動力になるといふことについて、もう一つ歴史的事実を申し上げます。吉田松陰先生は刑死の直前に同志にあてて「留魂録」を書き、その末尾に五首の歌を書きつけました。

かきつけ終りて後

心なることの種々書き置きぬ思ひのこせることなかりけり

呼出しの声まつ外に今の世に待つべきことのなかりけるかな

討たれたる吾をあはれと見む人は君をあがめて夷攘<sup>えびす</sup>へよ

愚かなるわれをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はむこころ吾忘れめや

いずれも言葉が具体的な内容をもっているので、感動が直接的です。最後の歌は「太平記」の楠木正成の七生報国の言葉につながるものです。連作短歌は正岡子規の創造したものだといわれているのですが、事實は、幕末維新の志士たちの歌に数多く残っていて、自然な真実な感動がこういう形式を生んだのだと思われまます。後に自分の思いを托すというこの誠実な心がつみ重なって、はじめて明治維新は全国的な運動となって展開されたのです。吉田松陰先生が門下の金子重之助と共に、下田に来ていたペリーの軍艦でアメリカへ行こうとして捕えられたことはご承知の通りです。そのペリーの航海日誌に「自分はかくの如き優秀な青年をもった国を知らない」と記してあるそうです。原典にあたっていないので断定はできませんが、あり得ることだと思えます。「日米フォーラム」(一九六四・一―八)という雑誌に、東北大学教授の林竹二という方が「幕末の海外留学生」という論文を掲載しておられますが、それによると彼らの非常な熱意と吸収力と、天下国家に対する経綸・見識とは留学先の先進国の識者を感動させたのです。それらの人々の心持や精神が日本に対する諸国の外交

政策にも大きな影響を与えているのだと思います。又、「宝島」や「ジキルとハイド」などの作者として有名なスチブソンは松陰先生の弟子からその伝記を聞き「松陰讃仰」の一文を遺しているのです。従って松陰先生の精神は明治維新の基礎になったばかりでなく、海外にも波及するところの、ある強大な精神であったと言えます。その生涯は、政治的に考えるに失敗であったのでしようが、歴史を作る大きな生命の力となった事を確信することが出来るのです。その精神はやはり、前述の聖徳太子のお言葉にこもる精神につながるものに違いないと思うのです。われわれも、団体生活、国民生活の中で、さまざまに心を労することが多いのですが、その時はこれらのお言葉を仰いで、実効は期しがたくても、心を尽して事に当たりたい、そうでなければ本物は出て来ないということを痛切に感じます。

### 勝鬘經義疏について

「勝鬘經義疏」は聖徳太子が「勝鬘經」について註釈を施されたものです。「勝鬘經」はいわゆる大乘仏典の一つで、五世紀の頃、南中国の宋の国で天竺三藏求那跋陀羅くまぼだらという人が漢訳したものです。そのほか鳩摩羅什くまろじくという有名な仏典の漢訳者によって法華經も漢訳され、太子の時代には、それらの漢訳仏典が入って来ました。それを聖徳太子が読まれたわけですが、義疏の本文にふれて見ると、太子が心をつくして仏典を読んでおられることがよく

分ります。心を尽して読むということは一体どういうことを具体的に示して下さっているようです。

冒頭にかかげた最初の部分は勝鬘經の本文の書き出しの部分であります。勝鬘經というのは、正式の名前は「勝鬘師子吼一乘大方便方広経」というのです。阿踰闍王妃勝鬘夫人おんと仏との間にかわされた対話という形式で記述されています。冒頭の「如是我聞」は「かくの如く我聞く」自分はこのように聞いたということ、すべての漢訳大乘仏典の殆んどが、こういう書き出しになっております。

「一時。仏。住<sub>ニ</sub>舍衛国祇樹給孤独園<sub>一</sub>。」とは、あるとき、釈迦が舍衛国の祇樹給孤独園に住んでいらつしやったという意味です。祇樹とは祇陀太子の園林という意味で、あわれみ深いために「給孤独」と呼ばれていた須達長者がそれを買って、釈迦のために説法の道場を作ったのです。平家物語の最初に出て来る「祇園精舎」と同じなのです。

そのあとの經典の文章は次のような意味です。当時波斯匿王と末利夫人は大乘仏教を信じ、てまだ余り日が経っていなかった。二人が相談して言うには「勝鬘夫人は私達の娘だ。非常に聡明な人で物事がよく分る。もし仏に会うことができれば、きっとすぐ法が分るであろう。心には疑いが残ることがないであろう。すぐに手紙をやって、その宗教心を開發するがよい」そこで末利夫人が波斯匿王に「今正是時」つまり今が丁度それにふさわしい時期だと

いうのです。王と夫人は勝鬘に手紙を送ります。勿論手紙の中で詳しく説き尽すことはできないけれども、概略如来のはかり知れないありがたさをほめ讃えた。そこで旃提羅せんたいらという名の召使いがその手紙を持って、阿踰闍国へ行き、王妃の勝鬘にその手紙を授けた。これだけが、勝鬘経の原典の部分であります。

この原典の言葉についての義疏——註釈の部分が太子のお言葉になるわけです。勿論ここに抄出したところの前にも綿密な註釈が続いているのですが、今は「勝鬘夫人是我之女」以下の部分を太子は如何に心をこめて読んでおられるかを見てみましょう。

先ず「勝鬘夫人是我之女」ということについて「『是我ガ女』トハ讃重ノ辞ナリ」と註しておられます。ほめたたえる言葉であるということです。「言フコロハ子ヲ相ルコト父母ニ過グルハナク、臣ヲ知ルコト君王ニ如クハナシ」その意味は、子供の心を最もよく知っているのは父母であり、臣の心を最もよく知っているのは君王であるということです。「我が子ノ称ハ他ヲ別タズ、唯善ニ在リ」という意味は、「我が子」といっているのは、ただ自分の子だから自分の子だと言っているのではなく、自分の子であろうと人の子であろうと、善を行ずるといふ一点において「我が子」と呼んだのだ、という意味でしょう。「今勝鬘ハ既ニ我が子タリ。マタ明德アリテマサニ勝道ヲ聞クベシ。故ニマタ自カラ我が子ト称スルナリ。」勝鬘は既に肉親の関係において自分の娘であるが、そればかりでなく、明德があり、

すぐれた仏の道を聞く力を持っている。そういう善に向う素質を持っているからこそ、「我が子」と呼ぶのであるという意味です。「それでこそおれの子だ」という、あの親の気持でしょう。「勝鬘夫人是我之女」という原典の簡単な言葉にこれだけの綿密な体験的な註釈を施されているのです。したがってこの註釈の中に、太子の御子さまがたに對する御愛情と御教育の精神とが仰がれるのです。

『聰慧利根』トハ耳ニ善ク聽クヲ聰と曰ヒ、心ニ明ラカニ察スルヲ慧ト曰フ。聰察爽明ナル之ヲ利根ト謂フ」ここでは「聰」と「慧」の一字一字を正確に解釈しておられます。そして、耳に聞くこと、心に察することがさわやかで明らかであるのが利根というのだということです。聞くことがさわやかであるというのはすがすがしい心で人の言葉を聞くこととし、察することが明らかであるというのは人の心を、その人の立場になつて察するということとでしょう。それが利根ということとです。

「『通敏ニシテ悟リ易シ』トハ表ヲ聞キテ裏ニ達スル、之ヲ通ト謂フ。善ク聽クノ致ス所ナリ。」まず「通」の註釈です。「表ヲ聞キテ裏ニ達スル」とは言葉を聞いて心を汲むことができるということとでしょう。それは「善ク聽ク」という心の集中によつてできるのです。「照了深明ナル之ヲ敏ト謂フ。善ク察スルノ致ス所ナリ」今度は「敏」の註釈です。理に照して根本的に了解するというのが敏である。それは人の言葉を聞いて、その言葉の出で来る心を察

することによって出来るのだということです。

次に「易悟」の註釈が行われています。「理ニ遇フテ即チ解スル、之ヲ悟リ易シト謂フ。利根ノ致ス所ナリ。」すなわち「通」は「聡」つまりよく聞くという働きによって生れるものである。こういふのであり、「敏」は「慧」つまりよく察するという働きによって生れるものである。こういふ練磨された心の働きの「利根」であつて、利根をもった人が道理に出あうと即座に理解する、それを「悟り易シ」というのだと註しておられるのです。実に心理的で、しかも論理的にきわめて正確な論述であります。

「前ノ句ハ其ノ性能ヲ歎ズ。後ノ句ハ其ノ功用ヲ言ヒ、共ニ相成ズルナリ。」すなわち「聡慧利根」とは性能つまり性質、働きの意味であり、その働きによって「通敏易悟」という功用が現われ、それによって教えを聞く姿勢が整えられるのだと言っておられるのです。性能と功用とは相俟つて真実の道が実現せられるのである、と説かれています。

「教ヲ稟<sup>ウ</sup>クルハ必ず善ク聴クニ由ルガ故ニ聴ヲ歎ズルヲ首トナス。」この文中の「聴」は前述の「聡慧利根」の「聡」に当るものです。この部分は殊に聖徳太子のご精神がよく現われているところです。教えを受けるといふのは必ずよく聞くということによって出来るのであるから、「聴ヲ歎ズルヲ首トス」つまり最初に「聡」(耳ニ善ク聴ク)ということを讃歎したのである。心に察するということもよく聞いた上で察するのであつて、聞くということが

なければ教えを受ける資格はないということです。概括的な粗雑な思考法はすべてよく聞かないところから生ずるのだと思います。

「此ハ器已ニ具ハルヲ明ス。」勝鬘夫人が「聡慧利根、通敏易悟」というすぐれた性質を持つてゐることは、仏法を受け入れる器として十分な資格を備えていることを明らかにしたのだという意味です。經典の簡単な文句を心を尽して考えられて、教えを受ける態度は如何にあるべきかを心にきわめたお言葉であると思います。こういうお言葉を聞くと、われわれはその中に深いご教示を受けずにはおられません。これは単に仏教の教えを聞くということがばかりではなくて、人生のすべてにおいてまず人の言葉をよく聞くということが大切です。そして、その人の心持をその言葉から直接に察して、そこに人と共なる生が展開してゆくのだと思われまます。

「『必ず速ニ法ヲ解セム』トハ一タビ聞キテ即悟シテ再教ヲ待タズ。」この言葉には、すぐれた素質を持った人が仏法にめぐり合った時の昂揚した忘我の感動が述べられ、太子ご自身の告白のような美しさがあります。信はこのようにして伝えられるものでしょうか。

「『心疑無キコトヲ得ム』トハ神情開朗ニシテ小乗ノ疑滞ナキナリ。」原典では、もし仏に会って法を聞いたならば速かに法を解して心に疑いがなくなるであろうと述べてあるだけです。「心に疑いが無い」ということを太子は「神情開朗ニシテ小乗ノ疑滞ナキナリ」と言

われるのです。これは私の特に好きな太子の御言葉の一つです。「小乗」というのは、始終自分のことだけに心が閉ざされている状態です。自分を向上させるという意味でも、自分の利害に執着するという意味でも同じことになるのですが、心が自分を離れることが出来ない。「おれが、おれが」という気持から遂に離れることができない。そういう状態は「疑滞」の状態である。心が疑い滞って、真の展開というものが出来ない。「聡慧利根、通敏易悟」というすぐれた素質が、仏の教えを聞けば、たちまち法を解して小乗の疑滞——自己への執着が除かれ「神情開朗」になるであろう。「神情開朗」の「神」とは、はかりがたく高貴なものという意味です。「内心測り難キヲ神ト曰フ」とあります。故に「神情」とは、はかりがたい高貴な心ということになります。「開朗」とは、自己を離れることができた、広やかな、豊かな心持です。従って「神情開朗」とはすなわち「救い」といつてもよいのでしよう。「開」とあるのは、閉された自己でなく、開かれた、他と共なる生を暗示していると思います。

以上、ここにはごく一部分しか抄出できませんでしたが、太子は全巻にわたって、經典の一語一語をご自分の経験に照らし、ご自分の言葉で註しておられるのです。原典では波斯匿王が自分の娘の勝鬘に手紙をやったという外的な行動の叙述があるだけです。しかし、太子はその簡単な叙述を精密にたどって行かれるのです。例えば「勝鬘夫人是我之女」という言

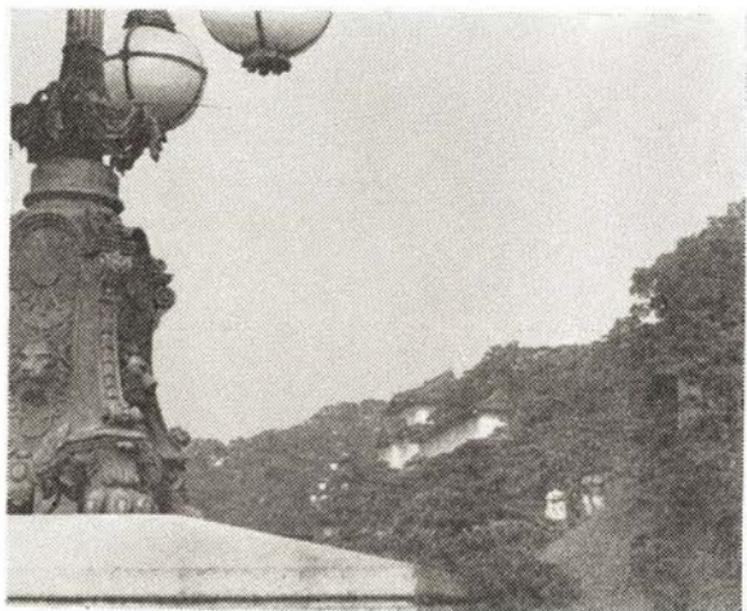
葉にふれて、何故「わが娘」といったのか、「聡慧利根」の「聡」とはどういうことであろう。「慧」とはどういうことであろう。何故「聡慧利根」と「聡」が最初に来るのか、と正確にきわめて行かれるのです。そして、よく聞くということが最も重大なことであるから、まず「聡」を歎じ、次に「慧」が来ると考えられるのです。この順序が逆になつたら全然別なものになってしまうという風に、心をこめて、ひと言ひと言を吟味して經典に取り組んでおられるのです。これが太子の「三経義疏」の内容となつております。従つて、これらのお言葉を読みますと、仏教というような一つの宗派をこえて、太子というすぐれた人格のお声を直接聞くような気持ちになつて非常な嬉しさと喜びを感じさせられます。そして、私は今も折にふれて太子のお言葉を仰いで、生きてゆくしおりとしております。以上をもつて私の講義を終わりますが、古人の言葉を正確にたどるといふ態度をお互いに是非身につけたいと念じております。

### 講師略歴

東京大学文学部国文学科卒業。主として短歌の創作、研究をつづけ今日に至る。現在亜細亜大学教授。著書に「三条実美公歌集・梨のかた枝とその研究」「ホイットマン詩撰(木口公十氏と共著)」「歌人今上天皇」があり、近く「古事記への道」が国民文化研究会より発刊の予定。

天皇と天皇のみ歌

山  
田  
輝  
彦



はじめに

天皇論の盲点

明治天皇のみ歌

今上天皇のみ歌

はじめに

天皇の名において戦争が始まり、天皇の名において戦争が終った。多くの人が死に、生活は極度に窮迫した。天皇と天皇制が一部の人々の憎悪の的となったのも、ある意味では当然であった。今は客観的な立場で戦争をながめる余裕も生れ、性急な断罪は影をひそめた。しかし、多くの知識人の間では、天皇の問題はなしくずしの慢性的な無関心の中に放置されている。これは戦前神聖不可侵の名の下に極端に偶像化されたのと逆の現象のようで、実は天皇と国民の間の紐帯が生命を失っているという点では驚くほど似ている。

天子様という言葉で現わされる天皇に対する庶民の伝統的親近感を「底辺感情」と呼び、その停滞した後進性を指摘するのが流行思想の一つのタイプとさえなっている。しかし、皇室は民族の原体験が最も純粹な形で継承されている場所であり、天皇は日本人の宗教感、道徳感―生の原理感の体現者である。苛烈な風雪を耐え抜いて来たこの事實は、先鋭な理論の分析にも耐え得るはずである。何故なら天皇に代るべき自然な権威はまず日本には存在しないからである。しかし、天皇が「自然な」権威であることは、決してそれが「自然に」続いたということではない。天皇制を創り、持続せしめた意志があったと同時に、それを変革し、打倒せんとする意志や行為はいつの時代にも存在した。また、そういう積極的な変革の

意志ではなくても、かつて吉田松陰が指摘した「天子は誠の雲上人にて、人間の種にはあらぬ如く心得るは、古道曾て然るに非ず。王朝の衰へてより茲に至り、又茲に至りてより王朝益々衰ふるなり」というごとき、いわば思想の硬化現象とも称すべき危機はいつの時代にもあったのである。そういう破壊の意志や自己崩壊の危機にあらがいつつ守り抜いて来た意志があったこと、従って守る意志のなくなった時それは消滅するということを変更して確認すべきであろう。

憲法第九条に論議が集中するのは、それが国民個人の生死に直接かわる問題だからであろう。しかし、第九条はいわば国家防衛の手段に関する条項に過ぎないのであって、問題の重大さから言えば第一条の比ではない。何故なら、第一条は日本の歴史と文化の根源にかかわる問題だからである。

国家機構や権力構造はいわば「国家」の顔である。制度的側面へのアプローチは比較的容易である。しかし、国家は同時に一つの「全体生命」でもある。このことは、知的分析にとつては困難な問題だが、体験としては自明な事実である。国家は個人の機械的集合体ではない。古来契約説的な国家学説と共に、国家有機体説が一つの潮流をなしていたことは、やはり必然的な理由があったのである。日本は日本という一つの「全体生命」であり、天皇はその体現者であった。日本がわれわれにとって選択の対象ではなく運命であるならば、天皇の

問題はわれわれの存在の根源にかかわる重大事である。憲法第一条が冷い無関心の中に埋没しているという異常な事態は、それを抹殺する意志を持った者が護憲論をふりまわしているという奇怪な事実と共に、国を憂うる人たちが改めて注目しなければならぬ問題であろう。

### 天皇論の盲点

あらゆる思想は通貨のようなもので、人手から人手に渡ってうすぎたなく汚れるものだ。ただ達人だけが通貨形態をとらぬ以前の思想の源泉をとらえることができるとは小林秀雄氏の言葉であった。思想はともすれば、その母胎である生きた体験から遊離して、論理の自己運動と化しやすい。源泉に溯る努力とは、ともすれば固定化し硬化せんとする思考停止の状態を不断に打破して行くことであろう。明治以降、人文科学に於ける学問とは、日本に存在する伝統的事実を西洋の概念に置きかえる作業に外ならなかった。国家論や天皇論の多くは、王権に対する血の抗争の中から生れた西洋の論理によって組み立てられた。現代的思想的混乱は、たしかにここに胚胎している。

昭和二十一年元旦に発せられた「新日本建設に関する詔書」は普通「人間天皇の宣言」といわれる。天皇ご自身によって、人格化の思想を否定されたこの詔書は、敗戦の荒廃を背景として、神から人間への転落、権威の崩壊という強烈な印象を与えた。それは敗戦の衝撃に

追いつけかけるといふ大きな衝撃であつた。しかし、ここで否定されたものは国粹主義者や一部の軍人達によつて故意に歪曲された天皇像に外ならなかつた。「現人神天皇」と「人間天皇」は本来相矛盾するものではない。日本人の「神」と西洋人の「神」は全く異なつたものであることを理解しなくては、日本の思想史の重大な核心が見おとされてしまふ。

キリスト教は近東の砂漠で生れた宗教である。苛烈な風土に生きる遊牧民族を統一するシンボルは超絶的な唯一神とならざるを得ない。その神の性格は「旧約」の中で次のように語られる。

「我エホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代におよぼし、我を愛しわが誠命いましめを守る者には恩恵をほどこして千代にいたるなり」

こういう善惡の峻別、正統と異端のきわだつた対立は、その後永くヨーロッパ思想の原型となつてゆく。裁く神、嫉む神「ゴッド」は「絶対神」と訳すべきであつた。

日本の神話の中には、聖書のエホバに相当するような神はいない。勿論、祭りを要求するたつたりの神の類はないわけではない。しかし、それらは壮大な神話体系の中の全く部分的な脇役に過ぎない。大多数の神はすべて人格神であつて「祀られる神」であると同時に、自らも「祀る神」である。和辻哲郎博士は「日本倫理思想史」の中で、日本神話で活躍する人格神は「神命の通路」としての存在であると述べている。窮極のものは「神聖性の母胎」と

して無限定であり、流動する生命としてしか規定できない。絶対者を一定の神として対象化するとは、既に絶対者を限定する行為に外ならず、むしろ絶対神を持たぬところに日本人の宗教性の積極性を認めているのである。

従って、日本人の思想の中には、神と人との間の絶対的な断絶感はない。神聖なるものの通路として人もまた神となり得る存在である。神社神道の根源には、こういう人間肯定の大前提があるように思われる。神と人と自然の間は、日本人においては非連続ではなく連続である。暗い原罪意識によって、遠く隔絶されてしまった「神」の概念を、そのまま日本の神にあてはめるのは明らかに誤謬である。「天皇は神であった」ということは、決して天皇が絶対神であったことではない。歴史的に言っても、天皇は自ら「絶対神」であられたことはない。国民に面して、威圧し、君臨する「神」ではなく、国民の先頭に立って、祖神を祭られる存在であった。「五箇条の御誓文」には「我国未曾有ノ変革ヲ為サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立テントス。衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ」と述べられている。「天地神明」に誓うとは、神の意志に随順する姿勢である。この敬虔なお姿のどこに絶対神の影を見ることが出来るか。

天皇にとって、祖宗の「慰霊」と、その意志の継承が第一義のことであった。それは、可能なかぎり「無私」に近づき修練であるといえる。祭政一致という言葉は道学者たちの手垢

でうすよごれてしまったが、その奥にきらめく継承の意志のかがやきを忘れてはなるまい。支配被支配の力学が政治の論理であるという立場では天皇の問題は遂に解明できないのである。

御製——天皇のみうたは、天子の位にある「人」のこのころの表現である。歌の道が皇室に伝承されている事實は、天皇が終始「人間天皇」であつた事の何よりの証拠である。天皇の問題が常に機構、制度上の問題として論じられ、その位にある人のこのころが全く問題にされぬのは少くとも学問的な態度ではない。われわれは御製を通じて、天皇のみこのころに直接する体験を持つことができる。それによつてわれわれは、實際政治における役割や、憲法上の規定には関係なく、天皇のみこのころが一貫していることを知ることができる。否定や肯定の結論を出すことは、それからでも遅くはない。

集団のエネルギーを結集する最も手つとり早い方法は権力政治である。それは現代の世界に共通する一つの根強い風潮である。そして、権力政治はまた人間不信や疎外感——ニヒリズムを生み出す母胎でもある。この現代の政治悪を克服し、権力によらずして国民的エネルギーを結集する道はないであろうか。御製にふれる経験は、その可能性を暗示してくれる。われわれはかつての如く、御製を道徳的教誡の領域に封じこめてしまわず、このころとこのころがふれ合う芸術的共鳴を通じて、国民の一人一人が内発的な精神の昂揚を経験することを念

ずる。野心や我執を超えた權威に直結することなしには、現代の政治倫理の混乱は正さるべくもないからである。

### 明治天皇のみ歌

「こころ」の中の「先生」に「明治の精神に殉死する」と言わせた漱石が、明治天皇の崩御と乃木大将の殉死をどんなに大きな衝撃で受けとめたか、それは現代の我々の想像を遙かに越えたものであったと思われる。多くのひずみと錯誤を内包していたとはいえ、明治の達成は正に世界史的な事実であった。維新の変革を身を挺してくぐりぬけた綺羅星の如き重臣将星に鬱然と君臨し給うた明治天皇は、まさに大帝の名にふさわしい王者であった。あの歴史の昂揚の原動力は、天皇と国民の間に介在した網の目のような幕府の権力機構が崩壊して、天皇と国民の心が直結したことであった。御製に表現された天皇のみこころは、大帝という呼称に伴う偉大さのイメージとは対照的な、敏感にして繊細な波動を伝えるのである。そのことは、自然や人事に敏感に反応し得る心——詩人の心が、天皇の位にある人の必須の条件の一つであることを語っているのである。

明治天皇がそのご生涯に残されたみ歌の数は九万三千余首に上るといわれている。戦前その中の約一千六百首が公刊され、岩波文庫、新潮文庫に収録されていたが、今は絶版であ

る。昭和三十九年十一月三日を期して、明治書院から「新輯明治天皇御集」が刊行され、九千首に近いみ歌を拝読し得ることになった。当時の宮廷歌風に従って、その大部分は題詠であるが、題詠の持つ宿命的な制約をこえて情意が伝わって来るのは、民のこころを憶念し給う一途なみこころによるのであろう。前記「新輯明治天皇御集」の後記で、入江相政氏の語るところによれば、「歌会始の時にはいつもうなだれてお目を閉じて、披講される歌の一首一首に深い御感動をお示しになった」ということである。我々はその懐しいご人格をありありと想像することができるのである。今心にとまるみ歌の数首を静かに味わって見たい。

### 冬 泉

冬ふかき池のなかにもほとぼしる水ひとすぢはこほらざりけり（明治一八年）

凍てついた冬の中の噴水の姿であろうか。「ほとぼしる水ひとすぢ」という言葉は、おのずから抵抗を排して己れを貫徹する意志の姿を暗示している。比喩とか象徴とかいう意識的操作ではないが、緊張した精神の姿勢が自然に生み出した、凛々としたきびしい表現である。

### 燈

ともし火の影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山辺に（三六）

まばらに見えるともし火の下には人々の生きる営みがある。人のすめそうもない荒涼とし

た環境にあらがいながら生きてゆく人々の苦闘を偲ぶ痛切な情意が、「みゆるかな」という感動詞の中にこめられているのである。

樹間花

こずゑのみ人に知られて桜花こがくれながら散りやはつらむ（三七）

人知れず散ってゆく花にそそがれる無量の思ひは、又国を支えている名もなき民の苦闘を偲ぶ思ひにかようのであろうか。自然詠が同時に一つの思想詩でもあるという現象は、御製にしぼしば見られるところであるが、厳密な意味での私生活を持たれぬきびしいご日常が生み出す特殊な表現である。精神生活が常時公的なものによって占められている方のご苦勞がしのばれるのである。

原

山よりもさびしきものは限りなき荒野の原をゆく日なりけり（三八）

日露戦争中のみ歌である。おそらく現実のご体験をよまれたものであらう。この歌には天子の位にある「人」のさびしい心がにじみ出ている。英邁な多くの輔弼の臣がいたとはいへ、所詮は孤聳の生である。戦のさ中に、こういう静かなみ歌がある。「さびし」という言葉は、凡そ権力主義的な意志とは正反対の心の表明である。天皇のみこころは、西洋流の「権力」の概念と最も遠いところにある。

をりにふれて

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて（三九）

ともし火の影に民のいとなみを偲び、樹間の花に名もなき民の苦闘を偲ばれるこまやかなみ心に、日露戦争の犠牲者のことがどれ程大きな苦痛であつたか、想像に余りがある。「思ふかな」という単純な表現は、かえつてその裏に無量のなげきがこめられているのである。戦死者の一端なまごころが、まっすぐに天皇のみ心に攝取されて行くすがたが、このさりげない一首に表現され、心が清められるのである。

月 前 薄

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすきが原の秋の夜の月（四〇）

月光にゆらぐ薄の波動を目で追いながら、風のゆくえを追っておられるこまやかな、敏感なお心がじかに感じられるようなみ歌である。題詠ではあつても、過去の属目の体験が正確に再現されるところに御製の特色がある。堂上派流の類型歌とは全く違った生きた情意の表現があるのは、遊戯的な概括をゆるさぬきびしいご生活が背後にあつたからであらう。

水 辺 夏 草

たかがやの風にかたよるひま〜にひとすぢみゆる水のすずしさ（四一）

このみ歌は正確な写生に基づいた繊細な表現である。風にゆらぐ夏草の間から見える一す

ぢの水の流れを「すずしき」と表現されたところに、清冽なものを希求されるみ心が、自然の美しさにふれた一瞬の感動がこめられている。カ音、ヒ音、ミ音のくりかえしが、すがしい韻律を創り出している。多年の歌道のご修練が生み出したすぐれた自然詠である。

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり（四一）

このみ歌は、日露戦争のさ中に作られた「ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにに心をなぐさめてまし」のみ歌と共に、歌についてよまれたものの中で忘れられぬものである。歌はたわむれにする小手先の技巧ではない。身心を消耗する激しいご政務の中で、心を晴らす唯一のなぐさめであったと拝される。三十七年の作歌数からいうと、平均一日に二十首強をお作りになったことになる。このおびただしい数は、天皇が自らに課せられた一つの強制でもあったのであろう。歌会始に、うつむいて目をとじ、民の歌の一首一首をかみしめるように聞いて居られたというお姿、それは人の「まごころ」に心から感動されるお姿に外ならない。御製の中に「誠」「まごころ」が繰り返しうたわれていることは天皇のご生活が「無私」への不断の修練であったことと思ひ合わせて、天皇政治の厳肅さに今更のように衿を正す気持にさそわれるのである。

虫

ひとりして静かにきけば聞くままにしげくなりゆくむしの声かな（四二）

### 虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは（四四）

時をへだてて作られた二首であるが、共に「虫」を詠まれたものである。この二首とも、題詠の制約をこえた、天皇ご自身のご体験の正確な表現である。心を澄まして聞き入っていると、次第にしげくなってゆく虫の音に、残された秋を精一杯に生きているはかない「いち」に対するいとしみの心がひしひしと湧いて来る、というのが最初の歌の意味であろう。二首目は鳴きしきるさまざまの虫の音に、生きんとするものの訴えを聞き分けておられるのである。いつも国民の上に心を通はして居られる方の広やかな「おもひ」が、「いきとしいける物のおもひ」を正確にうけとめて居られるのである。それは「生きむとする意志」に対する激しい共感と同情の心の表現なのである。

### 紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな（四四）

微妙にうつろいゆく自然の一瞬の美しさの表現である。散る寸前の紅葉は自然のいのちの最後の残照である。古来職業歌人たちが、その美しさを表現するために彫琢の技を競ったところである。しかし、晩秋の碧い空を背景にした紅葉の形容を絶した美しさは、御製におい

ては「うつくしとのみ思ひけるかな」と表現されている。この素朴な、うちつけの感動の表現。数多いみうたの中で忘れられぬ強い美しい印象を与える名歌である。

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ（四四）

冒頭にかかげた「冬泉」のみ歌が、ある鮮烈な意志のイメージを与えるように、岩を穿つて流れゆく水には、やはり一つの持続的な意志を感じさせるものがある。このみ歌も、そういう意味で一つの思想詩である。列強の激しい攻勢に抗して、国民の心を一つに統べ治めつつ、苦難の道を開いて来られたご自身のご体験が、自然の形象の裏に息づいているのである。

をりにふれて

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ（四五）

このみ歌は自らを高きに置いた教誡の歌ではない。むしろ自らをいましめて居られるみ歌である。四十五年といえは崩御の年であるが、あれほどの偉業をなしとげ給うた方にして、なお自己を激しく叱咤するこういうみ歌があるのである。停滞をゆるさぬ求道精進のご生涯を思い、このみうたに思いをひそめるとき、明治という時代のきびしさと、天皇が背負い給うた運命の大きさに涙を催すばかりである。

## 今上天皇のみ歌

明治が国運の上昇期に当る栄光の時代とすれば、昭和はまさに大きな悲劇の時代だといえる。「西洋」という異質文明の受容の総決算が八月十五日の悲劇的な大敗北であった。「終戦の詔書」で「帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非常ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク」と言われたご心情を思えば、積年の思想的混乱の結末の大きさに暗澹たる思いに駆られざるを得ない。

今上天皇にはまだまとまった「御集」はない。今までご発表になったみ歌は約二百八十首ほどある。あの惨烈な戦後の荒廃から立ち上るために、陛下のご存在が如何に大きな働きをしたか、後世の歴史家は正確に記録しなければならぬ。明治天皇と今上天皇はご性格の違いもあるうし、み歌の表現法もかなり違う。しかし、「位」が継承されることは、「みころ」が継承されることであることを具体的な例が示してくれる。

明治天皇に「燈火」のみ歌があったが、今上天皇にも次のようなみ歌がある。

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる（昭和三二年）

東京の国民体育大会

をとめらがをどる姿は見えずして振るともし火の光るこの宵（三四）

熊本の宿にて

人々のつらなりて振る燈火を窓越しに見るゆく秋の夜に（三五）

陛下が自らふられるともしびと、国民が手に手にうちふるともしびと、ともしびによって君臣のところがにぎわしく通い合う。これらのみ歌をよんでわき起る忘我の感動は、やはり曇りない天皇のみこころよってのみ与えられるものである。ともしびのかげに一人一人の国民の姿を具体的に思い描かれているという点では明治天皇のみ歌から一貫したものが継承されているのである。

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそ祈れ神のひろまへ（六）

天皇のご治世は、自らのものではなく、祖宗の委託であるという意識は蔽として守られている。「世を祈る」という表現にこもる敬虔な精神の姿勢をかりそめに読みすぐすべきではない。

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり（二〇）

戦争末期、国歩艱難をきわめた年の歌会始のみうたである。きびしい風霜にさらされてひ

たすらに「世を祈り」ます厳肅悽愴な調べに、破局の前夜の緊迫した危機感をひしひしと感じさせるみ歌である。

花みづきむらさきはしどい咲きにほふわが庭見ても世を思ふなり（二二七）

平和が訪れ、花水木やライラックの咲き匂う季節となった。そんな時でもやはり「世を思ふ」お気持は忘るべくもないのである。

引揚者に対して

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ（二二四）

香川県大島療養所

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば（二二五）

二首、詠まれた時期も対象もちがうが、天皇のお心がこれほど痛切に、直接に表現されたものはない。一首目の「ただ待ちに待つ」という表現はむしろ肉親の情なのである。敗戦によって異郷にとり残された国民の苦悩が、陛下には耐えがたかったのである。戦後の混乱の収まらぬあの時期に、肉親以外の誰がこのような哀切なことばを言い得たであろうか。二首目は瀬戸内海を航行するみ舟にむかって旗をふる人の姿を見て作られたものである。病む「人の心」を「いかに」と憶念し給い、その悲しい宿命を「あな悲し」と打ちつけに表現されたのである。このみ歌について夜久正雄氏は「第一句『あな悲し』は源実朝の『いとほし

や見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる』を思い出させる一句切の手法で、顧慮もなくじかにうちつけに心情を吐露するのである」(明治書院刊「歌人・今上天皇」と述べている。卓見であると思う。

八月十五日那須にて

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる (三〇)

千鳥が淵戦没者墓苑

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる (三四)

二首ともに「胸せまりくる」という言葉で終っている。前者は終戦記念日に十年前を回想なさった歌であり、後者は戦死者の上を偲ばれたものである。悲しみの深さは「胸せまりくる」という一句につくされている。それにしても、大東亜戦争が陛下のみこころに与えた傷の深さを思い知らされるみうたである。なお、同じ一句を末尾にもった歌がもう一首ある。

佐渡の宿にて

ほととぎすゆふべききつつこの島にいにしへ思へばむねせまりくる (三九)

言うまでもなく、承久の乱によって、佐渡に配流された順徳院を偲んで居られるのである。七百年昔の歴史が、いまのうつつにみ心に生きているのである。

貞明皇后を偲ぶ

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひ出でらる（二六）  
冬すぎて菊桜咲く春になれど母の姿をえ見ぬかなしさ（二七）

伊豆西海岸堂ヶ島にて

たらちねの母の好みしつはぶきはこの海の辺に花咲き匂ふ（二九）

軽井沢にて

ゆふすげの花ながめつつ楽しくも親子語らふ高原の宿（三〇）

始めての皇孫

山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母はゆく（三五）

こういう肉親恩愛の情の表現は明治天皇の御製にはなかったものである。初めの三首は貞明皇后を偲ばれたものであるが、四季折々の風物にふれて母を偲ぶ心がのびのびと表現され、人間天皇の思いが温かく伝ってくる。四首目の団欒のおよろこびや、五首目の美智子妃殿下と浩宮様を詠まれたみ歌には、背景のとりどりの花とともに、やっと陛下に訪れて来た一ときの安らぎの思いがある。

九州地方視察（五首中の一首）

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり（二四）

室戸にて

室戸なる一夜の宿のたましだをうつくしと見つ岩間岩間に (二二五)

谷かげにのこるもみち葉うつくしも虹鱒をどる醒井のさと (二二六)

これらの自然のみ歌には、すべて「うつくし」という言葉がつかわれている。自然の美に素直に敏感に反応される、まどかなご人格そのままの表現である。しかし、これらのみ歌はすべて巡幸という公的な行事の中で作られているのである。「国のつとめ」は一日の停滞もゆるされないのである。

鳥

国のつとめはたさむとゆく道のした堀にここだも鴨は群れたり (四〇〇)

四十年歌会始のみ歌である。

われわれの天皇はこういうみ心の持主である。み歌からまっすぐに伝ってくるものと、天皇制権力、絶対主義、専制君主などの語感とは何とというへだたりがあるのだろうか。もしみ歌から来る実感と、天皇についての既成概念との間に架橋のできぬほどのずれがあるならば、もう一度一切の既成概念を洗い流したところから、天皇の問題を考え直すべきではなからうか。まして、天皇を十重二十重にとりかこんでいるどぎつい定義づけは、すべて異国で作られた日本革命のテーゼによるものではないか。われわれの父祖が、いのちをかけて守つ

て来た「価値」よりも、マルクス主義の定義の方が何故信用に価するのだろうか。

和歌の創作によって、われわれは歌は心の姿勢の正確な反映であり、虚偽は直ちに表現の  
ひずみとなって表われることを学んだ。その体験が間違いないとすれば、われわれは天皇の  
み歌に表現された、天皇のまごころを信ずることができる。こういう心を持った方を長く仰  
いで来た日本人は、国民として実に幸福ではなかったであろうか。憲法の規定が、統治大権  
の総攬者から「象徴」にかわっても、天皇のみ心は少しもかわってはいない。無関心である  
のは国民の方で、天皇のみ心はいつも肉親のような切実さで国民の上に注がれている。われ  
われはそれを確認し、生きる喜びを実感するためにも、御製を読むという体験が一人でも多  
くの国民に浸透してゆくことを念ずるものである。(福岡県立若松高等学校教諭)

吉田松陰

「講孟餘話」

小柳陽太郎

十月廿七日。存心の筆也。  
此は、思案の、出さる。  
久不きく、中書。  
婿、く、る、る。

生きてゐることは  
聖賢におもねらず  
仁義の説と利の説  
永久の良図  
俗情の世界  
道を聞く悦び  
逆境を語る

カット 吉田松陰先生絶筆

「十月廿七日呼出の声をききて 矩之  
此程に思定めし出立をけふきくこそ嬉しかりける」

講 孟 餘 話

第二場 六月十八日

梁惠王上 首章

○ 王何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義あるのみ

案するに、魏の武侯二年、安邑に築く。其の子恵王三十一年、秦、商君を用ひ、東に侵し河水に至る。安邑は秦に近き故、徙りて大梁に治す。三十五年、礼を卑ひくうし幣を厚うし以て賢者を招く。而して孟子梁に至る。魏の時事大略斯くの如し。此の時恵王首として国を利することを問ふ、亦志ありと云ふべし。而して孟子是れを挫くくものは何ぞや。蓋し仁義は道理のなすべき所なり。利は功效の期すべき所なり。道理を主とすれば功效は期せずして自ら至る。功效を主とすれば道理を失ふに至ること少からず。且つ功效を主とする者は、事皆苟こう且じよにして成遂せいすいする所あること少なし。假令たとひ少しく成遂する所ありとも永久を保するに足らず。永久の良図を捨てて目前の近效に従ふ、其の害言ふに堪ふべからず。苟も能く一向に義理の当然を求め、終始なく作輟さくてつなき時は、又何ぞ事の成らざるを憂へん。孟子恵王の利心を挫くも亦是れが為めなり。是れ諸葛武侯の所謂「鞠躬きくま尽力」死して後已む。成敗利鈍に至りては則ち臣の明かに能く逆觀ぎやくくする所に非ざるなり」の義なり。是れ道学の根元、先賢の論ずる所備はれり。今必ずしも贅せず。

今且しく諸君と獄中に在りて学を講ずるの意を論ぜん。俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る。

復た人界に接し、天日を拝するの望みあることなし。講学<sup>せつがく</sup>切磨<sup>きり</sup>して成就する所ありと雖も何の功效かあらんと云々。是れ所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず。人心の固有する所、事理の当然なる所、一として為さざる所なし。人と生れて人の道を知らず。臣と生れて臣の道を知らず。子と生れて子の道を知らず。士と生れて士の道を知らず。豈に恥づべきの至りならずや。若し是れを恥づるの心あらば、書を読み道を学ぶの外、術あることなし。已に其の数箇の道を知るに至らば、我が心に於て豈悦ばしからざらんや。「朝<sup>あした</sup>に道を聞かば夕<sup>ゆふべ</sup>に死すとも可なり」と云ふは是なり。亦何ぞ更に功效を論ずるに足らんや。諸君若し茲に志あらば、初めて孟子の徒たることを得ん。

抑々近世文教日に隆盛、士大夫書を挾み師を求め、兀々<sup>こつし</sup>孜孜<sup>し</sup>たらざるはなし。其の風懿<sup>い</sup>美と云ふべし。吾が輩獄中の賤囚、何ぞ喙<sup>くちばし</sup>を其の間に容るることを得んや。然れども今の士大夫、学を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが為と官を得んが為とに過ぎず。然れば功效を主とする者にして、殆ど義理を主とする者と異なり。思はざるべけんや。嗚呼、世に讀書人多くして真の学者なきものは、学を為すの初め、其の志已に誤ればなり。精を励ますの主多くして真の明主なきものは、治を求むるの初め、其の志已に誤ればなり。真学者、真明主出づるに非ざれば、僅かに順境を語るべくして、未だ逆境を語るべからず。吾が輩逆境の人、乃ち善く逆境を説くことを得るのみ。癸丑・甲寅魯墨の変、皇国の大体を屈して陋夷の小醜に從ふに至るものは何ぞや。朝野の論、戦の必勝なく、転じて変故を激出せんことを恐るるに過ぎず。是れ亦義理を捨てて功效を論ずるの弊、與に逆境を語るべからざる者に非ずや。世道名教に志ある者、再思せよ、三思せよ。

## 生きていくとは

戦後しばらくの間、吉田松陰という人は最も国粹的な人物として全く問題にされなかった時代がつづきました。近頃はそうした風潮も次第に収まって来たとは言え、幕末の危機を生きた一個の風雲児として、或は革命児としてだけ吉田松陰を評価しようとする傾向は依然として根強いのです。何か華々しい颯爽とした風貌とラディカルな行動力、それが吉田松陰をはじめ、歴史に名をとどめている所謂「幕末の志士」のイメージとなっているようです。勿論そうした一面がこれら先人たちになかったとはいえない。しかし単なる行動の面からのみすれば、もっと尖鋭な生き方をした人もいた筈です。なのに私達はどうして吉田松陰や、平野国臣や、久坂玄瑞を維新の先駆者として大切にするのか、それにはさまざま理由がありましょうが、そのなかでも特に心にとどめていただきたいのはそれら先人の「ことばが生きていた」ということです。それはすぐれた考えをもっていたということとは一寸と違う。国を思い親を思い友を思う、その一つ一つの言葉が潑瀾と躍動して僕らの胸をうつ。その生きた言葉を残しえた人として私達はこのような先人を仰ぐのです。

そういう意味で吉田松陰という人物を理解するためには絶対に文献に当らなければいけない。生きた言葉を直接に味わうことなしには、たとえ松陰先生の業績をいくら調べあげてみ

でも結局は、先生の真価を理解することは出来ない。そのことを最初に深く心にとどめておいていただきたいと思います。

### 聖賢におもねらず

さてこの講孟餘話という書物を先生が書かれたのは安政二年（一八五五）、先生が下田で米船にのりこもうとして失敗し、捕えられて萩に送られ、野山獄に入れられた、先生にとつて最も劇的な事件がおきたその翌年です。獄といっても現在の刑務所とは違って、どれほどの期間、刑に服しておれば陽の目が見られるという規定もない、実に陰惨な感じの獄だったのです。しかも先生が獄に入られた時、先生の年齢は二十五才、すでに獄に入っていた人は十一名いるのですが、すべて先生より年長です。一番年の多い人は七十五才、一番若い人も三十五才、その間にあって先生は僅か二十五才、こういう環境の中でその翌年、自分より遙かに年の多い囚人たちを相手にして先生は孟子の講義をはじめられるわけです。この暗い牢獄の中で皆は襟を正して、最年少の松陰先生の講義を聞く、その光景は想像するだけでも異常です。その異常を断じて行うところに先生の、すさまじい気魄がある。その心の力の大きさに、私達はまず注目しなければならぬと思います。

孟子の講義をはじめられたのは四月十二日、それが六月十日に終ります。そのあとふた

たび一節一節をとりあげて講義し記録されたのが、この講孟餘話です。その第一日は安政二年六月十三日、この日に先生は「孟子序説」について講義をされる。その冒頭に次のような言葉が出てまいります。

「經書を読むの第一義は、聖賢に阿おもねらぬこと要かなめなり。若し少しにても阿ねる所あれば道明らかならず、学ぶとも益なくして害あり。」

「經書」というのは中国の古典で、論語とか孟子とか、人生の指導書というべきもの、その經書を読む際に最も注意しなければならぬことは、聖人の言葉におもねらぬことである。ただ無条件に、何の批判も加えずに聖人の言葉に盲従してはいけなと言われるのです。これは誤解がないようお願いしたいのですが、あらゆることについてただ批判の目を光らせよということではない。そうではなく、独立独歩の、潑刺たる思想生活がこちらに用意されていないならば、どんなに經書を読んでも、本当に自分のものにはならないということだと思えます。同じ第一場の終りに「我れ孔孟を起して、与ともに此の義を論ぜんと欲す。」という言葉がある。松陰先生は孔子や孟子のまなざしをはっきり意識しておられます。書物をよむときは、生きた目で相手の目をみつめていなければいけない。こちらが生きておれば、読書の対象である相手も生きてくる。生きた目と生きた目が火花を散らす。そうでなければ本當の学問は出来ない。「聖賢に阿ねらぬ」ということの意味はこのようなことであろうかと思ひ

ます。これから孟子の講義をつづけていく、その基本的な姿勢がここに明示されているのです。

### 仁義の説と利の説

では本文にはいつていきます。ここで一緒に読んでいくのは、先程述べました冒頭の講義から五日経った六月十八日、孟子の梁恵王という巻の上巻、その第一章の講義の部分です。ご覧になる通りずいぶん難しい文章です。しかしこの書物を書いた松陰先生は僅かに二十六才、皆さんとそう年齢のへだたりはないはず。しかもこの書物が書かれたのはわずか百十年さかのぼるだけです。ところが現在、そのことが実に難しいものになってしまつた。これは大変なことです。伝統を継承するというけれども、それは結局ことばを継承することです。ことばを別にして伝統はあり得ない。いかに難しい言葉でも、是が非でも、その壁を破って直接、松陰先生の言葉の息吹きにふれていただきたい。そういう努力なしには私達は歴史や伝統を語る資格がないとさえ言えると思ひます。

一番はじめに次のような言葉がある。

「王何<sup>ゾ</sup>必<sup>シモ</sup>曰<sup>ハント</sup>レ利。亦<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>ニ仁義ニ而已矣。」

これは孟子の本文です。孟子が梁の国の恵王に呼ばれて行ったとき、恵王が「叟<sup>そう</sup>、千里を

遠しとせずして来る。また將まさに以て吾が国を利することあらんとするか」と言った。先生は随分遠いところからきていたのだ、きつと何かわが国に利益をもたらしていただけたと思えます。——その時孟子はその出鼻を挫くように、何をおっしゃいますか。どうして利ということにこだわる必要があるでしょう。また、この「亦」というのは「この場合もまた」という意味でしょうから、あらゆる場合がそうなのだが、ここでもやはり、仁義ということを考えてさえいれればいいのだと突っぱねるように言うわけです。さらに孟子はたみかけるように、世の中が「利」という基準で動いていくと、如何に国の中が乱れてしまうか、その道筋を鮮やかに説き進んでいくのですが、ここでは省略します。

さてこのあと松陰先生の講義にはいるわけです。「案ずるに、魏の武侯二年、安邑に築く。」武侯は安邑に城を築いたが、東には齊、南には楚、北には趙、西には秦という強国にとりかこまれている。ところが武侯の子恵王の三十一年、秦は商君という人を使って、東の方に勢力を拡大する。「東に侵し、河水に至る」黄河のほとりまで攻めて来たのです。それで恵王は都を大梁というところに移したのです。しかしそれだけでは国は安定しない。それで梁の恵王(大梁に都した魏の恵王の意)は「礼を卑ひくうし、幣を厚うし」礼儀正しく、多くの賜り物を捧げて「以て賢者を招く」天下の優れた人を招いたのです。孟子はその一人として梁に行くわけです。

ここで一つ大切な言葉がある。「恵王首として国を利することを問ふ、亦志ありと云ふべし」松陰先生は恵王の質問がだめだとは言われないのです。孟子を迎えて直ちに国を利することを聞いた恵王もまた一かどの人物だといわれるのです。だが孟子がこれをきびしく批判したのは何故か。「而して孟子是を挫く者は何ぞや」これから本論にはいるわけです。

「仁義は道理のなすべき所なり。利は功效の期すべき所なり。」仁義とは、人として当然ふみ行うべき道だ。これに対して利というものは効果をねらうものだ。すなわち価値判断の基準が違う。その場合、「道理を主とすれば功效は期せずして自ら至る。功效を主とすれば道理を失ふに至ること少からず。」これは実に面白いことばです。

孟子の言葉を一寸耳にすると利をしりぞけて仁義を主張している。すなわち孟子は理想主義者だという風に人々は考えたがる。しかし松陰先生はそういう概念的な見方はされない。道理と功效、それは相反する二つの概念でない。いわば道理は全体であり、功效は部分だと考えられるのです。全体と部分との、その筋道を正したのが孟子だと言われるのです。利がいけないのではない。利を問うた恵王も「亦志ありといふべし」なのです。ただ何が全体で何が部分かということとはしっかり押さえていなければいけない。私達は人生にとつて何が一番大切なものかということを見極めたら、それに自己の生涯をかけなければいけない。志を立てるといふのも結局はそういうことだと思ふのですが、恵王の言葉には、そのポイントを

おさえる力に欠けていた。孟子はそこをついたのです。孟子は決して世にいうような「理想主義者」ではなかった。ここが大切なところだと思えます。

### 永久の良図

「且つ功效を主とする者は事皆苟且こうしよにして成遂せいすいする所あること少し。」苟且こうしよというのはかりそめ、しばらく、まにあわせという意味です。功效——利を中心にして考えたとすべものものが「まにあわせ」になつてしまふ。だから最後まで成し遂げることがない。「假令たとひ少しく成遂する所ありとも永久を保するに足らず。」たとえ、少々成しとげたとして、それは永久を保証出来ないといわれるのです。ここで「かりそめ」ということと、「永久」ということをよく考えていただきたい。私たちは二つのものをならべてどちらが正しいのだろうかとよく考える。しかしそういう判断よりむしろ、どちらが永久に持続できるのだろうか。かりそめなのだろうかという風に考えた方が、物事の本質が一層よくわかってくるのではないかと思うのです。先ほどから社会主義革命の問題がいろいろ論議されておりますが、このような問題でも、これと同じことが言えるわけです。すなわちそのような主義の誤りはある激情にまかせて、あるところまでわあつといくけれども、そのあと日本の国はどうなるかという「永久の良図」というものをもたないところにあると言えるのです。「永久の良図を

捨てて目前の近效に従ふ、其の害言ふに堪ふべからず」まさしく松陰先生の言の通りです。

現在の思想の誤りは、すべてこの「目前の近效」に従うところから生まれている。ことに戦後は、敗戦時の歴史の断絶感をともなつて人々は文字通り目の前の生活の安定しか考えることが出来なくなつた。例えば現在の日韓問題でも、ヴェトナム問題でも、そのような国際情勢に対して政治家が下す判断はすべてが彌縫策だといつても差支えない。そこには永久の良図としての国策はなく、間にあわせの議論だけが横行しているのです。それは何も政治ばかりではない。学生生活においても、人の一生においても、ただ目前の障壁をのり切る、波瀾を防ぐということだけを考へてその日その日をすごしていく。そこにはさわやかな人生の見通しというものは殆んど見られないのです。

こういうことをずっとつきつめていくと、僕らは一生を送つて最後には死んでいくわけですが、現代の人々はその死ということを考えようとしません。生の側だけ、そこにだけ関心が集中する。生死を貫いて流れていくもの、そういうものに対する感覚が今の時代には何か麻痺しているように思ふのです。自分の一生でできなかったことを子孫に伝えるとか、百年、二百年単位でものを考へるといふことが出来なくなつてきている。「永久の良図」という言葉に關連してそんなことを痛切に思ふのです。

松陰先生の言葉はさらにつづきます。「苟も能く一向に義理の当然を求め、終始なく、さくつ作輟

なき時は、又何ぞ事の成らざるを憂へん。」いやしくも人間の生きていくべき道をひたすらに求め、終始一貫、作なしたり、輟やめたりすることなく、事をおしすすめていけば、どうして事が成就しないことがあるうか。松陰先生はこの「作輟」ということを非常にきびしく批判されています。その反対は「持続」です。持続のないところに文化はない。思想はない。持続していくこと、志を貫くこと、その前には成就しないものは何一つない。そのことを松陰先生は常に確信をもって述べておられるのです。

「是れ、諸葛武侯の所謂『鞠躬きくまう尽力、死して後已む。成敗利鈍に至りては則ち臣の明かに能く逆げ観する所に非ざるなり。』の義なり」諸葛武侯とは三国時代、蜀の劉備に従った諸葛孔明のことです。この孔明は、絶大な信頼をうけていた劉備が死んだあと、二世皇帝を抱いて蜀の国を建て直すために必死の努力を傾ける。その時北から攻めて来た魏と戦うために軍隊を出すのですが、その時の皇帝に対する遺言の書、それが有名な出師しの表です。これは前後二つあるのですが、松陰先生が引用された言葉はその「後ノ出師表」の中にあるのです。その言葉の意味は「身をかがめ、慎み深く死ぬまで力を尽すだけだ。それで事が成るか成らぬか、或は幸運が訪れるか否か、それはもう自分が逆観する——あらかじめ、前もって察することは出来ない。それは自分の力の限界を越えたものだ。」ということですが、今自分が言おうとしていることはその諸葛孔明の気持と全く同じである。これが道学の根元である。

「先賢の論ずる所備はれり。」このことについては数多くの先人が論じているし皆よく知っているだろう。「今必しも贅せず」今は必ずしもこのことについてとやかく詳しく述べる必要はあるまい、というのです。

道学の根元というのは非常に強いことばです。学問をするときには根が必要で、根のない学問はすぐ崩れてしまう。しかし現在の学校生活ではこの根というものをどこにおくかということはなかなか教えてもらえない。一体学問の根はどこにおいたらいいのか、この合宿教室の重大な課題がこのようなところにもあるかと思えます。

## 俗情の世界

ここで松陰先生は一応問題を打ち切って、牢獄の中にあつて学問を学ぶという意味について考えてみたいと論をすすめられるのです。「今且らく諸君と獄中に在りて学を講ずるの意を論ぜん。」さて「俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る。復た人界に接し、天日を拝するの望あることなし。」最初に述べました通り、一度獄に入った者はふたたび人間の世界に帰って行くことは出来ないかもしれない。あるいはこのまま牢の中で朽ちていかなければならないかもしれないのだ。「今已に囚奴となる」もうみんなとらわれの身となつてしまったではないか。だから「講学切劇して成就する所ありと雖も何の功效かあらん」劇は切と同じく

迫るといふような意味です。一所懸命に学問をやつて、そこで何かをやりとげたといつても、何の役に立つだろう。世の中に出て自分たちのやつてゐることが認められるわけでもないし、われわれはこのままここで死んでいくだけだ。近頃のことばでいえば一種の限界状況に立っているのです。われわれは一体何のために勉強しなければならぬのか。「俗情をもつて論ずる時は」実にばかばかしい限りです。だがこれは「利の説」である。「仁義の説に至りては然らず」と松陰先生は断言されるのです。

今私たちはここで国の現状を憂え、どうにかしなければ日本は亡国の淵に立つと嘆いてゐる。しかしここに集る者は僅かに二百名、その二百名がいくら火の玉みたいになつても日本の世の中がよくなるはずはない——しかし松陰先生はこれを「俗情」と言われる。「仁義の説に至りては然らず。——」

俗情というのを一口に言つと、自分を中心にして考えること、自分を甘やかすことだと思つてゐます。自分を中心に考えてゐる間は、常に効果だけを計算する。それでは本当の力は沸くはずはありません。自分を投げ出したとき、その刹那にはかりしれない力がわくのです。岡潔先生の言葉をかりれば「命が目をさます」のです。俗情を去るとはそういうことだと思つてゐるのです。その刹那の喜び、或は厳肅な感激というようなものが、孟子の講義をしておられる松陰先生の胸の中を、はげしい勢でつき動かしたにちがいない。「仁義の説に至りては然ら

ず」という言葉が実に堂々と出てくるゆえんです。

### 道を聞く悦び

「人心の固有する所、事理の当然なる所、一として為さざる所なし」人の心にもともと備わっているもの、ものごとくに当然備わっている道理、そういうものは一つとして發揮しないではすませないはずだ。それを具体的に言えば「人と生れては人の道を」「臣と生れては臣の道を」「子と生れては子の道を」「士と生れては士の道を」知ることなのです。もしそれを知らないで過ごすならば、「豈恥づべきの至りならずや」何と恥ずかしいことではないか。皆さんは大学生だ、その大学生としての責務に目ざめ、学生生活の意義をきわめること、それが現代における「士」の道であると考えます。ともあれ「若し是を恥づるの心あらば、書を読み、道を学ぶの外、術あることなし。」ここでは「恥づ」という言葉に注意して下さい。恥ずかしいという感覚、それは、正しくないから、法にふれるからだめだということとは違った、もっと根源的な人生体験に根ざした感覚です。

さて「已に其の教箇の道を知るに至らば、我が心に於て豈悦ばしからざらんや」何とうれしいことではないか。「『朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり』と云ふは是なり。」この論語の言葉は有名ですね。有名だけど又改めてこうして読んでみると今更のようにそのすばら

しさが胸をうちます。うっかりよむとただ道を聞くことのよろこびが書いてあるとしか感じない。しかし孔子は「死すとも可なり」と言っている。孔子の人柄から考えてこれは誇張ではあるまい。すなわち孔子は道を聞くのは命がけだと言っているのです。自分の命を別にして学問をしているということがいかに他愛ないか、身にしみて思われます。書物を読むときにはこのような細かなところに心を配らなければいけません。例えば前の「悦ぶ」ということば、これもただすつと読んでしまえばそれだけです。しかし私達はここで先生が味わわれたほどの喜びを果して一度でも味わったことがあるだろうか、ということに思いをいたさなければなりません。同じ「悦び」という言葉で表現されているけれど、松陰先生の「悦び」も孔子の「悦び」も、私達の「悦び」に比べれば遙かに深いはずです。私達はそれら先人の「悦び」をさながらに体験することは出来ないかもしれない。しかしそれを偲ぶことは出来る。私達はそのような先人の心を偲びつつ、心を鍛えていく、深めていくということをし、書物を読むときには常に心にとどめていなければいけないと思えます。

もう一つ「聞く」ということばにも注意していただきたい。道というのは「知る」のではなく「聞く」ものなのです。「知る」という低いレベルでは道を体得することは出来ない。やはり聞かなければいけないのでしよう。聞くためには全身を集中してジッと耳を傾けなければいけない。

△しきしまのやまとことばはうつそみの目には見えねど耳にきくべし▽

こういう先人のうたがありますが、心を一つに集めて、かすかに動くものを聞きわけなければいけない。丁度言葉の美しさを聞きとるように。

「『朝に道を聞かば夕に死すとも可なり』と云ふは是なり。亦何ぞ更に功效を論ずるに足らんや。」もうここまでくればどうして効果というものを論ずる必要があろう。「諸君若し茲に志あらば、初めて孟子の徒たることを得ん。」ここに志をたてるならば、初めて孟子を学ぶ資格があるだろうというのです。「抑々近世文教日に隆盛、士大夫書を挟み、師を求め兀々孜々たらざるはなし。」実によく励んでいる。「其風懿美と云ふべし」懿は美と同じくうるわしいということです。「吾輩獄中の賤囚、何ぞ喙を其の間に容るることを得んや」つまらない囚人たる自分が、どうしてそれに対してあれこれ言うことが出来るだろうか。「然れども今の士大夫、学を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが為と官を得んが為とに過ぎず。」名と官、それがすべてだということです。現在の学校の風潮と実によく似ている。「然れば功效を主とする者にして、殆んど義理を主とする者と異なり。」皆は効果だけを、利だけをねらっている。「思はざるべけんや。」この問題によくよく心をこめないではおられないはずだ。

## 逆境を語る

「嗚呼、世に読書人多くして、真の学者なきものは、学を為すの初め、其の志已に誤ればなり。精を励ますの主多くして真の明主なきものは、治を求むるの初め、其の志已に誤ればなり。」真の学者なく、政治家なきは、その初めに志がすでに間違っているからである。

「真学者、真明主出づるに非ざれば、」すぐれた学者、政治家が出るのでなければ「僅かに順境を語るべくして、未だ逆境を語るべからず。」このことばはすばらしいと思います。私達は一般的な交際ではお互いに表面だけをつくらうって生きている。お互いに弱味を見せないで、きれいごとですましていく。そして本当に深刻な問題はいつも心の奥深くかくして人に見られないようにしているのです。政治家でも同様で、深刻な日本の現状というものにふれようとはしない。ただひどくお目出たい演説が政治の表面を流れていくだけです。こういう上っ調子なムードでは人々はただ「順境」を語るだけ。人生の、或は国家の直面した悲劇というものを真正面からみつめ、心の中からふり絞ったような言葉を交わすことは到底考えられません。政治家も教育者もすべてをふくめて、現代ほどまごころのこもった真率な言葉を聞くことが出来なくなった時代は稀でしょう。こういう世界を先生は「未だ逆境を語るべからず」と言われるのです。

「吾輩逆境の人、乃ち善く逆境を説くことを得るのみ。」自分はすでに自分をごまかすことの出来ない場所に立っている。そういう自分の目には、世の浮薄な風潮が手にとるようになるのだ。

「癸丑、甲寅、墨魯の変、皇国の大体を屈して陋夷ろういの小醜せうしに従ふに至る者は何ぞや。」癸丑とは嘉永六年、この年より二年前、ペルリがはじめて浦賀に来た年です。甲寅はその次の年、安政元年で、和親条約が締結された年です。「墨」はアメリカ、「魯」はロシア、そういう外国の軍艦が日本の周辺にあって非常に危機が切迫した時代です。そういう時に、日本の尊い国柄をまげて、あの醜い夷狄の意のままになってしまったのは一体何故か。「朝野の論、戦の必勝なく」政治の中枢にある人も、そうでない人も、戦って勝つという自信がないし「転じて变故を滋出せんことを恐るるに過ぎず」思ったことをずばりとやつのければ、どんな問題が続出するかわからないと、ただそれを恐れているだけではないか。「是亦義理を捨てて、功效を論ずるの弊」ここで孟子の言葉が蘇ってくるわけです。結局は効果だけを考えているからこういうことになるのだ。「與に逆境を語るべからざる者に非ずや。」日本の悲劇を正面から見つめる勇氣と、ひたむきな氣持がないから、そしてそういう心をお互に通わせ合う努力がなされていないからこういうことになったのだ。「世道名教に志ある者、再思

せよ、三思せよ。」この世の教育、あるいは思想というものに深く関心をもつ者は、二度も三度も、くりかえし、くりかえし考えて、問題の本質を見究めるべきではないか、「再思せよ、三思せよ」という実に力強い言葉でこの講義は閉じられるのです。講義が終った時の先生と、それをとりかこむ囚人たちの眼のかがやき、それを心をこめて偲びたいと思います。

最後に一言申しておきたいと思いますが、こうして古典を読んでいくことは、それまで漠然としていた知識を次第に深めていくことだと一般には考えられています。しかし私はむしろ問題は逆だと思ふ。例えば皆さんはこれまで吉田松陰という人物に対しては一応の認識をもっておられたと思います。だが、ひとたび先生のことばにふれると、それまでに築き上げていた認識なり概念なりというものは、文字通り木っ葉微塵に吹きとんでしまうのです。だから「わからなくなった」「收拾出来なくなった」という感想をもたれてもちつともかまわないので、むしろその方が本当の書物の読み方であろうと思ふのです。頭の中で出来上っていた概念がガラガラと音をたてて崩れるときに、そしてその真底から波うつ人の心、情意というものがいきいきとした形であらわれてくるときに、本当の学問は出発する。そのことを松陰先生のことばにふれた機縁によくよく考えていただきたいと思ひます。

(福岡県立修猷館高等学校教諭)



合  
宿  
歌  
集



## 《短歌の創作について》

時間の都合で簡単に申し上げます。「新しい学風を興すために」第一集に「合宿教室における短歌創作」という項目があり、「短歌の哲学と技術」という私の講義の記録があります。これは大げさな題ですが、要するに短歌の原則と作り方というぐらいの意味です。それに続いて創作と批評も収録してありますので参考にしてください。第二集にはそれを補う意味で「表境と思想」という拙稿があり、又山田先生が正岡子規の「歌よみに与ふる書」の解説を書いておられます。「歌よみに与ふる書」は岩波で絶版になっているので、先年国民文化研究会で出版いたしました。読まれた方も多いでしょう。近代短歌論の古典で、作歌をしようとする人は必ずよむべきものです。これ以後、鍛錬道とか実相観入とか、むずかしい理屈が多くなってしまいました。要は自分の思うことを率直に五七五七七の調子に合せて詠むということです。

内容は自分が直接経験したことでなければいけません。歌をよむということは現実の人生の意味を把握するというにもなります。しかし現実の経験が全部歌になるわけではありません。自分の中で特に深い感動をもって経験したことを言葉に表わすように努力すべきです。その経験はなるべく近い方がよいのです。その気持が自分の心で波打っているような時がよいのです。遠い経験でもその時の感じがそのまま蘇って来るようなものなら歌の対象になります。自分の心の中でそういう感動を選択するのです。

先ず選ぶということが第一段階です。その選択は自分の心の中で行われるものですから、人に聞くわけにはゆきません。従って歌の創作というのは純然たる個人的作業です。創作過程において人と交流するということはありません。自分の心を自分でふりかえらねばならない。これは随分真剣な働きだと思われま

す。こうして対象がきまったら、そのことを言葉に連らねて詠むわけですが、それがなかなかむずかしいのです。その過程で、例えば、うまく詠もう、人からほめられるように詠もうというような心の誘惑と戦わね

ばなりません。ここで言葉を正確に選ぶという努力を放棄すると、自分の気持が落ち着かないので、そこを何とかして突きめければなりません。そうして選ばれた言葉の調子と自分の心とを合わせるようにするのです。名歌というものはすべて作者の感動の経過が言葉の調子に一致しているのです。こうして歌という表現が完結するわけです。自分の心が完全にその言葉に移ってしまうと、自分というものが鏡に照し出されたような一種の解脫感、解放感を味わうことができるのです。

そういうものが味わえないなら、その歌のどこかに欠点があるわけです。その欠点をさがして心と言葉を一致させてゆく。「歌はまことだ」といわれるのは、こういう意味です。言葉と心と経験が完全に一致することを求める心の働きの、「まこと」なのだと思います。作歌が広い意味で心の修養になるのもこういう理由によるものです。

人生の真実であるならば、どんなものをよんでもかまわないわけです。人に見せるのが恥ずかしいという人がありますが、それは真実でないから恥ずかしいのです。だから発表しないことを意図して歌を作るのはよくないのです。発表できるまでその言葉を自分のものにすべきです。

ともかく没頭して作らねばなりません。我を忘れて夢中になるというのは、自分の真実に向って一所懸命になるといふことです。こういう働きの歌そのものが持っている働きののです。だから真実を表現できれば、必ず人を動かす歌ができるはずで、自分の一切の虚飾を捨て去って、自分そのものが現われて来るといふのが歌の働きののです。

それから、一首にあまり色々のことをこめて詠むと無理になります。だから、経験というものを分けて二首三首と連作にすればよいのです。ともかく、文法や用語に余りこだわらずに、当たり前前の言葉で、思い切り自分の心を披瀝するという気持でよんでみて下さい。

《合宿教室における夜久正雄氏の講義より要約》

オリエンテーションにて

九州大 西元寺 紘 毅

一言に祈りをこめて述べたしと切に求めつ言葉言葉を

まっすぐにわれを見つめしまなざしにおのづと声の高まるを覚ゆ

友だちのすぐなる心に響きしか思ひをこめしわが言の葉は

思ひをば力の限り伝へむと努めしあとの心すがしき

わがいのちこのひとときに友だちのいのちとともにあるがうれしき

新たなる友を迎へて

京都大 溝江 優

新しき友のことばを聞きしとき心にふるへ覚えたりけり

一言も聞きもらさじとわれを見る友の瞳は黒く輝く

友だちの心の中にかみしめて話す言葉ぞ胸にしみ入る

富山大 岸本 弘

なごり惜しこよひ一夜を友達と心ゆくまで語りすごさむ

防衛大 大越 雅行

岩肌のまばらに見ゆる鶴見岳いま登らむと胸たかなりぬ

友だちのうれしき顔をのぞきつつうまく写れとシャッターを切る

玉川大 二井 康雄

ぬばたまの夜を徹しても語りたし生きる欲びしみじみと思ふ  
期待もし不安も覚ゆ初合宿バスにゆられてついにわれ来し

岡先生の講義を聞きて

修猷館高

北崎伸一

日本の情緒を持ってと先生は声ふるはしつつ訴へたまふ

九州大

古川修

班員の一人一人の言の葉に思ひを尽せと師は教へたまふ

岡先生のご講義を拝聴して

日本の情緒のなきを訴ふる師のみ言葉の響きはきびし

日の本の心もちて立てといふ師のみ言葉はありがたきかな

岡先生のご講義を聞いて

亜細亜大

諸角雅夫

口にせば消え失す感動胸に抱き言ふに言はれず友の顔見き

中央大

磯貝保博

力なく足らぬおのれをむち打ちて友に心に向けてゆきなむ

明けそめし鶴見が岳を眺むれば閉せし心開けゆくなり

草深き山の斜面に飛び回る赤きとんぼを珍しと思ふ

合宿に来る車中にて

熊本大

松本義則

汽車遅れあせる気持を抑へつつ本を読みてももどかしきかな  
大阿蘇の連なる山は見えくれど汽車遅れるて心落ちつかず

東京工大 天川東作  
わが卑怯ここにはじめて見据えたり生きるといふは何ときびしき

岡山 大孝忠康夫  
人と人の信じあふことのむづかしさうちあけくれし友あるが嬉し  
真心をつくして人に接せむと二人で確める心と心を

九州大 古賀誠  
遅れゆく汽車の進みももどかしく待ちをる友の顔を思ひぬ  
共々に次代を背負ふ友だちと語り合ひたき事多くして

東京工大 内田巖彦  
行くバスの窓よりみゆる山々にわづかに偲ぶ秋の訪れ  
下山して宿にていこふこのわれに淋しさ誘ふひぐらしの声

佐賀大 楠田幹人  
にこやかに肩組み合ひて写真とる鶴見が岳はにぎはひにけり

東京理科大 高野治

流れゆく雲のあい間に日をうけて九重連山色づきて見ゆ  
駆け下りて息もきらずにかかへ飲む冷たき清水にわれはいきづく

鶴見岳下山の折に

亜細亞大 岩越豊雄

山深き小さき村のみ社に日露戦勝祝ふ碑のあり

力強く刻みし字にも偲ぼるる明治のみ代の村人の喜び

人もこぬ山の社の道ぼたに老婆は一人草むしりをり

九州大 脇坂佳秀

夏木立にひぐらし鳴きて高原のひと日はまさに暮れなむとする

草原にすず風吹きて虫の声ひとたびやみてまた鳴きそろひぬ

長崎大 森重忠臣

鶴見岳長き山道下り来てふもと近くにみ社のあり

「奉納」といふ文字の書かれし手ふきんの色は真白く軒にかかりて

けがれなき布の白きを見つめつつ献げし人の心思ひぬ

石道は茂れる杉の中にして緑のこけにおほはれてあり

早稲田大 今林賢郁

集ひ来て君にまみえし縁ありて君を知り得しそがうれしきよ

ますぐなる心もちたるみ友らのすがし言の葉胸に迫りく  
書開き友らと共に読みゆきぬまこと求むるひとつごころに

宮崎大 望月俊毅

風邪ひきしわれを友らは気づかひてあたたかき言葉かけてくるなり

老いの身の師が火の如く語り行くその言の葉の胸に迫りく

鹿児島大 田淵勝次

降りたちて宿舎に向ふわが胸はいつしかひしと引きしまりをる

なつかしき友の姿に声かくればほほゑみかへすそのうれしさよ

長崎大 内田英賢

涙して語れる友の姿見てわが胸内は熱くなるなり

重なりてはまた重なれる山脈をわれを忘れて眺めけるかな

天上を覆ふ煙雲うねりつつ疾風の如く走りゆくなり

かなたより馳せくる雲はたちまちに大なる山をつつみかくせり

岡山大 菅志郎

なだらかな山の間雲巻きて由布のみ岳は空に突き立つ

岐阜大 溝口徹

緑りなす高原に一線白くはえ横断道路貫き走る

亜細亜大 宝辺幸雄

日本の情緒を持ってとさとさるる岡先生のきびしき言の葉

師と友と小さきお宮の真清水をうましうましと言ひて飲みけり

神戸大 寺川真知夫

山下るそば道の辺に名も知らぬ小さき花のをちこちに咲く

道の辺に生ひたる山梨そを取りて友のくれしを口にするなり

山梨をひと口かめば甘ずっぱき味ひろごれり口にこもりて

黒松の天に伸びたるみ社の杜うす暗く鎮もりてをり

岡先生の講義を聞いて九州大 春藤純生

先生の厳しき言葉忘れかねつノートを開き開きして見る

亜細亜大 永島学

とつとつと語りし友の言の葉におのがおごれる心はづかし

真剣に道を求むる友だちのまなこはいとどかがやきをます

鹿児島大 北島照明

真寂しく城島の原に鳴り渡る風にまじりて虫の声する

まなかひの鶴見が岳の山すその広き野原に夕雲なびく

京都大井上慎一

汗ふきつつ山道を来れば岩かげに湧き水のあり飲まざらめやも

汗にぬれてほてりし腕に湧きいづる冷たき水の心地よきかな

知らぬこと知らぬと叫ぶ師の君の強き言葉われは忘れじ

鹿児島大藤原正教

道標に帽子をかけて肩を組みカメラに写る君ほほゑまし

電子工大末永広司

フロントの前に立ちゐるし彼の友の話しかけきぬ身の上までも

和歌相互批評にて  
九州大友池仁暢

久々に己が思ひをいつはらず歌ひあげしとわれは思ひき

一首一首進むにつれてじんじんとわが胸打たれ涙湧き出づ

岡山大伊藤三樹夫

若者の燃ゆる思ひを一にしてともに語りし日々は尊し

風涼し城島の宿に友集ひ今宵も語らむ思ひをこめて

九州大稲津利比古

全国ゆ集ひ来ませる友らとの奇しき縁を大切にせむ

若者の胸ぬち深く国思ふ心なければわが国危ふし

師の君の切々と語る姿みてわれも後にぞ続かむと思ふ

横浜国大 青本 茂

ひぐらしはおのがいのちの短さを知りて鳴けるかなしその声

熊本大平 休憲

就職のためとはいへど中途より去る合宿に心残れり

友らみな集ひて道を求めゆくにわれのみ一人去るが口をし

列車の中にて

いつしかに雨足強く窓を打ち合宿の地の思ひやらるる

雨よやめ霧も晴れてよ友だちの鶴見に登る日にこそあれば

車窓より鶴見のあたり見上ぐればさやかに晴れて緑目にしむ

京都大 福島義治

昨日まで名前も知らぬ友だちとともに語れば心楽しも

愚かなるわれの話を一心に聞く友だちのありがたきかな

友どちと思ひをこめて語らへば時のすぐるをしばし忘るる

熊本市教育委員会 高瀬邦男

語らへばとぎせる心開けて友の眸がかがやきてみゆ

神奈川県高校教諭 中村昭

雨よ降れ風よいや吹けますらをのひとつの念ひ貫かてやは

熊本市小学校教諭 赤星宣利

むらさきの山畳々と続きをり日本の山河新しく見ゆ

癌に臥す友をしのびて 福岡県中学校教諭 向山正

高原の夜半のしじまに友の死の近きを思ひ胸迫りくる

あかねさす夕焼け空にそそり立つ由布はあやしく雲をよびをり

日の本の教への清水の源流にあひたるごとし城島合宿 東京女子大 梅田咲子

かの友は長き休暇をつつがなく過ごしをるやと今日も便りす

合宿のこのきびしさを感動をいかにして告げんかの友のもとに

男の子らの力こもれる発言を聞かせてやりたしわが弟にも

岡先生を見守り給ふ奥様を見て 学習院大 小田村静代

師の傍にやさしく清くよりそふは信もて生きます手本なるかな

鹿児島大 林 佳代子

生命をも惜まず恋に生くるてふ大和なでしこにわれもなりたし  
師のことばひとつひとつにみちあふる大和ごころをわれも継ぎたし

武蔵野女子短大 田川 美代子

野草みて野草のいのち思ふ時人息づくと師はいひ給ふ

奥様といたはりあひつつ帰らるる師を玄関に皆で送りぬ

いく度もふり返りつつ帰らるる師のみ姿の尊きろかも

東京大学 脇山 早久良

すず風のさやかにわたる木立にも秋を告ぐるかひぐらしの声

友どちと小さき花の名尋ね合ひ顔ほころばせめづるうれしさ

草むらに群れて飛びかふ赤とんぼ夕陽を浴びて羽のきらめく

× × ×

上 田 通 夫

こぞの夏睦みし友らまた見むとこたびも我は集ひ来にけり  
駅を出でま近き店に立ち寄りて靴を買ひたり白のかろき靴

あとひとときと思ふに心急がれて待ちてあるひまをバスははや来ぬ  
のぼりくればすすきくさむら風吹きて城島たかはら秋立ちにけり

木内先生を

毛利潮

手力男の命偲ばゆたくましく世界の岩戸開かむとする

国の事我が事として思はずば誰の国にか成らむとすらむ

百崎素明

過ぐる日は御著書ひもどき慕ひこし師のみ姿に今ぞまみゆる  
ありがたきゑにしなりけり眼の前の師のみ言葉に胸迫る我は

パネル・デイスカッションを聞きて

沢部寿孫

たじろがず深めゆかなむ先哲の言の葉草にこもる思ひを

み国いまだならぬときみおやらの思ひ正しく継ぎて生きなむ  
永久の生命に触るる悦びをこの合宿に思はしめらる

加藤善之

あさみどりすみなす空にそそり立ちあたりをはらふ由布が御嶽は  
高原の木の間がくれに聞く鳥の声のすがしも風のまにまに

岡先生の人格に接して

まちがひは直ちに正せとのたまひし敵しきことば胸にしみ入る

鶴見岳にて

三重野 梯次郎

あらがねの地のをりなす山脈なみの起伏は青し豊の国原

頂きに湧く白雲のたちまちにうつりて淡く空に消えゆく

亀井孝之

顔色がさえぬがどが悪いかとまゆをひそめて友は言ひたり

心知る友の言葉はうれしかり一言にても心なごみぬ

いままさに日ののぼらむとして東の山の頂き赤くそまりぬ

筑後川

国武忠彦

筑後川この川沿ひになき父は自転車に乗り日田に通ひき

わが父は絵筆をもちてこの川をひぐらし画くが愉しみなりき

幼き日父のゑがきし馬の絵を村の神社に見つけてうれし

鶴見岳山頂にて

小林国男

はるかにも見はらしつづく空と山海をのぞめる鶴見のいただき

いく年ぶりあひ見し友とはるかにも雲にかくるる九重をみるかな

合宿生活を

長内俊平

夕映えを残しつ嶺のくれゆけば地にしむごとくひぐらしの鳴く  
日本人となるは難しもさはされどわれらをおきてだれかしかせん  
再びも生きゆく力わがむねに静かにゆたかにみち来る如し

班別討論にて

松吉基順

涙ながし思ひを叫び訴ふる若きをのこの言葉尊し  
純真な若人の叫び身にしみて城島の宿ゆ去りがてぬかも

鶴見岳下山のとき

上村正波

急ぎ足山路を下る白シャツの友らの背にも木もれ陽光る

全体交歓の場にて

山本博資

学びたることも楽しく語りゆく友のかんばせはれやかに見ゆ  
握手する友のひとみはかがやきてこの集ひをば尊しといふ  
この言葉この思ひをば忘れじと新たな友を求めゆきたし

班別討論にて

上村和男

国論の二大分裂の悲しみを悲しみとしてうけむ我らは  
美しき祖国の命を信じつつ吾らははげまむ生命もろとも  
独立の国なる祖国を分裂へ追ひやる思想とつながりを絶て

岡先生のご講義を聞きて

徳地康之

憂ふべきことも知らぬと師の君は力強くも訴へ給ふ

一言一言心をこめて説き給ふ師の御言葉の強きひびきは  
師の君の心こもれる御言葉を心に留めつつ学びゆきなむ

野間口 行 正

先人の真心こめてきづきたる御国の生命に参じ生きなむ

国のためつくせる師らのみ言葉は心にせまりて勇気わきいづ

川 井 修 治

一年の思ひをこめし甲斐ありて今開けむとす城島合宿

ここだくの若きらつどひ合宿準備にいそしむ姿見ればうれしも  
おちこちゆつどひ来りし友どちの顔をし見れば力湧きくも

豊の国城島が原の空高く生命のほのほ燃やしつくさむ

行 武 靖 枝

心知る友と語らふ楽しみのよみがえり来る君と語れば

ひととせの月日めぐりてつつがなき師のみ姿に逢ふが嬉しさ

田 中 秀 男

久しくも相見ぬ友に会はむとてはやる心にわれかけつけぬ  
久々に友の顔みて声聞けば過ぎし年月忘るるここちす

瀬上安正

濃みどりの高くそびゆる山の辺に友ら集ひて御旗掲ぐる  
日の御旗風のまにまに昇りゆきてさやか風の見ゆる心地す  
壮重の楽の調べの流るるに身内しまりて心高なる

田口君に

小県一也

左手でかきたるたより二度までもよさせし君の病はいかに  
小浜にて合宿おもふと君がたよりたづさへつきぬ合宿の地に  
山脈はみどりしるけく吹く風はひややかなりと友につげなむ

徳永正己

心尽し友等と共に書を読めば先人の声の響く思ひす  
道を求め求め続けし先達の髪の毛の白きに涙こぼれぬ  
まどひつつ四十才を過ぎてまたまどふ己が心を恥づかしと思ふ

講孟余話をよみて

名越二荒之助

二千年をへだてて孟子松陰の心に生きつつ叫ぶきびしさ

鉄の鞭ふりかぶりつつうち振ふ言葉生き生きわが耳どよもす  
永久の良図を捨てて目前の近效に従ふと衝きし師の君

合宿開始

山田輝彦

五とせのいたづき癒えて来し友の野太き声よひたになつかし  
亡き友ら病みし友らのつきせざる思ひかしくみ合宿に入る  
息の緒にこの一筋を思ひつつ過ぎ来しものかこれの十年はととせ

脇山良雄

若き友集へる宿につきにけりさてこそ我も打ちや語らむ  
我が宿の窓辺ま近くそびえ立ち鶴見の岳はみどりにじめり  
日の本の遠き理想を念ふごとと高原のはてに見ゆる群れ山

西元寺君の所信表明を聞く

小柳陽太郎

聞くままに胸迫りくもさまさまのこと多かりし月日おもへば  
すぎし日のためらひすでに今はなくおもひ爽やかに君語りゆく  
りん／＼とひびくことばの身に迫り思はず涙あふれいでむとす  
ありがたきゑにしなるかな若きらとおもひ一つに生くるつどひは

合宿への車中にて

青砥宏一

まひるまの暑き日うけて赤瓦ひかる家並みつづく石見路いはみ

山の上の入道雲に入日さし豊後国原日の暮れむとす

夜のしじまあたりおほへどさしてゆく宿舎おもへば心にぎはし

島田好衛

みはるかす豊とよの山脈やまなみそが中に天そそり立つ由布の岳はも

豊の国の天もどろに火を噴きしいにしへ思ほゆ荒き岩根に

そそり立つ由布岳のごと揺がざる心を持ちて生きむとぞ思ふ

輪読の席にて

宝辺正久

声合はせよみあげゆけばおのずからうましきしらべひびきよろしも

もろごゑになり出づるひびきうましかも一人もだして友の声をきく

高木尚一

大布ぬのを木の間に張りて友ら迎ふ言葉しるせり墨くろぐろと

この言葉我は忘れじ全国の友ら迎ふるその言霊を

宿に入れば友らいませり深き思ひ内にたたへてほほゑむ友らよ

三経義疏の講義終りて

夜久正雄

足らはざる心ながらに心つくして太子の御言葉つたへまつりぬ

こともなくよみすぐすべき經典の一語一語をきはめたまへり  
ひろやかにとどこほりなきみことばのしらべにみ子のみ心あふぐ

夜久大兄の講義を聞きて

小田村 寅二郎

經典の一句に寄せし聖徳のみ子のみ心現うつしくここに

現し世に処し給ひけるみ心をみことばに辿り現しく偲ぶも  
生命こもる一句にみ子はみ心の思ひのたけを注ぎましけむ

## あ と が き

「国民同胞感の探求」三部作、それにつづいた「新しい学風を興すために」三部作を終えて、今年からは「日本への回帰」という題のもとに新しいシリーズを出版することになりました。最近でこそ日本という言葉も人の心にしみ入る力を、わずかながらも蘇らせつつありますが、まことに長い民族流浪の年月であつたと思います。日本に帰る、その素材なおもいを素材にうけとめ、そこに生命の力源を求めるときのみ、私たちの思想生活は健康な力を回復するはずです。

「日本への回帰」という題名には、そのような意味で、すべての国民が祖国の生命の中に自己の生命の根源をたしかめていただきたいというねがいをこめているわけですが、それとともに城島合宿において、すべての学生が味わつた「日本の胸に帰つたときの、おどろきとよろこび」もまたその中にこめられているのです。

今編集の筆をおこうとするとき、早稲田大学ではいつ果てるかもしれない闘争がつづけられていることが新聞に報道されています。かかる紛乱もまたそのよつて来るところは、大学側といわず、学生側といわず祖国を見失つたところに築きあげられてきた、これまでの学問の誤りにあるといわなければなりません。この書物がかかるすさみ切つた精神の風土に何がしかの潤いを与えて、青年学生の心の中に力強いものが芽生えていく一助ともなればこれにすぎるよろこびはありません。

なお城島合宿教室における川井修治氏の「現代日本の課題」という講義内容は、近く出版される国民文化研究会シリーズNo.2 (No.1は久正雄著「古事記への道」)に収録される予定なので、この書物から割愛させていただいたことを附記しておきます。

昭和四十一年五月五日

編集委員

(岡 山)	笠岡商業高等学校教諭	名 越	二荒之助
(下 関)	実 業	宝 辺	正 久
(北九州)	若松高等学校教諭	山 田	輝 彦
(福 岡)	宇美商業高等学校教諭	小 林	国 男
(福 岡)	修猷館高等学校教諭	小 柳	陽太郎



國民文化研究會出版圖書目錄



# 混迷の時代に指標を求めて

## 青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ—国民文化研究会—は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人たちであるから。次代を背負うものは諸君である。

混迷に沈淪しつつある祖国の命運を開く鍵を托されたものは、諸君をおいて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心のままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれでたこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたとなどは、味うべき問題をもっていると思う。

—「はしがき」から—

## 講義

経済学の考え方と日本経済への

適用および政策の方向：石村暢五郎

平和革命論の検討：川井修治

世界史の発展：広田洋二

日米開戦の真相：渡辺明

ソビエト第二十回大会における

「スターリン批判」を中心に：日下藤吾

マルクス資本主義崩壊必然論

について：吉田靖彦

共産治下国民生活の実態：名越二荒之助

昭和史をめぐって：森裕三

社会主義文学理論の検討：山田輝彦

民族的抒情の回復を阻むもの小柳陽太郎

抒情詩論：夜久正雄

日本政治の再建のために—特に天皇制の

問題について—：小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等—写真

A 6版 定価50円 ㊦20円



# 民族自立のために

—ぼくらはかく祈り かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に

この書を捧げる—

国民文化研究会

## 目次

民族復興の根底をつちかうもの

合宿にいたる経過

合宿人員の構成

経過報告

班別編成

班別討論

全体討論

講師別討論

合宿感想集

参加者からの手紙

参加学生、青年に訴う

—写 真—

## 講義

現代日本の盲点……………名越二荒之助

現代思想の根本課題……………川井修治

歴史観の諸問題……………浅野晃

世界経済の基本的動向……………伊部政一

日本経済の特質と

経済計画の方向……………石村暢五郎

日本文化の位置……………竹山道雄

現代哲学の窮極の問題……………高山岩男

日本文化の源流—聖徳太子の

信仰思想を中心として……………高木尚一

日本文化の血脈……………南波恕一

学生生活と国民生活……………小田村寅二郎

新書版 113頁 定価 100円 ㊦30円

# 民族復興の根柢を培うもの



○パネル式座談会「共産社会に住んでみて」

—在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏

同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏

○参加者全員に和歌創作の手ほどきをなし、

全員創作を行なう。

○班別討論会

○感想発表会

……わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念じながらこの書を刊行した。

—写 真—

## 講 義

合宿教室の意図するもの……川井修治

現代日本の盲点……名越二荒之助

所謂、資本主義社会と

社会主義会について……石坂豊明

共産主義対策への私見……木下彪

経済学の日本的思考……石村暢五郎

古典のいのち……南波恕一

聖徳太子研究と現代……高木尚一

日教組は現状から

脱却すべし……浜田収二郎

人間性に立脚する政治……小田村寅二郎

分裂を統一に導くもの……南波恕一

民族の明日を求めて



新書版 250頁 定価 200円 40円

# 民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまう  
っていたり、「あたりまえのこと」が、かえってもの  
めずらしげに見られたりしている。

国を愛することも、民族の道統を求めることも、なに  
か、かたくなな人ただけのものにされてしまっ、現  
代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、  
はれものにさわるような、こわいしろものにされたまま  
になってしまった。

## 目次

- 第一日 友らの邂逅(かいこう)
  - 第二日 民族の意志回復のために
  - 第三日 思想の流れをみつめて
  - 第四日 よろこびと前進のために
- 附 合宿感想集、外  
—写 真—

## 講義

- 共通の広場の形成するもの……瀬上安正
- 人間性・解放の道
- 国民共同体の現実—基盤 小田村寅二郎
- 天皇制の本質……森 三十郎
- 日中関係の過去・
- 現在・将来……木下 彪
- 道徳の周囲……山田輝彦
- バイブルを統綜する
- 日本文化の遺法……名越二荒之助
- 生理学・医学の流れ……小川 幸男
- 階級史観と民族の問題……川井 修治
- 日本における社会主義の運命
- 革新陣営の発生と
- 現状および将来……菊池 紳隆
- 戦後意識の論理
- 現代教育刷新の基本課題……勝部真長
- 詩的精神興隆に
- 期待するもの……小田村寅二郎

B 6版 365頁 定価 500円 90円

(三部作その一) 理想社 刊行一

# 国民同胞感の探求



## 目次

はしがき

「合宿教室」誕生の背景

一、現代の国民思想について

二、全学連の動きについて

三、全学連にどう対処すべきか

四、時代の断層と取り組んで

「合宿教室」運営のあらまし

一、講義と班別討論の関連性

二、チューターシップ

三、人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇「合宿教室」の記録

一、未知の者ここに集う(第一日)

二、緊張する心を講義と討論に(第二日)

三、心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)

四、「時代の断層」をふみ越えて(第四日)

五、国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から

あとがき

写真

## 講義

人生・学問・祖国……………川井修治

学生生活に対する要望……………宝辺正久

現代と心理戦……………今立鉄雄

学生運動への疑問点……………植木九州男

社会思想の構造と

マルクス主義……………長野敏一

学問論……………戸川尚

陶淵明の詩における

東洋的人間像……………津下正章

わが国固有の人間観の特徴……………野口恒樹

日本人のころ……………花田大五郎

マルクス経済学の生成と

近代経済学……………石村暢五郎

畏と敬と恥……………水野武夫

第二次大戦論……………中山優

歴史なき現代に思う……………木下彪

マッカーサー憲法と

国民主権……………森三十郎

平和国家建設の

基本的課題……………小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6 版 433頁 定価 560円 千 100円

(三部作その二) 一理想社 刊行一

# 続 国民同胞感の探求



## 目次

はしがき  
現代の問題点

一、初の宇宙人・ガガーリン少佐

二、ソ連の教育と日本の教育

三、全学連と大学自治会

付、自治会活動への所感

“雲仙合宿教室”の目ざしたも

“雲仙合宿教室”の記録

一、学生による全体討議(第一日)

二、講義から班別討論へ(第二日)

三、唯物史観の横行を許さず(第三日)

四、経済の諸問題とその研究方法論(第四日)

五、“開かれた日本人”へ(第五日)

はしがきの感想文から

十日後に書かれた感想文から

あとがき

— 写真 —

## 講義

体験と思想……………夜久 正雄

現代の思想的課題……………齊藤 知正

新中国建設の原動力……………佐藤 慎一郎

日本文化の伝統と  
現代的意義……………黒岩 一郎

現代政治の批判と  
新しい指標……………羽田 重房

世界の経済と  
日本の経済(一)……………木内 信胤

良識について……………花田 大五郎

五日間の生活を  
ともにして……………小田村寅二郎

思いのままに訴う……………

木下 彪・野口 恒樹

水野 武夫・峯 辰次

植木九州男・津下 正章

班別討論・意見発表会・検討会等

B6版 325頁 定価 500円 780円

(三部作その三) 理想社 刊行

# 続々 国民同胞感の探求

続々国民同胞感の探求

## 目次

はしがき

国民同胞感………小泉 信三

—毎日新聞より転載—

学問の興隆のために

正しい研究方法を求めて

………小田村寅二郎

第二次雲仙合宿教室のあらまし

合宿教室における講義(下記)

合宿教室運営の焦点

一、班別討論と夜の検討会

二、大教協・国文研会員の所見発表

三、合宿教室の総括的所見

はしがきの感想文から(77通)

あとがき

—写真—

## 講義

国民同胞感の育成への

努力と指向………小田村寅二郎

学問と人生………津下 正章

EECをめぐる世界の経済と

日本の経済………木内 信胤

学生時代を回顧しつつ

現代の学生諸君に………花田 大五郎

吉田松陰を中心とした

幕末日本の文化精神………川井 修治

小林秀雄先生のご講義

「現代の思想」………国武 忠彦記

(所見発表) 大学教官有志協議会………

水野武夫・黒岩一郎・末吉 哲

植木九州男・吉田靖彦

国民文化研究会………

小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之

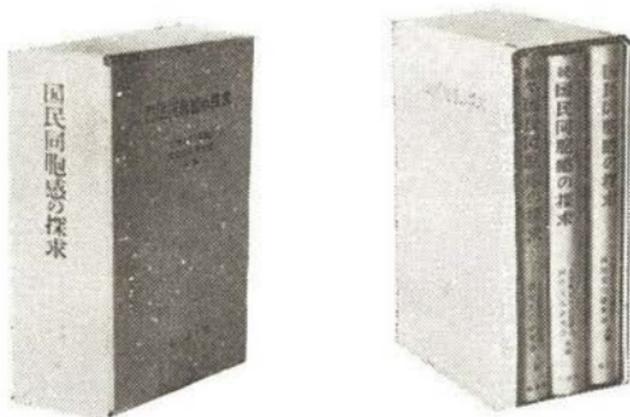
宝辺 正久・加藤善之・徳永正己

坪井保国・加藤敏治・関根康弘

瀬上安正

“合宿教室” レポート { No. 5 国民同胞感の探求  
 No. 6 続国民同胞感の探求  
 No. 7 続々国民同胞感の探求  
 大学教官有志協議会 } 共編  
 国民文化研究会 }  
 一理想社 刊行一

## 国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 千 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この三部セットは、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

● 合宿教室 ● レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

……お申込みは国民文化研究会へ……

新書版 248頁 定価 200円 円50円

# 新しい学風を興すために

(附) 合宿教室における短歌創作の記録



「いまここに第七回目の合宿教室を迎えるにあたって、私たち主催者は今回からは「国民同胞感」を「探求」という心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とはやや心組みを変えております。すなわちこれからは「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拡がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿教室を踏み出したいと考えているのです。」

「この合宿教室のめざすもの」から

―巻末には参加者全員の短歌作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、二五八首の短歌を収録した―

## 目次

- 一、国民同胞感樹立のために  
第七回「合宿教室のあらまし  
この合宿教室のめざすもの
- 二、合宿教室における講義  
現代の思想的課題……福田 恆存  
世界の見方……木内 信胤
- 三、合宿教室における短歌創作  
短歌の哲学と技術……夜久 正雄  
第一回短歌創作と批評  
第二回短歌創作の記録

新書版 298頁 定価 300円 50円

# 新しい学風を興すために

## 第二集

合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破って、友情の世界に開眼する場でなければならぬ。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失われつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がつき合わされてゆくならば、それは国の根底を培う大きな力となるであろう。

—「はしがき」から—

### 目次

#### 一、合宿教室の意義

「戦後」二十年の日本とわれら同人の折り

第八回「合宿教室」のあらまし

#### 二、合宿教室における講義

物の考え方……竹山 道雄

最近の世界と日本……木内 信胤

(附：パネル・ディスカッション)

現代の政治的危機……木下 広居

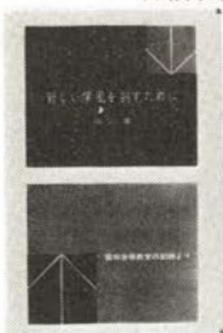
#### 三、合宿教室における論読と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化

創業」の論読……小田村寅二郎

短歌創作について……山田 輝彦  
夜久 正雄

雲仙合宿歌集



新書版 299頁 定価 300円 50円



# 新しい学風を興すために

## 第三集

この合宿ではお互いに思想を鍛えて行くわけですが、こゝで注意しておきたいのは、思想とは生活の根本を支える心の姿勢そのものだということです。普通、思想というと、思想大系と殆んど同義語とみなされておりますが、本来思想とは体系化された複雑なものではなく、単純素朴なものでなければならぬと思います。他人の思想体系にすがってしか、もの言えない人が多い今日の風潮において、特にこの点を強調しておきたいと思えます。

——「思想の形成」から——

### 目次

#### 一、新しい学生運動の展開

雲仙合宿から桜島合宿へ

第九回「合宿教室」のあらまし

思想の形成……夜久 正雄

#### 二、合宿教室における講義（その一）

日本の政治と外交……広田 洋二

日本の政治と経済……木内 信胤

（附：パネル・ディスカッション）

常識について……小林 秀雄

#### 三、合宿教室における講義（その二）

歴史と人生観……川井 修治

現代日本の二つの問題点……

小田村寅二郎

歌集——この一年の学生短歌作品より

A 6 版 146 頁 定価 200 円 750 円



著 者

# 聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業

— 黒上正一郎 著 —

原著 第一高等学校昭信会版

昭和十年七月二十一日

本書は原著の約半分を  
戦後に再刊したもの

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さ  
で死去した。明治三十三年、徳島市の素  
封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀  
行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少  
年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮  
の経文から、聖徳太子の研究に進み、特  
に本書の述作には、一語一句に心血を注  
いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一  
高に昭信会、高師に信和会という研究グ  
ループが生まれたが、共産主義運動の渦  
巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生  
を指導し、太子のご精神を若い次代の青  
年に伝えたのである。

## 目 次

再刊上梓のことは

序 説 東亜大陸文化と日本・推古朝と  
明治時代・日本文化創業の総合  
的指導者・聖徳太子の内治外交

序 説 付 聖徳太子の体験過程

第一編 聖徳太子の人生観と政治生活

国民生活の内的改革と三宝興隆

憲法第一条と十條―蒼生と共なる道

自他分別の心理を批判する内的平等

観

第二編 聖徳太子の信仰思想と国民精神

常住法身と帰依の対象

仏法僧の意義

一体三宝と別体三宝

太子のおことばと明治天皇御製

古事記に表現された現実的民族精神

万葉集の防人（さきもり）の歌

聖徳太子憲法十七条

聖徳太子の年譜

聖徳太子の時代：解説……高木尚一

附、黒上正一郎遺歌抄

B 6 版 206 頁 定価 250 円 763 円

— 明治書院 刊行 —

# 歌人・今上天皇

夜久正雄著 (アジア大学教授)

歌人・今上天皇

夜久正雄著



明治書院



## 御歌

高原に

みやま

きりしま

美しく

むらがりさきて

小鳥

とぶなり

## 目次

まえがき

御歌研究

御歌の語法・御歌の音調・御歌の内容・家庭感情の御歌・平和の祈り・御歌と日本現代史・御歌歌風の展開  
叙景の御歌・三十年発表の御歌・明治天皇御製との比較研究・御歌「ともしび」

御歌解説

歌会始の御歌・終戦直後の御歌・植林関係の御歌・地方巡幸の御歌・生物学者としての御歌・神社祭祀関係の御歌・母宮貞明皇后をしのぶ御歌・ご家庭生活の御歌・その他の御歌

あとがき

初句索引

口絵写真

# 歌よみに与ふる書

(他四編)

「子規の文章は難解だが、まさかこれを現代語訳して読ませるわけにもゆくまい。それでは子規の語調が消えてしまうからである。」

語調が消えるというのは、筆者の情意がなくなってしまうということである。

この情意をともしない灰色の理屈、実行意志のない観念—つまりイデオロギーを排したのが子規の歌論だ。その歌論から情意を抜きにするわけにはゆくまい。子規のものは、どうしても原文のまま読むよりほかに方法はない。

—「あとがき」より—

## 目次

歌よみに与ふる書

..... 明治三十一年

あきまろに答ふ

..... 明治三十一年

人々に答ふ

..... 明治三十一年

「歌話」

..... 明治三十二年

「墨汁一滴」抄

..... 明治三十四年

あとがき・解説

..... 夜久 正雄

B5版(8頁) 毎月1回発行  
昭和36年11月創刊  
発行所 国民文化研究会



— 月刊 —

# 国民同胞

定価 1部20円 年間360円(送料共)

---

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情をあまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにさきやかな機関紙であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに、是非とも耳をかたむけていただきたいと思う。

---

申込先(この機関誌に限り下記の通り)

下関市南部町3 宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部

— 振替 下関1100 —

— 日本への回帰 —  
(第一集)

昭和四十一年五月二十日発行

定価三〇〇円  
〒 50 円

編者  
大学教官有志協議会  
社団法人  
国民文化研究会

編集委員代表  
小田村寅二郎

発行所  
社団法人  
国民文化研究会

東京都中央区銀座七ノ三  
柳瀬ビル三階  
振替東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします。

104 東京都中央区銀座七―一〇―一八(柳瀬ビル三階)  
社団法人国民文化研究会

電話〇三―三五七二―一五二六(代)



